

1930年代メキシコにおける
日本エビトロール漁業
と日・墨・米三国関係の
研究

日系漁業参入移民の社会的関係
性に焦点をあてて

作成者

杉山 茂

当論文は、科学研究費基盤（C）（2）13
610448のために提出されたものです。

静岡大学情報学部

2008年4月

静岡大学附属図書館



030850058 6

要約

国際関係史における漁業移民の社会的関係性

1930年代後半米国・メキシコ国境海域における日系漁業移民、水産資本およびメキシコ・米国・日本の三国関係

杉山茂

本研究は、国際関係史研究を踏まえて、1930年代後半のカリフォルニア湾を含む米国・メキシコ西岸国境海域で漁業に参加したり関与したりした日本人移民が、移民先で築いた現地社会との社会的関係性を明らかにした。社会的関係性を明らかにするため移民が従事した生業にかかわる史料と外交関係史料に焦点を当てるとともに、現地でフィールド調査を行った。その結果、以下の4点が明らかになった。まず、漁業に参入した日系移民は、本国で資本主義的で高度化していく水産漁業技術を導入あるいはそれとシンクロさせながら自ら漁業技術を高めていき、その技術をバックに米国大水産資本のみならず日本の財閥系の資本を動員しながら、移民先で優位な社会的立場を築いた。直接漁業に従事せずとも、漁場進出した日本の水産資本に協力することによっても、優位な立場を獲得した。このため、移住先では、他の漁業集団に対して対等な競争者あるいは指導者としての自己確定を行うことができた。第2に、このような優位さは、移民先が高度な漁業技術を受け入れる準備のあったことも大きな要因であった。米国においては大缶詰会社が、メキシコにおいては近代的な水産産業を構築しようとしていた政府が存在していた。

第3に、日本の水産技術の優位性がメキシコ政府による水産技術導入政策をもたらしたが、これは同時に進行しつつあったアジア・太平洋戦争のアジア戦線の悪化にともなう日米関係の悪化の中で、米国政府によるメキシコへの水産技術援助政策を公法63の実施という形で生み出した。第4点として、フランスの降伏と日米戦争の勃発に至る国際関係の悪化の中で、メキシコ政府は日本の水産資本の技術援助を断念して米国に依存し、日本水産資本の存在をバックに維持されていたメキシコの水産産業に参入していた日系移民の技

術的社会的に優位性が失われていった。そして、日米戦争勃発が、漁業の現地化の動きも見せていたその息の根をとめた。

目次

目次.....	i
図一覽.....	ii
表一覽.....	iii
謝辞.....	iv
序論.....	1
第一章 1930年代のまでの日本・メキシコ関係.....	10
第二章 1930年代カリフォルニア沖における日系漁業活動の展開.....	18
第三章 日本水産資本のメキシコ進出.....	38
第四章 公法 63 の実施と日本水産資本の撤退.....	51
結論.....	62
参考文献.....	65
Appendix.....	73



図一覧

図1 アベラルド・ロドリゲス資本の事業展開.....	14
図2 マイワシのレジーム・チェンジ.....	19
図3 Jig Boat.....	20
図4 湊丸.....	20
図5 以西底曳網漁法.....	21
図6 メキシコ人漁民の投網漁業.....	21
図7 カリフォルニア湾のエビ漁場.....	24
図8 南カリフォルニアにおけるマグロー一本釣り.....	35
図9 日水「遠洋」トロール漁業の活動海域（東シナ海および南シナ海）	39
図10 アウレルアノ・アナヤと日水幹部.....	42

表一覽

表 1	1937 年の日系漁民所有漁船.....	28
表 2	1938 年日本水産のメキシコ派遣漁船.....	39
表 3	1937 年 6 月～1938 年 6 月漁期の日本水産によるエビ漁獲実績.....	48

謝辞

本論完成には多くの方々にお世話になった。誰よりも 2002 年 12 月から 1 月の調査において、駆け出しの私の研究テーマに根気よく付き合っていた Kenji Yamamoto, Tsue Murakami, Yukio Tatsumi, Joe Wada, Shigeru Shinfuku をはじめとするターミナル島元島民の方々に深く感謝をするとともに、帰国後の困難で連絡を怠り「フィールド荒らし」という結果を生んでしまったことを深く詫びなければならない。とりわけ、存命の一世で最長老であった Tsue Murakami さんの、苦しい時代をキリスト教があったから耐えることができたのだという言葉が、ターミナル・アイランダー新年会の光景を背景に、いまでも生き生きと蘇える。

現在、東京海洋大学と名称をかえている東京水産大学の木原興平、森永勤、根本雅生各先生には、『国司浩助氏論叢』や小林茂夫『「海のバタ屋」の記録』など貴重な図書を貸していただくばかりか、水産大学の闊達な研究現場を見せていただいたことが新鮮であった。また偶然修士課程在学中であった従姉中山裕美子にも、研究室紹介などでお世話になった。

漁業史は素人の私にいろいろな道筋を教えてくれた古林英一北海学園大学経済学部教授にも感謝したい。筆者が京都大学大学院時代に出入りしていた農学部農業経済学研究室で研究をしていた旧友に、研究途上で再会することは楽しいものであった。また、京都の松井春子氏、九州大学大学院生物資源環境科学府附属水産実験所松井誠一教授から、松井佳一博士に関する貴重なお話を聞かせていただいた。このとき、松井博士のご実家が、今出川通に面して京大北部構内のすぐ西側にあったところを知って驚いた。このほか、立命館大学米山裕氏、全米日系人博物館国際日系研究プロジェクト最高責任者アケミ・キクムラ・ヤノ博士、メキシコ低カリフォルニア州エンセナダ在住の Antonieta Kiyoko Nishikawa Aceves 氏、マルハ下関支社大洋マリーナの方々に大変お世話になった。感謝を捧げる。

序論

第二次世界大戦に向かって国際関係が悪化しつつあった 1930 年代後半、カリフォルニア湾を含むアメリカ合衆国およびメキシコ合衆国の国境海域において、米国・日本・メキシコ資本による資本集約的な漁業が活発に行われた。日米両国の水産技術援助競争をともなった日本水産をはじめとした日本の水産大資本、カリフォルニア州南部の地方的水産会社、そしてメキシコ資本の間の競争の中で、漁業従事者の多くはヨーロッパ諸海域および日本各地からの移民であった¹。その漁獲物は、缶詰用および一本釣り撒き餌用のイワシ、缶詰用サバ、カツオおよびマグロ（ビンナガマグロ *albacore*）、そしてクルマエビであった²。本論は、3つの国民国家の利害関係に規定されながら、移民漁業者の出身地域／国家の資本や技術、市場へのアクセスが、漁

¹ 移民漁業者の活動については、サンディエゴ地域史研究が優れた成果を出している。代表的なものとして中国系漁民について Murray Lee, "The Chinese Fishing Industry of San Diego," *Mains'1 Haul: A Journal of Maritime History* 35, 2 and 3 (Summer 1999) 6-13; 日系漁民の活動は、Donald Estes, "Silver Petals Falling: Japanese Pioneers in San Diego's Fishery," *ibid.*, 28-46 および "Before the War: The Japanese in San Diego," *The Journal of San Diego History* 24, 4 (Fall 1978) 425-56 がある。このほかにエステスは *The Journal of San Diego History* 日系漁民に関する重要な論文を寄稿しているが、これらは <http://www.sandiegohistory.org/journal/journal.htm> において閲覧可能である。日系のみならずイタリヤやポルトガル系移民の漁業活動の通史として、August Felando, "California's Tuna Clipper Fleet: 1918-1963," *Mains'1 Haul: A Journal of Maritime History* 32, 4 (Fall 1996) 6-17; 33, 1 (Winter 1997) 16-27; 33, 3 (Summer 1997) 28-39 がある。

² 本論が対象とする日本漁船団や漁業専門家の活動に関する文献として最も重要なものは、松井佳一『メキシコ風土誌』（育生社、昭和 40 年）であろう。松井は、日本水産のエビ漁業事業の一環として、1937 年 3 月から 1938 年 2 月までの一年間、当時のメキシコ大統領カルデナスとともにメキシコ各地を視察するほか、後述するようにさまざまな水産技術援助をメキシコに与えた。そのほかに、大洋漁業八〇年史編纂委員会『大洋漁業八〇年史』（大洋漁業、1960 年）、日本水産『日本水産 50 年史』（日本水産、1961 年）、岡本信夫『近代漁業発達史』（水産社、1965 年）、石田雄『メヒコと日本人』（東京大学出版会、1973 年）、酒向昇「日本のエビ漁業の沿革史」東京水産大学第 9 回公開講座編集委員会『日本のエビ・世界のエビ』（成山堂書店、1984 年）236-257 頁などがある。酒向によれば、戦前のメキシコ産エビは、「湊エビ」と命名され寿司種として人気を博していた。また、1960 年代半ばまで、メキシコは日本向けのエビの最大の供給国であった（村井吉敬『日本人とエビ』（岩波書店、1988 年）。近年の研究成果としては財閥・商社史研究の側面から、三島康雄「水産会社と総合商社の協調と反発—カリフォルニア湾のエビ資源をめぐる—」『経営史学』第 38 巻 2 号（2003 年）、1-26 頁がある。また、マグロ漁業については、Don Estes, "Kondo Masaharu and the Best of All Fishermen," *The Journal of San Diego History* 23, 3 (Summer 1977): 1-19 と José Adan Chairez A. *Historia de la pesca del atún en México* (Ensenada, B.C., México: Editorial Chairez, 1996) を日系移民及びメキシコに焦点をあてたものとして示しておきたい。

場における社会的な関係を規定していたことを明らかにする。また、カリフォルニア湾における移民を介在させた日本漁業資本の進出は、日本の水産技術援助をともなっていた。第二次世界大戦後にアメリカ合衆国が発展途上国に対して展開する政府活潑援助の萌芽が、日米間の技術援助競争の中から生まれてくる過程も明らかにする。

以上の米国・メキシコ国境海域における漁業活動と漁業移民の役割と第二次世界大戦後の政府開発援助政策の誕生を明らかにしながら、本論は、メキシコと米国、日本の3つの国民国家間の国際関係史研究の欠落を埋めつつ、移民史研究における陸地への偏重（農業および商業）にも修正を加えたい。国際関係史研究において、とりわけ1930年代の米国・メキシコ関係史には多くの研究が集積されており、本論が議論を展開するメキシコ政府ラサロ・カルデナス（Lázaro Cárdenas）政権に対する米国の外交政策は、その主要な研究テーマであった。1930年代の米国の対メキシコ政策は、ナチス・ドイツなどの差し迫るファシズムの脅威に中でラテンアメリカ諸国のナショナリズムに譲歩する「善隣外交」を象徴するものとされてきた。「善隣外交」の解釈をめぐる議論は、ラテンアメリカ諸国のナショナリズムに基づく政治に干渉しないという不干渉を評価するものと、ラテンアメリカを経済的に支配しようとするアメリカ合衆国の政策であったという二つの対立しあう解釈があった³。しかし、いずれの解釈もカルデナス政権を行為主体として十分と

³ 代表的な研究として次のものがある。Bryce Wood, The Making of the Good Neighbor Policy (New York: Columbia University Press, 1961); Lloyd C. Gardner, Economic Aspects of New Deal Diplomacy (Madison: University of Wisconsin Press, 1964); Miguel Wionczek, El nacionalismo mexicano y la inversión extranjera (México, D.F.: Siglo Veintiuno, 1967); David Green, The Containment of Latin America: A History of the Myths and Realities of the Good Neighbor Policy (Chicago: Quadrangle Books, 1971); Lorenzo Meyer, Mexico and the United States in the Oil Controversy, 1917-1942, trans. Muriel Vasconcellos (Austin: University of Texas Press, 1972); Abraham F. Lowenthal, "United States Policy toward Latin America: 'Liberal,' 'Radical,' and Bureaucratic' Perspectives." Latin American Research Review 8, no. 3 (1973): 3-25; Luis Medina, Del cardenismo al avilacamachismo (México, D.F.: Colegio de México, 1978); Irwin F. Gellman, Good Neighbor Diplomacy: United States Policies in Latin America, 1933-1945 (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1979); George Philip, Oil and Politics in Latin America: Nationalist Movements and State Companies (Cambridge: Cambridge University Press, 1982); Clayton R. Koppes, "The Good Neighbor Policy and the Nationalization of Mexican Oil: A Reinterpretation" American Historical Review 69 (1982): 62-81; Adolfo Gilly, El cardenismo, una utopía mexicana (México, D.F.: Cal y Arena, 1994); Alan Knight, "Cardenismo: Juggernaut of Jalopy?" Journal of Latin American Studies 26 (1994): 73-107.

らえきれていなかった⁴。同時代の「善隣外交」推進者やラサロ・カルデナスのようなラテンアメリカの政治家にとって、「善隣外交」とは、工業労働者や農民の「生活水準の向上」のために農工業支援など経済発展援助も視野に入れたものであった⁵。本論が展開する日本水産資本の技術援助は、「善隣外交」の経済援助政策の形成において、日本水産資本の漁業技術援助が決定的な役割を果たしたことを明らかにする。

技術援助に対するメキシコ側の期待は、カルデナス政権の経済政策についてナショナリズムに基づくという従来の研究に見直しを迫る。たとえば最終的には1938年に国有化してしまった英米石油資本に対する政策についても、盲目的なナショナリズムよりも、農地改革をともなう政治経済的な改革のための実際的な対外国資本政策が、石油資本の傲慢さによって頓挫した結果であったことが明らかになっている⁶。日米両国の水産技術援助競争に目を配ることは、カルデナス政権の主体的な水産政策の一部を明らかにし、その実際性に関する議論を進展させることになる。

「善隣外交」解釈の見直しとカルデナス政権の外国資本に対する実際性を明らかにする一方で、1930年代の米メキシコ関係への日本の関与に関する

⁴ 米国に対する「行為主体」としてラテンアメリカ諸国の対応に焦点を当てた論文として、Max Paul Friedman, "Retiring the Puppets, Bringing Latin America Back In: Recent Scholarship on United States-Latin American Relations," *Diplomatic History* 27, 5 (November 2003): 621-36がある。

⁵ 経済援助政策を「善隣政策」の一環としてみる外交政策決定者の一人として、米国の対ラテンアメリカ政策の中心人物であった著作に Laurence Duggan, *The Americas: The Search for Hemisphere Security* (New York: Henry Holt, 1949)がある。「メキシコ大衆の生活水準の向上」は、また、米国にとって輸出市場の拡大にもなる (John J. Dwyer, "The End of U.S. Intervention in Mexico: Franklin Roosevelt and the Expropriation of American-owned Agricultural Property," *Presidential Studies Quarterly* 28, 3 (Summer 1998): 495-509)。

⁶ カルデナス政権の経済政策をナショナリズムと前提とする研究には枚挙にいとまないが、カルデナス政権の実際的な改革政治の性格を明らかにした研究として、次の3つの研究が代表的である。Alan Knight, "The Politics of the Expropriation," in *The Mexican Petroleum Industry in the Twentieth Century*, ed. Jonathan Brown and Alan Knight (Austin: University of Texas Press, 1992): 90-128; David Cotter, "The Origins of the Green Revolution in Mexico: Continuity or Change?" in David Rock ed., *Latin America in the 1940s: War and Postwar Transitions* (Berkeley: University of California Press, 1994): 224-41; Shigeru Sugiyama, "Reluctant Neighbors: U.S.-Mexican Relations and the Failure of Cardenista Reforms, 1934-1948" (Ph.D. diss., University of California, Santa Barbara, 1996).

研究業績は少なく⁷、それらはたとえばレーヨン輸出と石油利権をめぐる経済進出活動や後述する日本側の漁業活動について、米陸軍情報部の史料に完全に依存しながら、在メキシコ米国大使館や国務省が否定しているスパイ活動を「事実」として扱うような欠陥がある⁸。日本外務省資料館所蔵の日本語史料——第二次世界大戦敗戦後にアメリカ合衆国に接收され、米国議会図書館においてマイクロフィルムで閲覧できるのだが——を本格的に用いるこの研究は、このような史料利用の欠落を埋めて、日米メキシコ三国関係の新しい姿を示す。

本論は、日米メキシコ三国関係の再解釈を、日本語史料を用いるほかに、現地で生活していた日系移民、とりわけ漁業に関連した移民の活動に焦点を当てて行う⁹。その際、先行する移民研究における三つの問題点を指摘して

⁷ 1930年代および40年代前半の米国・メキシコ関係に対する日本の関与を論じる研究には、以下のものがある。Stephen Niblo *War, Diplomacy, and Development: the United States and Mexico, 1938-1954* (Wilmington, Del.: Scholarly Resources, 1995); do., "Allied Policy Toward Axis Interests in Mexico During World War II" *Mexican Studies/Estudios Mexicanos* 17, 2 (Summer 2001): 351-373 が日系資本による石油探掘事業に、Friedrich E. Schuler, *Mexico Between Hitler and Roosevelt: Mexican Foreign Relations in the Age of Lázaro Cárdenas, 1934-1940* (Albuquerque, University of New Mexico Press, 1998)が1940年のメキシコ経済使節団に、そして María Mmilia Paz, *Strategy, Security, and Spies: Mexico and the United States as Allies in World War II* (Philadelphia: Pennsylvania State University Press, 1997)が日本側のスパイ活動に言及している。

⁸ 対比される研究として、第一次世界大戦中に低カリフォルニア州マグダレナ湾に日本海軍が基地を建設するという噂について、英語のみならず日本語およびドイツ語史料を駆使した Iyo Kunitomo, "Japan and Mexico, 1888-1917" Ph.D. dissertation (University of Texas, Austin, 1975; Friedrich Katz, *The Secret War in Mexico: Europe, the United States, and the Mexican Revolution* (Chicago: University of Chicago Press, 1981).

⁹ メキシコ移民の先行研究として、María Elena Ota Mishima, *Siete migraciones japonesas en México, 1890-1978* (México, D.F.: El Colegio de México, 1982); 石田『メヒコと日本人』、日墨協会日墨交流史編集委員会編『日墨交流史』(PMC, 1990年)、井沢実『ラテンアメリカの日本人』(国際問題研究所, 1972年)。同時代のものとしては、吉山基徳『我等の発展地メキシコ』(日本植民通信社, 昭和5年)、鈴木玉之助『メキシコに於ける海陸共存の殖民』(日墨兄弟社, 1931年)、海野実『墨西哥・中米大観』(メキシコ時報社, 1941年)などがある。また、エンセナダ在住の日系移民研究者 Kiyoko Nishikawa Aveces 氏は、エンセナダ在住の日系漁民をはじめとした一世への聞き取り調査を行っている。この研究成果の一端である論文 Antonieta Kiyoko Nishikawa Aceves, "La inmigración japonesa a Ensenada durante la primera mitad del siglo XX" *Journal of the Instituto de Investigaciones Históricas of the Universidad Autónoma de Baja California* and edited by Calafia 1, 1-8 (2004), 24-34 は、<http://www.uabc.mx/historicas/Revista/Vol-1/Numero%201-8/index-numero1-8.htm> で閲覧できる

おく¹⁰。まず日本語史料との関連では、日本外務省の史料を用いる場合に「移民関連」の史料にのみ焦点が当てられ、日本移民が関与し移民先の社会集団との関係を明らかにしうる経済活動に関する史料に目を配ってこなかった。日系移民は、人種差別の一方的な被害者ではなく、本国との紐帯や漁業技術などの社会的資本を資源に、移民先のホスト社会においてより優位な立場を獲得しえた。

さらに、移民研究は農民や商工業者など「陸地」に居住する移民を主に研究対象としてきたといわざるをえない。近年、日本史研究や民俗学研究において「海民」の研究が進展してきたことを踏まえてなければならないだろう、網野善彦が指摘するように、海民の活動は、近代以前においてはオーストラリアのアラフラ海、フィリピン諸島をはじめとする東南アジア、そして漂流という形ではあっても北米大陸にも及び、20世紀初頭まで愛媛県八幡浜や和歌山県太地の出漁漁民に見られるように、国境にとられない活動があった¹¹。しかし、網野の「海民思想」と戦前期の帝国主義的な「海国思想」との近接性を批判的に検討する小川徹太郎は、研究上の必要性として（1）植民される側と漁業移民との関係性に注目すること、（2）混住地的状況の中で知と権力の付置や文化的・社会的交渉を通じた技術の衝突や混淆の過程、公共性概念の構築など、多様な次元での二重帰属の様態を明らかにすべきことを指摘した。さらに1900年以降の漁業移民は、決して「伝統的」漁業を行っていたのではなく、出漁・移住の形態をとりながら労使関係をはじめとする資本主義的な漁業活動の中で活動を行い、帝国主義的な「海国思想」に

¹⁰ 次に展開するふたつの問題は、近年刊行された移民研究会編『日本の移民研究—動向と文献目録Ⅰ明治初期 - 1992年9月』および『日本の移民研究—動向と文献目録Ⅱ1992年10月 - 2005年9月』（明石書店、2008年）からも明らかである。

¹¹ 代表的なものとして網野善彦『海民と日本社会』（新人物往来社、1998年）、同右『「日本」とは何か』（講談社、2000年）などがある。また、1912年7月19日にサンディエゴ市近くの海岸に到着した漁民たちについて、愛媛県八幡浜市に紹介されている（http://www.city.yawatahama.ehime.jp/02shoukai/06_paionia/02_dasebune/dasebune.htm）また、すぐれた実証研究として村川庸子『アメリカの風が吹いた村—打瀬船物語』（愛媛県文化振興財団、1987年）がある。

強い影響を受けていたことを指摘する¹²。漁業移民は、けっして無垢な庶民なのではなく、日清戦争後の帝國的な「海洋国家」イデオロギーの積極的な受容者でもありえたのではないか¹³。このような視点から、たとえば新保満のようなカナダ漁業移民研究も見直されなければならない¹⁴。

戦前期帝国日本という枠組みを設定するとき、「日系移民」概念が再検討の対象となる。「日系」は、第二次世界大戦後の国民国家の領域を過去に投影した日本人なのか、言い換えれば駒込武が論じる「文化統合」の対象となることのなかった日本人、法的には渡航制限を受けなかった日本人なのか、それとも帝国日本の臣民全体を「日系」と呼ぶべきなのか、という問いである¹⁵。彼らにとって（あるいは研究者にとって）「日本」とは、戦後日本で表象される列島社会なのか、それとも植民地朝鮮や台湾、南洋諸島さらには満洲国や上海日本租界、そして帝國的拡張の対象であった東南アジア（たとえばフィリピンのダバオ）を含む領域であったのか。国境を問わないという

¹² 小川徹太郎『越境と抵抗—海のフィールドワーク再考』（新評論、2006年）183-189、297-305頁。漁民研究の先駆者であった桜井勝徳は、「我々が漂いたる東海の帝国に生を享け乍ら、其の多くが海に背を向けて生活を続けて来たことは思えば不思議である。我々の大部分が如何に海に退嬰的であり、ほんの一部の国民が如何に漁業や海に進取的であって、海上を潤歩して来たかと言う事を、先ず充分に私共は知って置くべきだ…古来より特に漁業に積極的な気風を持った漁村は之を全国的に見るならば寧ろ異色ある少数者であった」と、「海洋民族」イデオロギーに批判的である（「漁人」桜田勝徳著作集第二巻漁民の生活と社会』名著出版、昭和55年、3、15頁）。

¹³ 「海洋民族」思想の展開については、富山一郎『暴力の予感—伊波普猷における危機の問題』（岩波書店、2002年）227-39頁で展開されている。また、1942年の強制収容後も帝国日本との紐帯を重視していた日系移民が多く存在したことを示す研究として、ブライアン・マサオ・ハヤシ「レンズの視野を拡大する—日系アメリカ人の強制収容に対する理解を国際化するために」『立命館言語文化研究』17、1（2005年）7-28頁がある。

¹⁴ 新保満『石をもて追われるごとく』（御茶の水書房、1973年）および『カナダ移民排斥史』（未来社、1996年）。カナダへの漁業移民の「社会的資源」に注目して、現地漁民との社会経済関係を明らかにした研究として、河原典史「第二次世界大戦以前のカナダ西岸における日系造船業の展開—和歌山県出身の船大工のライフヒストリーから」『立命館言語文化研究』17、1（2005年）59-74頁がある。

¹⁵ 駒込武『植民地帝国日本の文化統合』（岩波書店、1996年）。本論で扱う時期の米メキシコ国境地域に居住した朝鮮半島出身者は、ソノラ州の場合12名であった（外務省亞米利加局『「メキシコ」國「ソノラ」、「シナロア」兩州視察報告書』外務省亞米利加局、1934年、25頁）。史料不足から本格的に扱うことができないので、本論では取り上げない。

意識は、帝国意識と重なる可能性があることを指摘しておかなければならない¹⁶。

さらに、米メキシコ国境地域の漁業移民を分析すると、出身の国民国家の枠組みが不十分であることが明らかになるばかりではなく、「太平洋」あるいは「環太平洋」という枠組みが、地理的なあるいは国民国家に囲まれた「地域」という概念にもとづいては不十分であることもわかる。米メキシコ国境海域は、国際商品であるマグロやエビに引き寄せられるように、多様な海域からの移住者が交錯する場であった。日本海域からは岩手、千葉、三重、和歌山、長崎や静岡、地中海およびアドリア海からはクロアチア系、イタリア系、シシリア系、ギリシャ系が、アゾレス諸島海域からはポルトガル系が、北海海域のノルウェー系、さらにスペイン内戦に伴ってスペイン亡命者も漁業活動に参加していた¹⁷。人（資本、技術なども伴う）の移動を通じて、諸海域が重層的に重なりあう空間としても考察する必要がある。

最後に、米国メキシコ国境海域における日本水産業の活動は、近代日本の水産業発展を示すひとつのエピソードとして語られてきた問題に触れなければならない。本論で展開するように、1930年代後半の米メキシコ国境海域

¹⁶ たとえば南カリフォルニアの業界誌は、「…紅口（ホンキュー）即ち西部上海は純然たる日本勢力範囲に属して居り、一度此地を訪れる日本人にして誰か母国の有難さを感じない者があるか。是も皆陛下の御威徳の然らしむ処と自ずと頭が下がる気分になる…」という手紙を紹介したのち、編集者が「何と組合員諸君夫婦共稼ぎの貧乏商売などアッサリ捨てて、資本協同てな処で上海の町でアット眼をむく様な商売でもオツ始めてはどんなものだ。どうせ将来は東洋の舞台ですよ…」とコメントを加えている（古谷夢介「楽苦書貼—上海通信」Nanka Merchant's Bulletin 16, no. 9 (September 30, 1941) 11-12) Japanese American Research Project Collection Box 279, Special Collection, Young Research Library, University of California, Los Angeles 所蔵。このような帝国を範囲とする移民研究を告げる論文として、坂口満宏「新しい移民史研究にむけて」米山裕・河原典史編『日系人の経験と国際移動』（人文書院、2007年）239-61頁がある。

¹⁷ アドリア海域でも旧ユーゴスラヴィアの移民に関する研究は少ないが、Frances Kraljic, *Croatian Migration to and from the United States, 1900-1914* (Palo Alto: Raguan Press, 1978)をはじめとして、研究が集積されつつある。しかし、現在、クロアチアとなっているアドリア海域からの漁業移民は、1930年代以降南カリフォルニアでマグロ漁業に従事した他、オーストラリアに移住したグループは、1950年代に一本釣りのマグロ漁業に従事していた。現在日本向けのマグロ蓄養業に従事している（NHK衛星第一放送『ウィークエンドスペシャル「トロはこうしてつくられる～南オーストラリア・マグロ戦略～」』2002年7月7日放映）。ダルマチア地方が1815年から1918年までオーストリア領であったため、オーストリア系漁民もいた。太平洋を海域として考察した論考として、Matt K. Matsuda, "AHR Forum: The Pacific," *The American Historical Review* 111, 3 (June 2003): 758-80がある。

の資本集約的漁業は、技術援助を通じた日本のメキシコにおける影響力の拡大を恐れる米国国務省や軍事的なスパイ活動に注目する陸海軍情報部が逐次その経過を追うばかりか、第二次世界大戦後世界の発展途上国援助の支柱となる政策の起点の一つになった。その同時代的文脈は、日本による1931年の「満洲事変」と1937年の日中戦争、1938年のメキシコ政府による外国石油資本の接收、ヨーロッパにおけるスペイン内戦（1936年-1939年）と第二次世界大戦の勃発、とりわけ1940年5月のフランス陥落が重要である。日本水産資本の米メキシコ国境海域における活動は、この文脈のなかに位置づけて論じなおされる必要がある。撤退に至る経過は、「対米関係の悪化」や「メキシコのナショナリズム」という一般論に回収されてはならない。

以上、本論は、カリフォルニア湾を含む米メキシコ国境海域の資本集約的漁業の焦点を当て、国際関係史において日本語史料を用いて日本メキシコ米国関係の書き直し、水産技術援助競争が1930年代米国対ラテンアメリカ外交を特徴づける「善隣外交」の重要な側面であったことを明らかにする。同時に、漁業活動で中心的な役割を果たした日系漁民の活動を分析することによって、悪化しつつある国際関係の文脈の中で彼らが現地メキシコで築いた社会関係を明らかにする。

本論の構成は、第1章であまり知られていない日本メキシコ関係を水産関係にも目を配りながら1930年代前半まで概観したのち、第2章で南カリフォルニアおよびメキシコでの日系漁業移民の活動を明らかにする。第3章では日系水産企業の発展とそのメキシコにおける展開と米国政府およびメキシコ政府の対応を明らかにするとともに、日本側の水産技術援助とこの漁業活動に関与した日系移民の活動を分析する。第4章では、1930年代末の国際関係の激変の中で、メキシコに対する日米の水産技術援助競争を明らかにし、日系水産資本の撤退の過程および日系移民が米国政府の監視の対象となって、1942年の集団的強制収容の前提が作られていったことを明らかにする。

本論が利用する一次史料は、マイクロフィルムされている米国国務省文書のうちメキシコ漁業問題関連文書（decimal number 821.628, Record Group

59) およびラテンアメリカにおける日本の軍事活動にかかわる文書 (894.20210, RG59), 在メキシコ米国大使館文書 (Record Group 84) のほか, 日本外務省外交資料館が所蔵する「本邦移民関係雑件 墨国の部」 (J/1/2/0/J2-8) および「本邦漁業関係雑件 中南北米沿岸漁業関係」 (E/4/9/0/7-6), 米国国立公文書館所蔵の米国内務省森林野生動物管理局文書 (Record Group 22), 米国議会図書館在メキシコ米国大使ジョセフス・ダニエルズ文書のほか, フランクリン・D. ローズヴェルト大統領文書館, メキシコ大統領文書館, メキシコ外務省資料館, カリフォルニア大学ロサンゼルス校ヤング研究図書館スペシャルコレクション, 全米日系人博物館に所蔵される文献である。さらに, サンペドロ歴史協会やサンディエゴ歴史協会図書館も利用した¹⁸。

¹⁸ マイクロフィルム化されている史料は, 国務省関係の Department of States, Records of the Department of State Relating to Internal Affairs of Mexico, 1930-1939 (Washington, D.C.: The National Archives, National Archives and Record Administration, 1985); do., Confidential U.S. State Department Central Files, Mexico: Internal Affairs, 1941-1944 (Wilmington, Del.: Scholarly Resources, 1987), Records of the Department of State Relating to Internal Affairs of Japan, 1930-1939 (Wilmington, Del.: Scholarly Resources, 1984); Records of the Department of State Relating to Internal Affairs of Japan, 1930-1939 (Wilmington, Del.: Scholarly Resources, 1985)である。日本外務省文書は, 米国議会図書館がマイクロフィルム化されたものを所蔵している。そのほかの史料所在を示す原文表記は次の通り。National Archives, Foreign Service Post Files, RG 84; Records of the Office of International Relations, Technical Assistance Files, 1911-1962, US Fish and Wild Service, RG22; Josephus Daniels Papers, Library of Congress; Harold Ickes Papers, Library of Congress; Franklin D. Roosevelt Library, Hyde Park, NY; Archivo General de la Nación; Archivo Histórico de la Secretaría de Relaciones Exteriores, Mexico City; Japanese American Research Project Collection of material about Japanese in the United States, 1893-1977, the Charles E. Young Research Library Department of Special Collections, University of California, Los Angeles; Hirasaki National Resource Center, the Japanese American National Museum である。また, Records of the Bureau of Foreign and Domestic Commerce RG151, Records of the National Security Agency, Intercepted Messages between Japan and Its Diplomatic Agents, RG 457 も参照した。San Pedro Historical Societyは, 週2日しか開放されていないが, San Diego Historical Societyはオーラル・ヒストリーを多く所蔵するなど利用しやすくなっている。日本水産の史料は, 1998年にこのプロジェクトを始めたときに日本水産総務部に問い合わせをしたが, 戦前の史料である上, 戦災で大手町の本社ビルが全焼したこともあって史料は存在しないだろうという返事であった。しかし, エビ漁業関係の史料は, 現在, 三島康雄氏が日本水産総務部から寄贈され, 同氏が所蔵している。

第一章 1930年代のまでの日本・メキシコ関係

第一章の目的は、近代日本とメキシコとの関係を水産関係に注意を払いながら概観し、第二章以降の議論に歴史的な文脈を与えることである。近代日墨関係は、近代日本国家にとって最初の対等条約である 1888 年の日墨修好航海条約に始まる。1910 年に始まるメキシコ革命にともなう在メキシコ日本人が受けた損害賠償については、メキシコ革命政府が欧米諸政府に要求していたカルボ条項を 1924 年に日本側が受け入れ、解決を見ていた¹⁹。

この間の移民関係史を見ると、1892 年に著名な「榎本開拓団」がチアパスに入植しメキシコ移民の足がかりを築いた²⁰。太平洋岸においては、1910 年代にエンセナダや低カリフォルニア州に漁業および農業移民として入植し始めていた²¹。1917 年、日墨両政府は、医者など専門職の移民に移民先での営業資格を与える日墨医師自由営業協定を結んだ。このため、イワモト・ショウタロウや都留競、家田耕三など指導的な日系人は薬品医療関係の仕事を行いながらその地位を築いていった²²。しかし、1920 年代以降、エンセナダなど低カリフォルニア州への漁業労働者の流入を除いて、日本からの移民の流入は少数にとどまった。1937 年に在メキシコ日本公使館がアメリカ大使館に提出した報告によれば、5,314 名の日系移民が把握されており、その多くはメキシコ国籍を取得していた²³。

メキシコから日本への人的な交流は少なかったが、水産関係で特筆すべきものが 1920 年代にあった。1926 年にホセ・ガルシア・マリチネス (José

¹⁹ 伊藤敬一編『墨国を語る』（非売品、昭和 31 年）41-42 頁、井沢『ラテンアメリカの日本人』132-136 頁。

²⁰ 角山幸洋『榎本武揚とメキシコ殖民移住』（同文館出版、1986 年）。

²¹ Nishikawa Aceves, "La inmigración japonesa a Ensenada," pp.24-34.

²² 日本人メキシコ移住史編纂委員会『日本人メキシコ移住史』（1971 年）212-30 に詳しい。これら指導的在メキシコ日系人のキャリアは、滝沢太郎『親日の新興国メキシコの国情大観—植民七十年史』（メキシコ新報社、1968 年）に見られる。

²³ Stewart to secretary of state, 20 July 1937, and Under Secretary of State Sumner Welles to President Franklin D. Roosevelt, 17 April 1937, 894.20210/387.

García Martínez), アルフォンソ・ロマンディア・フェレイラ (Alfonso Romandía Ferreira) が, 王子製紙社長も勤めた実業家鈴木梅四郎の後援によって東京水産講習所に2年間留学した。彼らは, 1930年代に漁業専門官として森林狩猟水産局 (el Departamento Forestal y de Caza y Pesca) で活躍する²⁴。さらに, 1934年には元大統領アベラルド・ロドリゲス (Abelardo Rodríguez)²⁵ が来日して, 墨日間の経済関係の強化を図っている²⁶。太平洋を隔てて日本とメキシコは, 漁業技術協力という形で人脈的つながりを1920年代以後に作り上げていた。

メキシコ・米国関係において, 日本は第一次世界大戦期に注目された。日本海軍が低カリフォルニア州マグダレナ湾に基地を設ける協定をメキシコ政府と結んだという噂が, 米国社会に大きな反響を生んだのである。これは, ヨーロッパにおける大戦から米国の関心をそらすためにドイツ側がしかけたプロパガンダであった²⁷。しかし, 1930年代に入ると, メキシコ-日本関係には, 潜在的には常に米国の影が存在するようになる。その理由は, 日本帝国陸軍の引き起こした「満洲事変」とその後の「満洲国」建国であった。1930年代の初期にメキシコ-米国間の対日防衛協力が両国の間で議論された。駐メキシコ米国大使であったルーベン・クラーク (Reuben Clark) は, メキシコ外相やメキシコ政治に隠然たる影響力を持っていたプルタルコ・カジェス (Plutarco Elías Calles) 元大統領と1931年から1932年にかけて, 防衛協

²⁴ Josephus Daniels, U.S. Ambassador to Mexico, to secretary of state, 6 March 1939 812.628/486 ; 伊藤『墨国を語る』46-47頁。Romandía Ferreiraの夫人は日本女性であった (J. Reuben Clark, Jr. to secretary of state, 22 April 1932, 812.628/133)。ガルシア・マリチネスは, 1930年代後半には漁業局局长になっていた。

²⁵ 漁業が盛んになりつつあったソノラ州グアイマス出身のロドリゲスは, メキシコ革命政府の権力を握った北部勢力の一翼を担う重要な政治家であり, 繊維産業や水産加工業を展開する資本家でもあった。1920年代にメキシコ政治を支配していたプルタルコ・カジェス元大統領が, オルテス・ルビオ大統領を辞任に追い込んだときに臨時大統領として政界の中央に躍り出た人物であった。

²⁶ U.S. Department of Navy, 9 January 1936, 812.628/301.

²⁷ Kunimoto, 99-126 ; Katz, 76-80。とりわけカツは, ドイツ語史料を用いてこの事情を詳らかにしている。しかし, 現在の歴史家もこれを鵜呑みにしている歴史研究がある。たとえば Emilia Paz, 36頁。また当時の研究として Thomas A. Bailey, "The Lodge Corollary to the Monroe Doctrine," *Political Science Quarterly* 48 (1933): 220-39; Eugene Keith Cahamberlin, "The Japanese Scare at Magdalena Bay" *Pacific Historical Review* (n.d.): 345-59がある。

力協議を密かに進めていた²⁸。米国連邦捜査局（FBI）や移民局、そして在メキシコ大使館、領事館は、カメラや測量機器を持ってメキシコ北西部を訪問する日本人を厳しく監視していた。クラーク米国大使は、管轄権はメキシコ政府にあるとは認めていたものの、測量技術などを持つ大量の日本人技術者がメキシコ北西部に存在することが、米国の安全保障上の懸念を生んでいると指摘した²⁹。1933年米国民主党のローズヴェルトが大統領に就任し、第一次世界大戦中に海軍次官であった新大統領の上司海軍長官であったジョセフ・ダニエルズ（Josephus Daniels）が駐メキシコ大使としてメキシコ市に派遣された後、この交渉は沙汰止みになった。しかし、米国領事や大使館付武官らは、この「事実」を思い出し、とりわけメキシコ太平洋岸の漁業活動に疑いの目を向け続けた。グアイマス駐在米国領事A. F. イェピスは、「メキシコ西岸に散在している日本人は例外なく故国に忠誠を誓うスパイ以外の何者でもない」と国務省に報告していた³⁰。

米国の安全保障にとって重要であったメキシコ北西部とは、低カリフォルニア、チワワ、ソノラ及びシナロアの諸州であり、1930年代においてメキシコの「フロンティア」と位置づけられていた地域である³¹。この時期、メキシコ沿岸における日本水産資本の参入の可能性は、このメキシコ西岸に限られていた。1930年代前半、メキシコ市の海産物の日消費量は5トンであり、この市場に海産物を供給していたメキシコ湾岸ではすでにスペイン移民が近代的漁業を行い、この水産市場を支配していた。数百のメキシコ漁民がメキシコ湾岸のこの産業に依存していた³²。これにたいして、メキシコ西岸の漁

²⁸ 日米戦勃発の場合、米国に対して「友好的な中立」を維持するというのが、カジェスの考えであった（Reuben Clark to secretary of state, 6 February 1932, 894.20212./317）。

²⁹ From Justice Department, Attorney General, William D. Mitchell, 4 December 1931, 894.20212/311; Clark to secretary of state, 6 February 1932, 894.20212/317; Robert E. Cummings, Acting Military Attaché to the War Department, 23 February 1932, 894.20212/324.

³⁰ A.F. Yepis, American Vice Consul at Guaymas, to secretary of state, 8 January 1936, 812.628/302. またある副領事は、メキシコ軍の備蓄を日本海軍のものと誤解している（Guy Ray to secretary of state, 7 March 1935, 894.20212/336）。

³¹ Carl Ortwin Sauer, "Portrait of Mexico," in John Leighly ed., *Land and Life: A Selection from the Writings of Carl Ortwin Sauer* (Berkeley: University of California Press, 1963).

³² 小林直太郎（拓務省嘱託）「タンピコに於ける日本人漁業、カリフォルニア湾に於ける漁業」昭和6年1月24日（E/4/9/0/7-6）。

業資源は、利用されているすべてが米国消費市場に向けられていた。このため、拓務省囑託小林直太郎はメキシコ人漁民との競争もなく、日本進出は彼らに漁労技術の習得の機会を与えることが可能であるとした³³。メキシコ西岸の漁獲物はイワシ、マグロ、エビ、そしてアワビであった。漁獲物のうちイワシは、缶詰原料に加えマグロ・カツオ一本釣りの撒きえさとして漁獲された³⁴。マグロ・カツオは米・墨・日本資本が参加していた。ヴァン・キャンプ社などの米国資本はカリフォルニア州南部のサンペドロとサンディエゴに大規模な缶詰工場を経営していた。また、メキシコ側には3つ水産企業が存在していた。まず、ベルンSTEIN兄弟（Luis Bernstein Riveroll, Luis Fernando Bernstein）による缶詰工場があった。これにチファナのカジノ経営で富を蓄積し、臨時大統領となったときにその地位を利用して参入し、乗っ取ったというアベラルド・ロドリゲス元大統領の工場があった。

最後のものは、1912年にMK漁業会社を設立して、サンディエゴにおける遠洋マグロ漁業の基礎をつくりあげていた近藤政治によるものであった。1919年近藤は、日本棉花社長喜多又蔵ら大阪商船、大阪鉄工所、東洋燐寸などの経営者や株主を出資者として墨国興業組合を組織した。この企業は、1920年代に順調に経営が進んでいたが、1929年の世界恐慌と缶詰工場の焼失により撤退を余儀なくされた³⁵。1930年代の半ば、メキシコ資本による近代的缶詰工業は、元大統領アベラルド・ロドリゲスによるもののみとなり、

³³ 同上。

³⁴ それまで網漁業が中心であった南カリフォルニアのマグロ・カツオ漁に一本釣り漁法を伝えたのはツイダ・モトサケであり、1916年であった（Feland, “California’s Tuna Clipper Fleet,” 5）。また、福野久松はカリフォルニア州政府に招かれてカツオ・マグロ漁業の発展に寄与したといわれている（松井『メキシコ風土記』402頁）。

³⁵ Estes, “Kondo Masaharu,” 7 および『日系移民人名辞典＜北米編＞第一巻』, 317頁。墨国興業組合結成に参加した人物は、Estesによると、Kondo Masaharu, Kita Matazo, Taro Genzaburo, Hanta Riutaro, Yamada Boku, Nango Saburo, Nakayama Setsutaro, Takeo Jiemon, Hori Kinjiro, Yamaoka Jutaro, Yano Kitaro, Takikawa Gisaku であった（Estes, “Kondo Masaharu,” 19 f. 18. 南郷三郎, 多羅尾源三郎, 範多竜太郎, 中山節太郎, 堀啓次郎, 山岡順太郎, 瀧川儀作は、いずれも大阪商船や大阪鉄工所、日本棉花、東洋燐寸という阪神地区の大企業の経営者あるいは大株主であった（麻島昭一「戦前期財閥系損保の財閥内取引—三井・三菱・住友の場合」『専修大学社会科学年報』第38巻(2004年)126-127頁 <http://www.senshu-u.ac.jp/~off1009/PDF/asajima.pdf>）。日本外務省文書では近藤篤弘と記されているが、これは1926年に名前を変えたため。

低カリフォルニア州のサウザルおよびサン・ルカスに缶詰工場を経営し、日産 5000 缶の生産力を誇っていた³⁶。

図 1 アベラルド・ロドリゲス資本の事業展開



Numbered on the map above are the sites of fisheries operations in Lower California conducted under the direction and control of General Abelardo L. Rodriguez: (1) Sauzal cannery (sardine and mackerel), (2) Cerros Island cannery (tuna and abalone), (3) Baya de Tortala cannery (abalone), (4) Cape San Lucas cannery (tuna). Rodriguez ships bring supplies to these canneries from the United States, carry products to Mexican ports. Receiving stations for the new Cia. de Productos Marinos operations are located at (5) Guaymas, (6) Yabaros and (7) Topolobampo.

出典：”Mexican Interests Expand Lower California Operations” Pacific Fishermen (January, 1941), p. 24.

エビ漁業については、やや詳しく検討したい。漁獲されるエビは 2 種類あった。まず、一般的にブラウンとよばれる (*Panaeus californensis*) は、やや

³⁶ 松井『メキシコ風土誌』410 頁。ロドリゲスが設立した缶詰工場は、La Industrial de Ensenada, S.A.と Cia. Pesquera del Pacifico, S.A.である。サウザルには、1920 年代に建設された缶詰労働者が暮らした住宅が残っている (<http://www.mapasmexico.net/googlemaps-puerto-el-sauzal.html>)。

市場価値が低く、沖合トロール漁業で漁獲された。より市場価値の高いものが、一般にブルーとよばれる *Panaeus stylirostris* で、現地漁民によって投網や罟を用いて、ヤキ川の河口や入江で漁獲された³⁷。カリフォルニア州におけるエビ水揚げ量は、1920年代に入ると増加に転じ、1926年の150万パウンドが1929年には300万パウンドに達し、増減はあるものの1935年には350万パウンドに達した。ロサンゼルスとサンフランシスコのレストランで極めて人気があったという³⁸。エビ漁業活動に従事していたのは、メキシコ人漁業組合とパン・アメリカン水産会社（Pan American Fisheries Co.）であった。

メキシコ人漁業組合の活動に関する歴史学的研究は少ないために詳細を明らかにすることはできない。彼らは1930年から漁業組合を組織してメキシコ領内で漁業活動を行っていた。1934年には、ロドリゲス大統領からメキシコ領内における排他的なエビ漁業権を獲得し、禁輸的な輸出税が設けられたときも、1キロあたり50セントポの連邦漁業税相当の補助金を得て、漁業活動を続けた³⁹。組合の総数はエビ漁業関係が29組合漁民総数2,121名（全国で67組合、漁民総数は4,188名）であった。漁獲量は、現地で水産技術援助を一年間行った松井佳一によれば1936年のそれは1,058トン強であった（日本漁船団の漁獲量は31万1,836トン）⁴⁰。その漁法は、漁業活動を直接検分した松井によれば、入り江や潟において丸木舟でエリ網や投網等を使用するものであった⁴¹。

米国側のエビ漁業者は、サンペドロに根拠を置くパン・アメリカン漁業会社（Pan American Fisheries Co.）であった。社長は、ダルマチア系のジョン・

³⁷ George Stuar Leddy, "Catches, Commerce and Crisis: Fisheries, Government and Trade in the Mexican port of Guaymas, Sonora" (Ph.D. diss.: University of California, Berkeley, 1995), 97.

³⁸ Bureau of Marine Fisheries, "The Commercial Fish Catch of California for the Year 1947 With an Historical Review 1916-1947," *Fish Bulletin* no. 74 (State of California, Department of Natural Resources, Division of Fish and Game Bureau of Marine Fisheries, 1949), 158-162.

³⁹ Powell to secretary of state, 17 August 1939, 812.628/538. 1920年代から30年代のメキシコ政府のカリフォルニア湾における漁業政策は、Leddy, "Catches, Commerce and Crisis," 56-61に簡潔にまとめられている。

⁴⁰ 松井佳一「メキシコ国の水産事情」『水産界』671（1938年10月）19-24。松井『メキシコ風土誌』388頁には、1937年の統計が載せられている。

⁴¹ 松井『メキシコ風土誌』400頁。

ラドス (John Rados) で、共同経営者はローレンス・ベルグ (Laurence Berg) であった⁴²。1929年、パン・アメリカン漁業会社は、メキシコ北西部における漁業活動に関する漁業契約をメキシコ政府と結んだ。この契約は、次の四点を含んでいた。(1) メキシコ沖でエビ漁業に従事するアメリカ漁船乗員の過半数をメキシコ人漁民にしなければならない、(2) マサトランに冷凍施設を設けること、(3) さらにメキシコ国内市場および米国市場向けの水産加工品を製造するために缶詰工場も設立すること、(4) 漁獲されたエビのうちメキシコ国内向けおよび加工用以外のエビを米国市場に輸出してもよい、というのがその条件であった。この契約に従って、パン・アメリカン漁業会社は、グアイマスに拠点を置く子会社 *Compañía Pescadora Panamericana, S.A.* を設立し、現地漁民にロドルフォ・エリアス・カジェス漁業組合を組織させ、1930年に低カリフォルニア沖およびカリフォルニア湾でのエビ漁業を開始した⁴³。10トンクラスの漁船を用いて、1935年3月には引き網を用いて外洋のエビを漁獲し始めていた⁴⁴。

しかし、パン・アメリカン水産会社の操業には二つの問題点があった。まず、メキシコ政府との契約を履行することができなかった。グアイマスの冷凍倉庫は使用しないまま放置され、缶詰工場も数週間稼働しただけで閉鎖された⁴⁵。そのため、1935年秋、メキシコ政府はパン・アメリカン水産会社の操業を停止させた⁴⁶。さらに、メキシコ政府との契約に反して漁獲したエビや魚類を米国及び日本市場向けにロサンゼルスに送っていた（このうち約400トンが日本へ再輸出されていた）が、品質上の問題を抱えていた。まず、パン・アメリカン水産会社は急速冷凍設備を持つ母船を持たず、氷蔵したエ

⁴² 国務省文書では、Pan American Fisheries Co. と記述されているが、*Pacific Fisherman* では、American Prawn Co. と記述されている ("New Marketing Arrangement Featuring Mexican Prawns," *Pacific Fisherman* 38, 1 (January 1940), 71)。John Rados は、1935年サンペドロに創立された Jugoslav Club のメンバーであった。現在、Dalmatian-American Club of San Pedro として活動が続いている (<http://dalmatianamerican.com/history.html>)。

⁴³ James C. Powell, Jr., American Vice Consul at Guaymas, 10 April 1939, 812.628Lowellyn F/2.

⁴⁴ An official report prepared by the local Fishing Inspector for the season ended March-April, 1935, in Yepis to secretary of state, 14 May 1935, 812.628/248.

⁴⁵ James C. Powell, Jr., American Vice Consul at Guaymas, 10 April 1939, 812.628Lowellyn F/2.

⁴⁶ A.F. Yepis, "Japanese Fishing Operations," to secretary of state, 23 December 1935, 812.628/295.

ビをライセンス契約によって鉄道でエビを米国に送らなければならなかった。これは、エビの鮮度を保ち黒色化を防ぐための絶対条件であった漁獲直後の急速冷凍ができなかったことを示唆する⁴⁷。事実、1935年11月、ロイド商会の神戸駐在員は、検査のために開封した12箱のうち11箱の冷凍エビが黒色化していたのみならず腐敗・発臭していたと報告し、3分の1のエビが新鮮なうちに「適切に処理され」冷凍されなかったと指摘していた⁴⁸。つまり、干しエビはともかく冷凍エビの生産および水産加工業において、アメリカ資本は市場およびメキシコ政府の要求に応えることができなかったのである。

メキシコ革命を経ても良好であった日本・メキシコ関係は、満洲事変以降、米国の関与が大きくなっていった。そして、メキシコにおける資本集約的な水産資本の活動が、カリフォルニア湾および米国・メキシコ国境海域において急速に発展しつつあったが、カリフォルニア湾におけるエビ漁業が一時的に頓挫していたことを明らかにした。次章では、このような歴史的な文脈の中で活動を活発化し始める日系漁民の活動の一端を明らかにする。

⁴⁷吉永武市によると、品質保持のために漁獲直後の処理は、「大正エビの場合は、極寒の船上にて一尾ずつ洗浄し、鉄製容器に水氷して収納する作業が操業時間中、続行されるという苛酷なものであったらしい。このような漁獲物管理の徹底化によって、たとえばエビの黒変による品質・価値低下を防止することができた」と述べている（『以西底曳漁業経営史論』九州大学出版会、1980年、135、138頁）。津田初二・中谷三男『船尾トロール入門』（新生社、昭和56年）、199、200、215頁も参照。

⁴⁸ Marine & General Surveyor, F. H. Fegen, Kobe, Japan, 21 November 1935 (Survey Report # Q16104) in A. F. Yepis, to secretary of state, 8 January 1936, 812.628/303. パン・アメリカン水産会社側も、品質に問題があることを認め、現地マネージャーに厳しい品質検査を求めていた（Fred Lewellyn of Los Angeles to Lawrence Berg, the local American manager of the Pan American Fisheries, 11 October 1935, in Yepis to secretary of state, 16 October 1935, 812.628/283）。

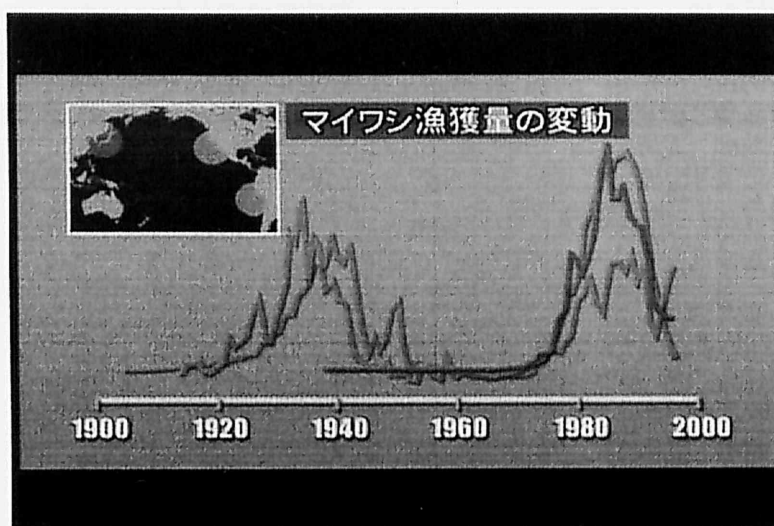
第二章 1930年代カリフォルニア沖における日 系漁業活動の展開

本章では、1930年代から1941年かけてロサンゼルス近郊の港町サンペドロからメキシコ北西部およびカリフォルニア湾を中心に資本主義的な漁業に従事していた日系漁民を中心に、漁民の活動の広がりを取り上げる。1930年代後半は、序論で述べた国際関係の緊張、とりわけ、日中全面戦争の始まりがもたらす日米関係の緊張と日本・メキシコ関係の変化が重要である。メキシコ政府は、漁業技術援助国からファシスト国家のひとつとして日本への認識を変化させてゆく。他方、日本は中国との全面戦争に踏み込むことによって、漁船不足や海外での漁業活動に必要な外貨持ち出しが非常に厳しくなる。環境史においては、マグロなどを原料とする缶詰や肥料・飼料として魚の需要が非常に高まった時期であった。同時に、イワシの三大漁場のひとつ南カリフォルニアにおいてレジーム・チェンジとよばれるほぼ50年周期で訪れるマイワシの漁獲量がピークとなった時期でもあった⁴⁹。さらに、ビンナガマグロおよびサバの漁獲量もそれぞれ1910年代および1920年代に飛躍的に伸びた⁵⁰。

⁴⁹ Arthur F. McEvoy, *The Fisherman's Problem: Ecology and Law in the California Fisheries, 1850-1980* (New York: Cambridge University Press, 1990).

⁵⁰ Richard S. Croker, "The California Mackerel Fishery," *Fish Bulletin* no. 40 (Division of Fish and Game of California Bureau of Commercial Fisheries, 1931), p. 25, 61.

図2 マイワシのレジーム・チェンジ



「台所から地球が見える（2）消えたマイワシの謎」『素敵な宇宙船地球号』第358回（テレビ朝日2004年11月14日放映）から

本章で取り上げる漁業活動の概略を紹介しておく。まず活動領域は、実際の漁業活動として、イワシ三大漁場のひとつサンペドロ沖からサンディエゴ、メキシコ北西部の太平洋岸および良質のエビを産出することで有名なカリフォルニア湾である。また、漁船建造や借り入れなどでアメリカ北西部のタコマやその対岸のギグ・ハーバーとの経済的関係を持っていた⁵¹。

漁法においては、南カリフォルニアとメキシコ北西部は、さまざまな漁業技術が交ざり合う場所であった。漁船のサイズは、ターミナル・アイランドの日系漁民にケンケンと呼ばれていた半トンから数トン程度のジグ・ボート（Jig Boat）から80トンから100トンクラスの遠洋漁船、そして600トン以上のトロール漁船や1,000トンクラスの冷凍運搬船まで存在していた。漁法においてもメキシコ人の行う小規模な地引網漁、カツオ漁業でよく知られている一本釣り、地中海式の引き網、漁船二隻を用いて行う以西底曳網、1艘で底曳網を引くもの、そして音響測探装置や氷点下20度の急速冷凍設備、

⁵¹ 漁船賃貸に関する交渉文書は、次の史料に見られる。Akahori Family Papers, Box 18, Young Research Library, UCLA.

太平洋を越えて東京や下関、戸畑と直接通信できる短波無線などを備えた大型トロール漁船による底曳網漁が同時に行われていた。さらに、明治期に日本が導入し、富士宮にある静岡県立水産試験場で開発されたニジマス養殖技術も、メキシコ政府への水産技術援助に関連していた。次にあげる図表は、その多様性の一端を示すものである。

図3 Jig Boat

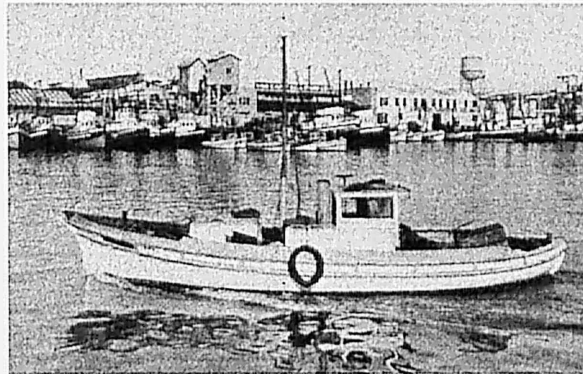
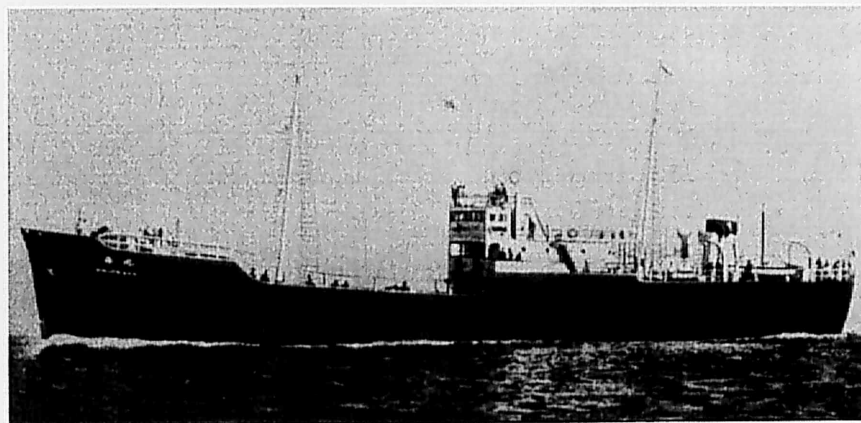


FIG. 20. A typical San Pedro mackerel jig boat, 33 feet long.
Photograph by author, January, 1931.

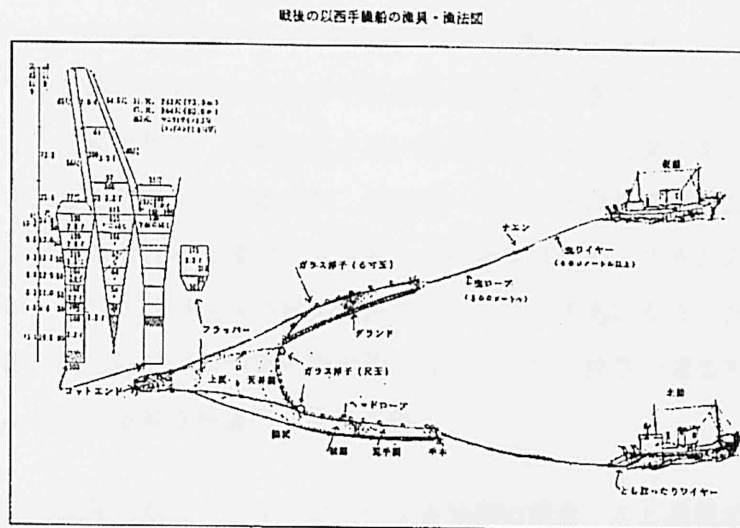
出典：Croker, "The California Mackerel Fishery," p. 45.

図4 湊丸



出典：不詳 模型が東京海洋大学海洋科学部附属水産資料館に
所蔵されている。

図5 以西底曳網漁法



出典：小林茂夫『「海のバタ屋」の記録—自分史からの下関根拠・以西手繰船の戦後歴史の一断面』（自由工房，1994年）45頁

図6 メキシコ人漁民の投網漁業



出典：日本水産『日本水産50年史』312頁

南カリフォルニアおよびメキシコ北西部における日系漁業活動は、当初から市場での販売を目指す資本主義的な性格を持ち、漁業技術革新を積極的に受け入れていった。1900年までにカリフォルニアでは、水深12フィートより浅い場所でのアワビ漁が禁止されたため中国系漁民はアワビ漁ができなくなった。かわって、日系漁民が、圧搾空気を用いた潜水具を使った漁法を初めてアメリカに導入してアワビ漁を始めた。場所は、サンペドロ半島南端のホワイト・ポイントと呼ばれる地域で、タツミ・コベイをはじめとするこのような漁民たちが、サンペドロ地域の日系漁民コミュニティの基礎を作ったといえる。その後、動力船の導入や第一次世界大戦にともなう需要の増加もあってカリフォルニアの漁業は急速に発展してゆく⁵²。

メキシコ北西部の漁業活動は、メキシコ人による漁業の場合、エビ漁業の場合、丸木舟と小規模な網を用いたものであり、市場へのアクセスがないために自給用であった。しかし、日系移民による潜水具を用いた近海のアワビ採取漁が20世紀初頭に始まる。その先駆者として、茨城県日立会瀬出身の潜水夫関菊松と富田伊勢松がいた⁵³。さらに、サンディエゴに拠点を置く近藤政治のメキシコ水産会社に参加した鈴木玉之助が、エンセナダに半農半漁のコミュニティを建設し、農業部門として墨国兄弟社を結成した。漁業部門として同郷者450名を集めて在墨国茨城海外協会をサンディエゴで結成すると、マグロ遠洋漁業が飛躍的に発展し始めた。この背景には、サンディエゴに根拠地を置き、ここの缶詰会社からの資本提供を受けたことがある。100トンクラスの漁船を三隻（大洋丸・飛雲丸・進取丸）を建造するが、これらは表1で示すサンディエゴ港における日本人所有の三隻の遠洋漁船に該当するとおもわれる⁵⁴。1929年2月に在ロスアンゼルス領事がおこなった報告では、邦人漁業者数は、エンセナダ50名、タートル湾及びサン・ルカスに約

⁵² タツミ・コベイらの活動は、The Los Angeles Maritime Museum に展示されている。

⁵³ 日本人メキシコ移民史編纂委員会『日本人メキシコ移民史』184-185頁。

⁵⁴ 鈴木『メキシコに於ける海陸共存の殖民』6, 21-30, 52-53頁。また、1920年代後半から米国との戦争勃発にともなう強制移住までの低カリフォルニア州の日系移民の活動を手際よくまとめたものとして、渡部登「メキシコ太平洋岸における海陸共存の日本人移住者」日本人メキシコ移民史編纂委員会『日本人メキシコ移民史』183-199頁がある。

120名、合計170名であり、期間により30~40名の増減があった⁵⁵。また、1931年に、濱口加次郎をはじめとする和歌山県漁民の35名が一人1000円を出資して「和歌山県海外出漁組合」を作り、メキシコ北西部太平洋岸での漁業活動を試みるなど、日本漁民とカリフォルニア沖との深い関係を示唆するような活動が見られる⁵⁶。

エンセナダを拠点とする在墨国茨城海外協会の成功の背景には、この地域が資本集約的な漁業活動の場所として注目を集めていたことがある。早くは、1910年代に高碇辰之助がカリフォルニア湾の視察を行って、漁業資源の豊富なことを日本で喧伝された⁵⁷。1920年代後半にはいるとメキシコ人資本家アベラルド・ロドリゲスやベルステイン兄弟による水産会社が設立された。また、ほぼ同じころ近藤政治がサンディエゴを拠点として行った遠洋マグロ漁業を興した⁵⁸。そして、1930年代前半になると、共同漁業（後の日本水産、ニッスイ）と林兼商店（後の大洋漁業、マルハ）による大型冷凍運搬船を中心とする母船形式の漁業活動が始まる。

次に、漁場について簡単に触れる。イワシやカツオ、マグロが漁獲されるこの地域の太平洋側は、栄養分に富んだ海洋深層水が湧き上がる地域として著名である。またエビが漁獲されるカリフォルニア湾には、ヤキ川や大河コロラド川が流入し、ソノラ・シナロア・ナヤリット3州の入り江がエビの繁殖地となっている。

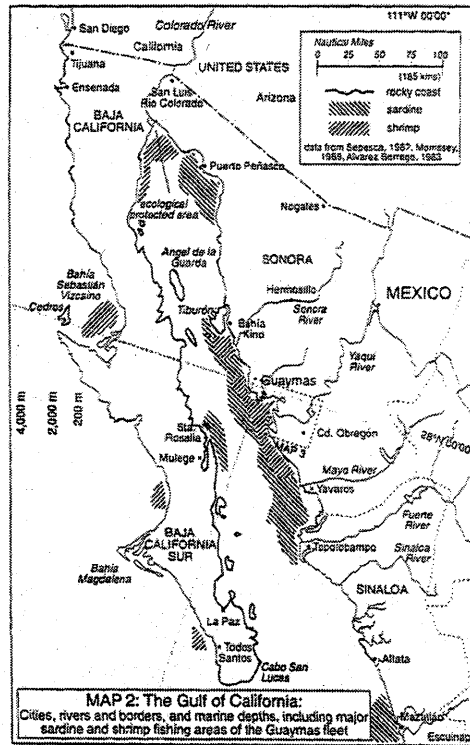
⁵⁵ 「墨国低加州に於ける邦人漁業状況調査」在ロサンゼルス領事水澤考策発外相田中義一宛、昭和4年2月18日（E/4/9/0/7-6）。この数字は、漁業従事者総数において、渡部「メキシコ太平洋岸における海陸共存の日本人移住者」が提示する数字とほぼ一致する。

⁵⁶ 小林直太郎「和歌山県海外出漁組合の墨国漁業に関する件」堀公使 発幣原外相宛、昭和6年11月23日（E/4/9/0/7-6）。彼らは、グアイマスで漁業に従事するも、極度の不況と資金不足、新労働法との齟齬で解散を余儀なくされ、マンサニージョやエンセナダで分散就労した（南洋水産協会、海洋漁業振興協会、水政會[編]『海外漁業事情』南洋水産協会、1937年、513頁）。

⁵⁷ 下啓助『明治大正水産回顧録』（東京水産新聞社、昭和7年）326頁。メキシコからの帰国後、高碇は、東洋製缶株式会社の支配人となる（岡本『近代漁業発達史』305頁）。

⁵⁸ José Adán Cháirez, Historia de la Pesca del Atún en México, 42-43; Estes, “Kondo Masaharu.”

図7 カリフォルニア湾のエビ漁場



91

出典：Leddy, "Catches, Commerce and Crisis," 91.

最後に、この地域で活動した人間集団を検討する。対象とする人間集団は、4つある。まず、(1) サンペドロや対岸のロングビーチ近くにあるターミナル・アイランドの日系漁民、次に、(2) やや大型の漁船で遠洋漁業を行う南カリフォルニアおよびメキシコ在住の漁民、(3) 少数ながらメキシコにおいて漁業関連の仕事にメキシコ現地と日本漁業資本の間のリエゾンとして関係した日系人、そして(4) 冷凍船と大型トロール船を中心として船団を組んで資本集約的漁業を行う日本資本である。

まず、サンペドロやその近郊のターミナル・アイランド、そしてサンディエゴを拠点として日系漁民についてである。カワサキの先駆的な研究によると、サンペドロ地域における日系漁民の活動は、1901年から1903年まで続いたアワビ漁に始まり、1906年にハマシタ等日本で漁業経験のある漁民たちが漁業をこの地域で初めて開始した。翌1907年の春には数名のイタリア

系漁民が網漁業で参加し、5～10馬力のガソリン・エンジンを使用する小型船(Ken Ken boats)でイワシを獲るために漁網を使用し、ロサンゼルスの子タモニカ市場で販売したり、鉄道(the Union Salt Lake Line)を使って他の都市に販売したりし始めた。さらに対岸の無人のラトルスネーク島(のちにターミナル・アイランドに改称)に移住し、同年夏には、漁民の数が600名にまで増加した。その四分の一は和歌山県太地出身の漁民150名だったという⁵⁹。

1900年代は、資本集約的な大缶詰会社が成立する時期であった。サンペドロ地域では、サザン・フィッシュ・キャナリー社(the Southern Fish Cannery Company)、ヴァン・キャンプ社(the Van Camp Fish Cannery Company)、ジャパニーズ・フィッシュ・キャナリー社(The Japanese Fish Cannery Company)が相次いで設立され、漁民たちはビンナガマグロをこれらの缶詰会社におさめた。漁船の規模もやや大型化し、15馬力のガソリン・エンジンを搭載するものが支配的となった。1910年代に入ると漁船のエンジンは35馬力から45馬力まで強化され、漁業域もサンペドロ湾の近海から北はサンタバーバラ、南はサンディエゴまで拡大した⁶⁰。

1920年代に入ると、ターミナル・アイランドの人口はさらに増加する。漁業者集団としては、イースト・ロサンゼルスの大火で焼け出された漁民と北カリフォルニアのモンテレイから移住してきた漁民がいた。彼らは、「米国式」の漁法を身につけていたという。もう一つのグループは、農民であった。1913年に制定された「カリフォルニア州外国人土地法」は、1920年により厳しく修正されて、帰化権のない移民は借地もできなくなるばかりか、子供名義の土地購入も不可能になった。このため農業に見切りをつけた移民たちが、漁業に参入したのであった。1924年にはいると、漁獲物には、ビンナガに加えてサバ、カツオ、クロマグロが加わり、ガソリン・エンジンに代わって重油を用いるディーゼル・エンジンが使用され始めると漁船の大型

⁵⁹ Kanichi Kawasaki, "The Japanese Community of East San Pedro, Terminal Island, California," (M.A. Thesis, University of Southern California, 1931), p. 31-43.

⁶⁰ Ibid., p. 44-46.

化が一挙に進み（500馬力の出力を持つものも現れた）、漁場はメキシコ沖まで拡大し、事業規模も20名程度が資金を出し合って大型船を建造するというシステムに大きく変貌した。そのため、1920年代後半に入ると、新たな移入家族数が年間10程度までに一挙に減少した⁶¹。

ターミナル・アイランダーの老人たちからの聞き取りに基づけば、3つのグループが存在していた。出身地別に見れば三重県や和歌山県のグループと静岡県グループ、そして1930年代の不況の中で最後のよりどころとしてターミナル・アイランドに転がり込んできた失業者たちであった。和歌山・三重グループは、二人乗りのJig Boatを用いてロサンゼルス市を含むローカルな市場向けの漁業を行っていた。このような漁業活動には第三グループである元失業者も参加していた。

これに対して静岡グループは、大きな漁船でメキシコ沖までマグロ類を漁獲する漁業を行っていた⁶²。赤堀最によると1920年代のマグロ漁業は小型船によるものであったが、27年ころから極端な不漁に陥り、1928年末から大型漁船が建造され始めた。そのありようは、「恰も自動車や川蒸気が人力車の職を奪ったと同じよう」であった。日本人漁民が所有する大型漁船は、ヴァン・キャンプ社などの大缶詰会社からの融資を受けて建造された⁶³。

⁶¹ Ibid., p. 52-57. 「下院議員ドックワイラーの言説に関連し当地方邦人漁夫概況報告の件」在ロスアンゼルス領事堀公一発在米特命全權大使齋藤博宛、昭和10年2月15日も、「邦人漁夫の多くは本来よりの漁夫は甚少数にして当地方漁業興隆時代に他の労働より転業せるか或は農業其の他の事業又は労働に失敗して同郷知人の漁夫を頼りて其儘漁夫となりたる者多し」と報告している。

⁶² 2003年1月12日 Terminal Islanders' New Year Party における、元島民からの聞き取り。清水および焼津を根拠に、静岡県の漁民は、カツオー一本釣り漁業を、明治41年には八丈島付近、大正初期にはスミス島や鳥島、太平洋戦争前夜には小笠原諸島やサイパン島まで拡大していた（山口和雄『日本漁業史』東京大学出版会、1957年、151-152頁）。ターミナル島民への聞き取り調査の記録（Terminal Island Life History Project）は、次のサイトで閲覧することができる。
<http://content.cdlib.org/xtf/view?docId=kt367n993t&query=0&brand=calisphere>

⁶³ 赤堀最「日米鮭会商決裂の真因を検討して日本水産貿易業者に訴ふ（二）」Akahori Family Papers, Box 26 folder 12, the Japanese American Research Project Collection of Material about Japanese in the United States, 1893-1985, Special Collections, Young Research Library, UCLA（この論文は同タイトルで、『水産界』622（1934年9月）34-40頁で出版されている）。

漁業規模と出身地域との重なり具合は、漁船所有者とその出身地の重なり具合を詳しく見なければならぬが、現在わかっている 1940 年当時の漁船保有のあり方から、ターミナル・アイランドの日系漁民は二つのグループ、つまりメキシコ沖までマグロを追って遠洋漁業を行うものと近海において缶詰工場のためにイワシを取ったり、釣竿でローカルな市場向けに漁業を行ったりするグループに分けられるのではないか。1940 年 10 月から 41 年 10 月までの日系漁民が操業に従事する漁船保有の状態は次の通りであった⁶⁴。

漁船数は 86 隻総トン数 1588 トン、一世 336 名、二世 143 名、「白人」11 名であった。このうち、21 トンから 69 トンの底引き漁船は、36 隻で総トン数が 1448 トン、乗組員は一世が 227 名、二世が 128 名、「白人」が 11 名である。6 トンから 13 トンの一本釣り漁船は 10 隻で総トン数は 77 トン、乗組員は一世が 17 名、二世が 9 名で、白人はいない。0.5 トンから 4 トン半のジグ・ボート (Jig Boat) は、40 隻で総トン数は 60 トン、一世の乗員は 42 名、二世は 6 名、白人はいなかったが、フィリピン系が一人いた。

地先漁業に従事していたと見られる漁船群のうち、漁船所有者に注目してみると、21-69 トンクラスの漁船の所有者のなかで日系が所有するものは 5 隻のみで、他はターミナル・アイランドのヴァン・キャンプ社などの南カリフォルニアにある缶詰会社やシアトルやギグ・ハーバー、エヴェレットなどワシントン州の企業や個人が所有者となっていた。漁網の所有者や船長、漁労長は日系がほとんどを占めていた。これらの漁船には船長・漁労長のほかに 11 名程度が乗り組む。これに対して 4 から 5 名が乗り組む 6 トンから 13 トンクラスの漁船では、所有者・船長・漁労長とも日系が占めていた。そして 2 名程度が乗り組むジグ・ボートの所有者はすべて日系であった。サンペドロ近辺では、このジグ・ボートの数の多さが、サンディエゴと対比して特徴的である。漁船数の約 50 パーセントを占めるジグ・ボートは、地先漁業に従事する漁船であった。

⁶⁴ Japanese Fishing Boats and Fishermen (Object Name: Records; ID Number: 94.141.1; Location: 22.C.1 Box 8) National Museum of Japanese American, Los Angeles.

14名程度が乗り組む100トンクラスの遠洋マグロ漁船が4隻あったが、このうち1隻が日系漁民の所有で他はすべて缶詰会社の所有であった。乗組員のうち一世は32名、二世は9名、残りは「白人」という構成になっていた。

また別の資料（1937年3月の在サンフランシスコ領事の報告）によれば、「邦人」所有の漁船は次のようになっている⁶⁵。

表1 1937年の日系漁民所有漁船

サンペードロ港	船名	機関馬力	噸約	構造	長さ尺	速力	乗組員数
	遠洋漁業船	500~200					
	サンルカス		150	木造	120	9漣内外	約12名
	アサマ		120	木造	105		
	コロムブス		120	木造	107		
	シパンゴ		100	木造	97		
	ウェスタンエンタープライズ		100	木造	86		
	近海漁業船						
	約20隻	70~250	30~60トン	木造	80呎以下	9漣	10名内外
	約10隻	40~50	12.3トン	木造	80呎以下	内外	4,5名
	外に一人乗りサンパン40隻						
	サンディエゴ港						
	遠洋漁業船						
	大洋	300	100	木造	113	8漣	15
	フライングクラウド	360	100	木造	108	8漣	13
	エンタープライズ	200	50	木造	96	10漣	11
	アラート	270	92	木造	96	10漣	12
	(この他米国缶詰会社より備船)						
	ヘストン	250	100	木造	120	8~10漣	14
	パスコダガマ	200	50	木造	85	8~10漣	13名
	近海漁業船						
	約5隻	60~40	不明				5,6名

⁶⁵ 「外国ニ於ケル排日関係雑件米国ノ部漁業法関係」在桑港総領事鹽崎觀三発外務大臣佐藤尚武，昭和12年3月19日（Collection of papers from the Japanese Ministry of Foreign Affairs dealing with Japanese emigration into the United States and other countries, reel 9, Young Research Library, UCLA）。

二つの資料において船名が重ならないものがあるなど不整合な点があるが、遠洋漁業船は、缶詰会社かワシントン州の個人所有の漁船を借り受けていたように思われる。このクラスでは、漁業労働者としてあるものは船長や漁労長などの専門的な労働者として、そして一般漁船員として漁業に従事していたと思われる。その他の近海漁業船およびジグ・ボートを所有し、漁業活動を行っていた。

サンディエゴでは、近海漁業向けの漁船が少なく、日系漁民の活動が遠洋漁業に特化していたことがうかがわれる。それに対し、サンペドロ近郊のターミナル・アイランドでは、40隻のジグ・ボートが登録されており、ロサンゼルス消費市場を背景に零細漁民の活動が活発であったようである。さらに、カワサキの研究が示すように、1920年代前半には多くの農民が移住して漁業に参入し、1930年代の不況期には失業者も漁業に参入したように思われる。1920年代後半に始まる漁船の大型化によって多数の漁業未経験者が漁業に参入することが困難になり、漁民の階層化が進んだ一方、漁業未経験者が地先漁業を続ける余地は、開かれていたといえよう。かれらは、桜井勝徳が明治中期から1940年代末までの日本における漁業移住のパターンとどれほど一致するのであろうか。桜井は、北海道や長崎、岩手県の漁業根拠地を調査して、移住以前に地先漁業が発達していた地域では、沖合釣縄漁業の熟練者か底曳網漁業のような漂泊的漁業をおこなう漁業者か、潜水採貝従事者に限られていたとする。他方、北海道のように沿岸資源が豊富で地先漁業が存在していない場所では、漁業に必ずしも熟練した移住者ではなくとも漁業に参加できとしている⁶⁶。農業従事者や失業者の参入が多くみられたサンペドロ周辺は、「北海道型」と言えるだろう。

メキシコにおいて漁業に携わっている人々も、1920年代後半から遠洋漁業に特化する第2グループへと変化していった。漁民の数は、在メキシコ日系人5000余名のうち合計170名であった。そのうちエンセナダに50名、タートル湾及びサン・ルカスに約120名がいた。また、期間により30~40名

⁶⁶ 桜井勝徳「出漁と漁業移民」柳田國男編『海村の研究』（国書刊行会、昭和24年）104-113頁。

の増減があったという⁶⁷。さらに、近藤政治のメキシコ水産会社の日本人漁夫 200 名がエンセナダに居住していたという。米国の移民制限のため、出漁時にサンディエゴからきた漁船にエンセナダから乗船し、帰港の際には米国移民局の取り計らいで次回出漁まで船内または会社倉庫の宿泊室での居住と市内での買い物が許されていた⁶⁸。エンセナダのマニアデロ入植地の漁業活動を遠洋漁業に特化していった。入植地の中心的な人物であった鈴木玉之助は南カリフォルニアの米国水産資本の漁業者として活動した理由を説明する。

強大な合衆国の資本で多年築き上げてきた太平洋岸の水産業は如何に優秀な漁撈的技術を有するとは云へこれを一朝に我等の手中に収むると云ふ事は到底出来得ぬことであり、只我等は米国の大資本家によって築き上げられたこの有利事業を利用して最も優秀な漁撈者としての日本人の手腕を発揮することが最も賢明な策である……⁶⁹

低カリフォルニア州在住者は、メキシコ系資本の缶詰・魚粉工場で熟練労働者として働いたり、アワビの潜水漁法に従事したりして、この地域の水産業に不可欠な労働力を構成していた。このことは、太平洋戦争勃発時に日系移民がメキシコ太平洋岸から内陸部へ強制移住させられたとき、メキシコ系缶詰工場が操業危機に陥り、南カリフォルニアからポルトガル系、ノルウェー系およびデンマーク系の移民労働者を導入にして急場をしのごうとしたこ

⁶⁷ 「墨国低加州に於ける邦人漁業状況調査」在ロサンゼルス領事水澤考策発外相田中義一宛、昭和4年2月18日(E/4/9/0/7-6)。

⁶⁸ 日本人メキシコ移住史編纂委員会『日本人メキシコ移住史』196頁。

⁶⁹ 鈴木『『メキシコに於ける海陸共存の殖民』5頁。漁業に従事した移民者の中には、第一グループにとどまって者もいるようである。『日本人メキシコ移住史』の座談会には、「メキシコ太平洋岸の奥地のメキシカリ方面では綿花栽培その他の関連事業で仲々成功している日本人が多かったと思うが、エンセナダ方面ではマニアデロ植民地入植者以外海の方は前述の通り未だ定住する者が少ないこと、漁場を点々としている者が多かったので所謂漁師気質といえようか、儲ければその気分で使うというメキシコ人と略々同じようなところもあったため白系米国人のような強力な地盤は持てなかった…」という指摘がある(198頁)。

と、また戦後すぐに潜水アワビ漁ができる収容者の西部への帰還を認めるようメキシコ政府がアメリカ国務省に要請していたことから分かる⁷⁰。

第3のグループとして、直接漁業に従事するのではなく、ブローカーとしてメキシコ資本と共同したり、後に述べるような日本資本に協力したりする日系移民も存在していた。その代表的な人物は、日本水産の「参謀」と在マサトラン駐在大谷彌七領事が呼んだ家田耕三である⁷¹。彼はナボホア在住の医者であるとともに日墨合同絹織物株式会社を設立したり、経済的・政治的指導者として活動したりした典型的な人物であった。米国側にもロングビーチ在住の柴田信という日系アメリカ人が三井物産と組んでカリフォルニア湾におけるエビ漁業への参入を図るが、これは成功を見ることはなかった⁷²。

第4のグループとして、日本漁業資本が存在する。彼らは決してディアスポラではないが、家田耕三のような移民の活動を考えるときには欠くことのできない存在である。後述するように、日系メキシコ人から見れば、日本漁業資本はまずもって金儲けの機会であった。それと同時に、自分たちの師弟に近代的な漁法を学ばせ、着実な生活を歩ませる手段としても構想された。このような期待を抱かせる日系漁業資本の進出には、二つの契機があった。

ひとつは、日本水産市場における冷凍エビ需要の急増である。とりわけメキシコのカリフォルニア産のエビは、大阪方面で、湊丸にちなんで「湊エビ」と呼ばれ、寿司種用の高級品として珍重された。そして、第二次世界大戦後、メキシコ産エビは1960年代半ばまで輸入エビの筆頭であった。しかし、需要増の原因と具体的な価格変動については、具体的な資料がまだ見つからず、日本外務省文書で「近年我国に於ける冷凍蝦の需要旺盛なる為」と

⁷⁰ Gerald A. Mokma, American Consul at Tijuana, Lower California, to secretary of state, 10 December 1941, 812.628/744 and 14 May 1942, 812.628/768; George Messersmith, American Ambassador to Mexico City, to secretary of state, 5 April 1946, 812.504/4-546.

⁷¹ 「蝦競売入札の経過に関し報告の件」大谷彌七（マサトラン領事）発 広田外相宛昭和9年9月18日。

⁷² 柴田信の事業が1933年に破産したという記録は、次の史料を参照に見られる。Akahori Family Papers, Box 18 folder 1, Young Research Library.

記述されるのみある⁷³。冷凍エビが非常に大きな収益をもたらす可能性を持っていたことは、共同漁業（のちに日本産業に吸収されて日本水産となる）が当時の最新鋭大型トロール漁船湊丸や最大級の冷凍運搬船駿河丸を投入したことからもうかがえる。（これらの漁船の装備表を大洋漁業の元漁船員に見せたところ、1960年代前半の漁船の間違いと述べていた⁷⁴。）さらに、日本水産市場において共同漁業と競っていた林兼商店が、外務省や海軍の反対を無視して、朝鮮総督府から出漁許可を獲得してまで、カリフォルニア湾に出漁したことからもうかがえる。

第二の契機は、メキシコのラサロ・カルデナス大統領がメキシコ民衆の栄養状態を改善する方策として漁業資源に注目し、漁獲の拡大やニジマスの養殖、そしてメキシコ市における大規模冷凍施設の建設に関心を持っていたことである。既述したように、メキシコ政府は1920年代に東京水産講習所に留学生を送って日本水産界との関係を持っていたが、1934年カルデナスが大統領になると森林狩猟漁業局を大統領直属の機関とし、その長官に「メキシコ環境保全運動の父」と呼ばれるミグエル・ケベド（Miguel A. Quevedo）を任命した。ケベドは日本の水産技術を信頼して日本からの漁業専門家を招聘することを求め、その一環としてカリフォルニア湾エビ漁業に関心を持っていた共同漁業が、近代的なトロール漁法のデモンストレーションを行うためにメキシコに招かれた。このような契機が、日系メキシコ人に、従来のアワビ漁業とは異なる形での漁業活動への参加の道を開いたと言える。しかし、この空間は、次章以降に展開するように、日中全面戦争の勃発で徐々に狭められてゆくだろう。

これら4つのグループの相互関係は、まだこれから明らかにされる必要がある。少なくとも第3グループのカリフォルニア湾沿いの指導的日系メキシコ人と第4グループの日本資本とのつながりは深いものがあつた。また、日系メキシコ人がトラックなどでカリフォルニア湾やエンセナダの水産物をト

⁷³ 「墨西哥国及中米各国水産事業報告」昭和11年10月24日有田外相より井沢代理公使宛（E/4/9/0/7-6）。

⁷⁴ マルハ下関支社における大洋漁業トロール漁船元乗務員からの聞き取り（1999年7月19日）。

トラックで運んで米国領内で販売していたことは、カリフォルニア湾で活動していた米国系漁業会社パン・アメリカン漁業会社が在ヤバロス米国公使に送っていた調査資料からうかがわれる。近藤政治の事業や市場および漁場の近接性からして、サンディエゴと低カリフォルニア州の第2グループ内部で密接な交流があったと想像される。また、第1グループと第2グループは、サンペドロ地域の場合、居住地が同じで、緊密なコミュニティを形成していた。しかしながら、第1・第2グループとメキシコ在住の第3グループとの関係は、現在の研究段階では、その在り方を示す史料は見つかっていない。ロングビーチに居住し、三井物産などの日本資本と関係を持ちながらカリフォルニア湾のエビ漁業に参入しようとした柴田信と、家田耕三や犬飼徳十郎との関係はあるのだろうか。第1・第2グループと第4グループとの関係は、おそらく深い関係がなかったように思われる。例えば年配の元ターミナル・アイランド島民は、海軍練習艦「八雲」の寄港はよく覚えているが、共同漁業（日本水産）や林兼商店などの漁船については記憶していない。加えて、第1・第2グループは、米国資本とのつながりが強かったこと、中規模・小規模の漁業者はロサンゼルスという巨大な都市市場へのアクセスを持っており、市場を日本資本に依存する必要がなかったからだろうと、筆者は推測している。

次に漁業技術論的な問題を取り上げる。この問題は、移民たちの持つ社会資本の問題と関連する。小農経営には、都市市場の需要に対応しながら多様な商品作物を栽培する能力が必要であったことが、日本における農地改革の成功を語るときに強調される⁷⁵。水産業においても、漁船員であっても独立した漁業者であっても漁業は、大型化すればするほど資本と熟練が必要とされるリスクの大きな産業である。また、寿司種用のエビの冷凍作業に顕著であるが、収穫後の保存も重要な作業である。このようなことを考えるとき、カリフォルニア近辺に移住した漁業移民の出身地において彼らがどのような社会資本を蓄積していたのか、（出身地は和歌山・三重・静岡・長崎・千

⁷⁵ たとえば、岩本純明・暉峻衆三「農地改革—地主制の終焉と自作農体制」袖井林二郎・竹前栄治編『戦後日本の原点—占領史の現在下』（悠思社、1992年）61-126頁が代表的である。

葉・茨城・石川・岩手県に及んでいる)、米国においてそれぞれの社会資本をどのように日系移民同士のみならずクロアチア系・ギリシャ系・イタリア系・ポルトガル系、ノルウェー系、デンマーク系移民と共有したのか、研究課題は多く残されている⁷⁶。さらに出身地域での移住過程に遡れば、漁業技術が、例えば日本のような国民国家においても、きわめて限定的な場所で蓄積されたものが、江戸時代および明治期以降に伝播していったことを、桜井は指摘している⁷⁷。このような技術が、人の移動(労働力としての、資本としての)どのようにして、米国メキシコ国境海域に蓄積されていったのかを明らかにする必要がある。たとえば、日本からの漁民が伝えた生き餌を撒き竹竿を用いるカツオ・マグロの一本釣りは、従来のシチリアなどの地中海で行われていた網漁業とともに幅広く採用された⁷⁸。図8に見られるように、ヨーロッパ系漁業移民もこの漁法を積極的に取り入れ、大型マグロを漁獲するために、竹竿を二本または三本使用する方法も採用していた⁷⁹。網を使用する漁獲では、密集したマグロがぶつかり合うために魚体内部に傷が入って、缶詰用として価値が下がるためであった。そして、撓りに強い北日本で産出される特殊な竹が、好まれていたという⁸⁰。

⁷⁶ Croker, "The California Mackerel Industry"が、日系およびイタリア系漁民によるサバ延縄漁および巻き網漁業の分析を行っている。

⁷⁷ 桜井「出漁と漁業移民」346-47頁。

⁷⁸ シチリアでもマツタンツァ (mattanza) という伝統的定置網漁業も変容を遂げている (NHK 衛星第二放送「地球に好奇心 海の闘牛—マツタンツァ ~シチリア・マグロ漁師の誇り~」2003年7月26日放映)。

⁷⁹ この方法は、静岡県の漁民たちが昭和4年ころから、二本竿によるピンナガマグロ漁業を行っていた (山口『日本漁業史』190頁)。また、房総半島の布良・白浜で発達し、大正3年に日本農商務省が特別奨励金を設けて、まず千葉県で奨励し始めた延縄漁業も導入されたが、これはサメによる食害が大きすぎるために失敗した (同上書, 183, 187頁および Estes, "Kondo Masaharu," p. 10)。さらに、宮城県および岩手県で発達した大謀網漁業も導入されたが、地元漁民の反対で禁止された (山口『日本漁業史』191頁および Estes, "Kondo Masaharu," 10)。

⁸⁰ "A Tribute to Tuna and the Men who Once Fished Them from the Racks" (Michael Fowlkes Production, n.d.); Estes, "Kondo Masaharu," 10)。

図 8 南カリフォルニアにおけるマグロー一本釣り

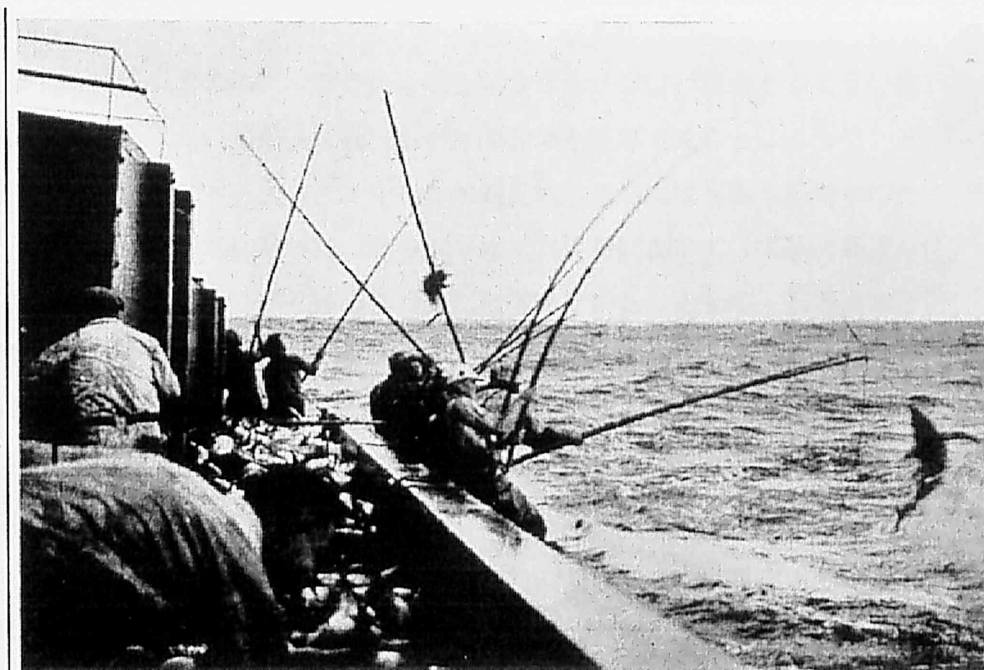


FIG. 17. Two-pole tuna fishing. When the alleyway fills up, it is necessary to move the catch forward. Part of the crew is thus engaged. Photograph by Jack Holroyd.

出典：H.C. Godsil, "The High Seas Tuna Fishery of California," Fish Bulletin No. 51, (Division of Fish and Game of California Bureau of Marine Fisheries, 1938), 32

これらの漁法が、決していわゆる伝統的なものではなく、竹竿を用いた一本釣りも近藤政治らが導入を試みたマグロ延縄・大謀網漁業も、そして漁船そのものも、近代日本列島の水産業で革新されていく最新の技術が次々と導入されていった。水産事業を推進した指導者たちは、日本およびアメリカ合衆国で最先端の水産教育などを受けていたという人的資源の豊かさも忘れることはできない⁸¹。市場面では、米国および日本の水産市場にアクセスできたこと、資本面で米国大水産資本および日本の財閥系資本との関係が深かったこと、そして技術面では出身国に進んだ漁業技術が存在してそれらを導入

⁸¹ 鈴木玉之助は、大津水産講習所に在学したのち、東京水産講習所では同製造所で技師として働き、大北水産会社で働いていた。渡米後は、新たに設置されたワシントン大学の水産学のコースにも在学していた（日本人メキシコ移住史編纂委員会『日本人メキシコ移住史』187-188頁）。家田耕三は、金沢医科専門学校に在学していた。

できたこと、これらの条件が、第2グループが米国メキシコ海域で比較優位少なくとも同等の立場を他の漁業移民集団に対して確保できた理由であった。

また、メキシコの移民指導者からなる第3グループは、後述するように技術面・資本面において優位に立つ日本水産資本と結びつくことによって、メキシコ現地漁民はもとより、メキシコ水産資本、さらには米国水産資本にたいして優越した立場にあった。日本政府は、水産業においては米国政府よりも大きな影響力をメキシコ政府にたいして与えていた。そして、日本資本と米国資本の競合関係においては、メキシコ政府やメキシコ現地漁民への働きかけや連絡役という役割を通じて、日本水産資本のメキシコ沖進出にとって不可欠な働きを果たした。これら日本側の活動は、松井ら水産顧問の受け入れや留学生派遣などに示されるように、生活水準の向上と漁業近代化を志向するメキシコ政府に好意的に受け入れられた。このような条件が、日系移民が漁業活動に参加する活動の空間を広げていたといえよう。

国民意識の面では、「帰化不能」とされた日系漁民と対比して、イタリア系、スラブ系、ポルトガル系漁民は帰化可能な「白人＝アメリカ人」とされているが、実際の帰化率はかなり低く、カリフォルニア州で商業漁業を許可された漁民のうちイタリア系は1268名中557名（米国生まれ6名）、スラブ系は690名中118名（米国生まれ6名）、ポルトガル系は236名中151名（米国生まれ2名）が「外国人」の身分であった（日系漁民は、750名中米国生まれが100名を占める）⁸²。「アメリカ人になること」は、ヨーロッパ系漁業移民者の間でも希薄であったのであろうか。

日系移民にとって、人種差別を行うアメリカに対する批判と「祖国日本」の優れた水産技術とがアイデンティティの基礎となっていた。第2グループのうち米国側に活動の拠点を持つ漁業者は、帰化不能とするアメリカ社会に批判的であり、「白人」漁業者を対等のあるいは本国日本の漁業技術を自ら

⁸² Samuel J. Hume, California Council on Oriental Relation, "A Brief Presenting Certain Facts Offered in Opposition to Assembly Bills 754 and 2653 Entitled 'An act to amend section 990 of the Fish and Game Code, relation to commercial fishing licenses'" in 在サンフランシスコ総領事塩崎観三兼外務大臣佐藤尚武, 昭和12年3月19日（本邦移民関係雑件 墨国の部 J/1/2/0/J2-8）。

身につけたことを根拠に劣等な競争者として見ていた。それに対し、メキシコ側にいた移民漁業者は、人種差別を行うアメリカ合衆国と対比してメキシコが「親日」であることを強調しつつ、やはり本国の漁業技術の水準を根拠に、メキシコ人一般に対して指導者としての意識を持っていた。

このような国家をめぐるアイデンティティ形成の一方で、「海を越える」という意識については不明のまま残されている。1930年に「組合員は平等の権利と義務とを有する理想に燃え意気天を突」いてメキシコに渡った濱口加次郎たち「和歌山県海外出漁組合」の出発の経緯が手がかりになるかもしれない。既述したように愛媛県八幡浜市の打瀬舟が太平洋を横断してカリフォルニアに到達していた話は有名になっているが、1930年代にはいって、このように大資本や国家権力の後ろ盾を持たずに太平洋を越えた漁民たちの海に対する意識はいまだに十分解明されていない。現在、日本史研究において稲作農業中心主義が見直され、山村における多様な生業のありようが明らかにされてきた⁸³。漁民という呼称をやめて漁労のみならず回船問屋など海に関連した多様な生業に従事していた「海民」という概念を用いることで、この地域の移民の姿がより見えてくるのだろうか。あるいは、「海洋民族思想」の影響のもとでの帝國的な越境なのだろうか⁸⁴。これらの点は今後の課題として、第三章で、第3グループの存在が大きな役割を果たす1930年代後半のカリフォルニア湾における日本漁業資本の活動を詳しく見ていく。

⁸³ このような成果として、山村の生業に焦点をあてた白水智『知られざる日本—山村の語る歴史世界』（NHKブックス、2005年）が特筆される。

⁸⁴ 海洋民族思想や南進論に関する研究を踏まえる移民研究—移民先が米国・カナダのみならず「純然たる日本拡大に資すべき」地とされたメキシコのいずれであろうが—が必要であろう（広瀬玲子「国粹主義者の移民論・植民論覚え書き」『歴史評論特集近代日本の「移民」を問いなおす』513（1993年1月）39頁。

第三章 日本水産資本のメキシコ進出

移民漁業者の活動が展開していたメキシコ北西岸に参入する日本水産資本について、まず、その成長過程を簡単に触れておきたい。参入企業は、山口県下関に拠点を置く林兼商会（のちの大洋漁業、現在はマルハ）と福岡県戸畑に拠点を置く共同漁業（後の日本水産株式会社）であった。両社は、20世紀初頭の日本水産業の資本主義的發展を代表する会社であった。両社の歴史にそくして水産業の發展を、技術と資本の蓄積を概観しておく。

1930年代の前半に、母船形式で漁業活動を行なう日本水産業の技術レベルは、世界最高水準に達していた。まず、1928年に共同漁業が氷点下20度の船内凍結設備を持った世界最新鋭の大型ディーゼル・トロール漁船釧路丸（991トン）を就航させた。同社は、大阪鉄工所で建造された湊丸（664トン）を1934年に就航させた⁸⁵。これら最新鋭のディーゼル・トロール漁船が、1,000トンクラスの冷凍運搬船とともに80トンクラスの小型漁船を従えてメキシコ沖に1935年12月に登場するのである。また、林兼商店も、急速冷凍設備を備えた播州丸を就航させて、同じくメキシコ沖に1936年に登場する。共同漁業は、すでに、1920年代後半に南シナ海に進出し台湾やシンガポールに拠点を置いた沖合トロール漁業の経験をつんでいた。林兼商店も1935年に南シナ海トロール漁業に参入していた⁸⁶。

⁸⁵ 湊丸の仕様は次の通り。第三種漁船、昭和9年12月進水、大阪鉄工所製造、664トン、排水量空荷（769トン）満載（1,133トン）、冷凍室容量総容量62立方メートル、純容量39立方メートル、乗員収容力40名、航続距離20,160浬（80日）、冷却機アンモニア式2台、冷凍能力60トン、冷凍装置タンク式2台、冷凍能力一日12トン、無線電信2台、真空管式、長波1kw短波1kw、通達能力長波400キロ以上短波不定、方向探知器テレフンケン式、音響測探機ヘンリーヒューズ自記式一台（共同漁業「墨西哥国及中米各国水産事業報告」有田外務大臣発井沢実公使宛、昭和11年10月24日E/4/9/0/7-6）。

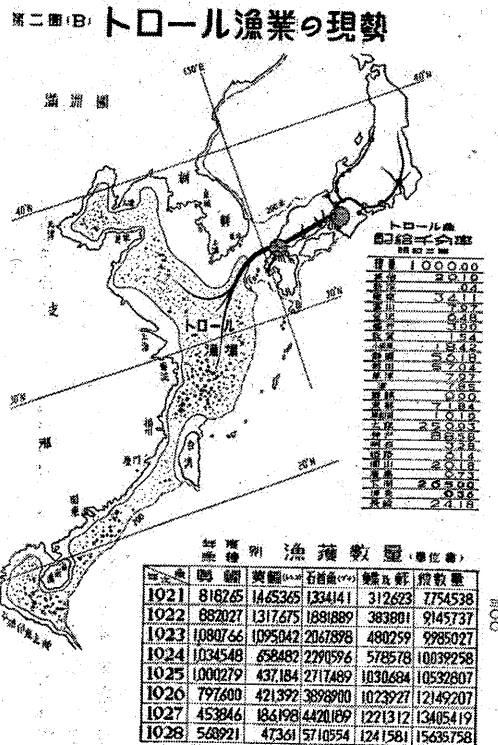
⁸⁶ 岡本『日本漁業通史』180-181頁および日本水産『日本水産50年史』313頁。このような遠洋漁業への進出の背景には、まず、トロール漁業が乱獲と二隻曳手繰船の出現で以西漁場から追われたこと、そして二隻曳の以西手繰船も東シナ海における過当競争で南シナ海に進出を余議なくされたことがあった（小林『「海のバタ屋」』16-18頁）。

表2 1938年日本水産のメキシコ派遣漁船

船名	総トン数	船種	邦人乗組員
駿河丸	980	冷凍運搬船	40
湊丸	664.21	汽船トロール	35
仙台丸	472.77	汽船トロール	30
箕面丸	472.77	汽船トロール	30
能肥丸	80.44	一艘曳機船曳網及び二艘曳機船底曳網	11
久美丸	80.44	一艘曳機船曳網及び二艘曳機船底曳網	11
万寿丸	80.44	一艘曳機船曳網及び二艘曳機船底曳網	11
慶祥丸	80.44	一艘曳機船曳網及び二艘曳機船底曳網	11
富士丸	80.37	一艘曳機船曳網及び二艘曳機船底曳網	13
高貴丸	80.37	一艘曳機船曳網及び二艘曳機船底曳網	11
明治丸	80.37	一艘曳機船曳網及び二艘曳機船底曳網	11
瑞穂丸	80.37	一艘曳機船曳網及び二艘曳機船底曳網	11
大安丸	86.93	一艘曳機船底曳網	12
合計	3319.92		237

出典：墨国太平洋岸に於ける邦人蝦漁業に関する件」越田公使発有田八郎外相宛，昭和14年3月21日（E/4/9/0/7-6）

図9 日水「遠洋」トロール漁業の活動海域（東シナ海および南シナ海）



出典：桑田『国司浩助氏論叢』300頁

日本水産資本によるメキシコ進出は、1930年代の前半にいくつかの失敗を経験した後に本格化した。まず、1931年から32年にかけて、カリフォル

ニアのロングビーチ在住の柴田信が、三井物産と提携して、メキシコ人漁夫を雇用して資本集約的なエビ漁業を行おうとした。しかし、メキシコ人漁夫が安定した漁獲を確保できなかったために失敗に終わった⁸⁷。1934年には、三つの利権がメキシコ北西部における漁業活動に参加した。まず、柴田がアメリカ人銀行家グリフィンとメキシコ人資本家ベルンステイン兄弟、およびシナロア州議員タリバとともに、メキシコ人漁民による漁業協同組合をシナロア州に組織して、沿岸で漁獲されるエビのすべてを支配する事業を行おうとした。二番目のグループは、日本の共同漁業であった。その代表者高橋千里は、1933年12月、メキシコ政府に対して、家田耕三およびアウレリアノ・アナヤ（Aureliano A. Anaya）とともに漁業許可を求める申請を提出し、シナロア州トポロバンポの漁業協同組合と契約を結んだ。共同漁業は、60万円の資本金でもってメキシコの水産会社を立ち上げ、1934年10月に、一日5トンの冷凍能力を持つ500トンの仙台丸を中心に、実際の漁獲活動を行う計画を立てていた。メキシコ外務省も在横浜メキシコ領事に宛てて、共同漁業に「便宜」を与えるに指示を出していた⁸⁸。三番目のグループが、林兼商店であった。日墨協会会長であった小林武麿の紹介によってメキシコ水産局に働きかけを行なった。加えて現地代表であった大西正夫は1934年9月にパン・アメリカン水産会社と接触し、沖合で生エビを買い付けてこれを冷凍して直接市場に輸送しようとしていたのである⁸⁹。

これらの日本水産資本のカリフォルニア湾への進出に大きな役割を果たしたのが、在メキシコ日系人の持つメキシコ人実業家やアメリカ合衆国に持っていたコネクションであった。まず、メキシコ市民権を持っていた家田耕三は、愛知県中島郡千代田村（現稲沢市）に生まれ、金沢医科専門学校を卒業した後、大正2年4月にメキシコに入国後医師として蓄財すると共に、

⁸⁷ 第2章脚注72参照。

⁸⁸ アナヤ（水産物生産供給株式会社）発共同漁業株式会社宛「墨国漁業企業調査計画」、昭和9年8月8日、および在マサトラン領事大谷彌七発外務大臣広田弘毅宛、1934年1月5日および9月18日；メキシコ外務省発在横浜メキシコ領事館宛、1933年11月26日（E/4/9/0/7-6）。

⁸⁹ 大谷彌七（マサトラン領事）発広田外務大臣宛「蝦競売入札の経過に関し報告の件」昭和9年9月18日；Guy W. Ray, American Vice Consul, Guaymas, to secretary of state, 10 September 1934, 812.628/233 および 24 November 1934, 812.628/242.

ソノラ州議会議員であったアウレリア・アナヤとともに絹織物工場を建設した。しかし、大恐慌の不況の中で 1932 年にその工場を閉鎖せざるを得なくなっていた⁹⁰。外務省は、現地日本領事は家田のことを共同漁業の「参謀格」と評していた。また、彼はソノラ州連合日本人会の常任幹事であるとともに、現地メキシコ人の日系移民への好感は、彼の「磊落外向的手腕」よると日本外務省は評価していた⁹¹。

もう一人は、犬飼徳十郎であった。彼は、一九二五年ソノラ州エスペランサにおいて製氷所と発電所をアナヤと共に設立した一方、林兼商店の進出の際には「至大の応援」を行ない、奥田久七と尾花伴吉とともに、日本水産に比して資本規模三分の一の林兼商店の操業を成功に導いた人物であった。また、漁業技術を習得のためにヤバロス港の漁業組合に二世の子弟を参加させた⁹²。

次にあげる二名の詳細はまだ不明であるが、静岡県安倍郡三保村出身でロングビーチ在住の日系移民柴田信は、米国やメキシコの水産資本や三井物産との間で活動していた。また、1913 年には渡米し、カリフォルニア州政府に雇われ、同地のマグロ漁業のパイオニアであった福野久松は、共同漁業側と組んでカリフォルニア湾における漁業活動に参加していた⁹³。

⁹⁰ 家田のもとで働いた佐伯勝によると、「群馬県の桐生から織物織機二十台、織物職人一人、職工一人、機械鍛冶一人、女工二人を連れてきて」設立されたが、倒産のときには、積み立てられていた月額 30 ペソの給料は、一銭も支払われなかったという（佐伯勝「『五重塔』五十基の模型完成を目指して—メキシコ在住六十七年の九十翁の回想』『めいしん』オフセット版メキシコ市、1996 年、97、99—100 頁）。

⁹¹ 外務省亞米利加局『「メキシコ」國「ソノラ」、「シナロア」兩州視察報告書』48—49 頁。

⁹² 滝沢太郎『親日の新興国メキシコ国情大観』315—18 頁および越田公使「墨国太平洋岸に於ける邦人蝦漁業に関する件」有田八郎外相宛、昭和 14 年 3 月 21 日（E/4/9/0/7-6）。

⁹³ 柴田信について、『日系移民人名辞典<北米編>第一巻』（日本図書センター、1993 年、54 頁）によれば、静岡県安倍郡三保村出身で、1890（明治 23）年 1 月に生まれ、1907（明治 40）年 4 月に渡米ののち、ソルトレークで学び、1914 年ころにウィミングトンに定住したという。底本である『在米日本人人名辞典』が発刊された 1922 年の時点で、東洋水産会社を経営していた。1937 年 12 月にメキシコ沖で建網漁業に乗り出すために、日本から技術者および漁夫を雇い入れようとした（『水産界』663（1938 年 2 月、75 頁）。福野については、松井『メキシコ風土誌』402 頁を参照。福野は京都府水産講習所を卒業した後、近藤に招かれて 1914 年に低カリフォルニア州のアワビ漁場調査を行なっている（Adán Cháirez, Historia de la Pesca del Atún en México, p. 87）。

図 10 アウレルアノ・アナヤと日水幹部



昭和12年 来日したメキシコのアナヤ氏（メキシコ事業の現地協力者）を招いて——前列
左から白洲次郎 福野久松 国司浩助 アナヤ 田村啓三 蓑田静夫 岩本千代馬 後列
左3人目から今村末吉 増井六郎 植木憲吉 西村有作 増井進 桑田透一 窪井重男

出典：日本水産『日水50年史』312頁

当初の日本資本のメキシコ進出は、日本資本同士および日米資本の間の競争で始まり、メキシコ政府の反対で失敗に終わった。1934年にカリフォルニア湾漁業に参加を試みた三つの日本資本のうち、在メキシコ日本公使は、共同漁業に生エビを、柴田・ベルンステイン派に乾燥エビを扱わせることで妥協させた。しかし、このような日本資本のカリフォルニア湾進出についてカジェスらメキシコ人政治エリートは、日米対立の場合を懸念し、1934年8月、ロドリゲス大統領が実質上エビの輸出禁止をもたらす輸出税を設定したため、共同漁業および柴田組のエビ漁獲事業は頓挫してしまった⁹⁴。

⁹⁴ 大谷領事発広田外相宛 1934年1月5日及び10月4日（E/4/9/0/7-6）。

しかし、1934年12月にラサロ・カルデナスがメキシコ大統領に就任すると、カリフォルニア湾における日本資本の進出に大きな変化がおきる。政治的には、有力者カジエスの選択で大統領となったカルデナスは、1935年、カジエスをメキシコ政治から追放することに成功する⁹⁵。経済政策においては、メキシコの経済的独立を迫るとともにメキシコ人民が経済的独立のために近代的な科学技術を習得することを必要であると宣言した⁹⁶。水産政策においては、森林狩猟水産局を農務省から独立させて大統領直轄としたうえ、メキシコの「森林保全運動の父」と呼ばれたミグエル・ケベド（Miguel Angel de Quevedo）をその長官に任命したうえ、水産技師を日本から招聘するように指示した。1935年6月中旬ケベド局長は堀義貴公使を訪問してその人選について斡旋を依頼した⁹⁷。松井佳一と山下利得は、1936年3月にメキシコに到着する。彼らの活動を、後述の共同漁業による水産資源調査とあわせて論じたい。

カルデナスが大統領に選出された直後、農務大臣フランシスコ・S. エリアス（Francisco S. Elias）がアナヤに、メキシコ北西岸の測深を含む科学的調査をともなった漁業コンセッションを与えた。このコンセッションには、メキシコ北西岸の測深を含む科学的資源調査を行なうことが含まれていた⁹⁸。

⁹⁵ Sugiyama, "Reluctant Neighbors," 39.

⁹⁶ カルデナス政権の経済政策は、一般に民族主義的と形容され、この概念に基づいて具体的な政策が説明されることが多い。しかし、近年の研究では、民族主義的経済政策の象徴とされる英米石油資本の国有化が、きわめて状況的な決定であったことが明らかにされている。また、カルデナス改革は、民族主義的色彩を帯びながらも、外国為替の変動に敏感であったように対米関係を軸に国際経済の枠内で活動していた。改革のためには外貨が必要であり、改革の実務的側面を担ったのが、財務大臣エデュアルド・スアレス（Eduardo Suárez）を中心としたテクニコと呼ばれる経済官僚であった（Sugiyama, "Reluctant Neighbors," 39-40）。スアレスのカルデナス経済発展政策への見解は、Fernando Benítez, *Entrevistas con un solo tema: Lázaro Cárdenas* (México, D.F.: UNAM, 1979), 20 を見よ。

⁹⁷ 外務省亜米利加局『外務省執務報告第一巻昭和11年』（クレス出版、1994年）111頁、Roger Tyler, Jr., American Vice Consul, "Mexico's Conservation Program," 23 May 1938, 812.6171/25。カルデナスの漁業政策の簡潔な要約として、Gloria Hernández Fujigaki, *La Pesca a través de los informes presidenciales, 1825-1986* (México, D.F.: Secretaría de Pesca, 1987) 32-35がある。

⁹⁸ 契約のそのほかの内容は、契約期間は15年間であること、6万ペソ以上の投資を行うこと、グアイマスサトランに第一の缶詰工場を、バルデラス湾に第二の缶詰工場を建設すること、そして契約終了後、すべての漁業関連資産はメキシコに返還される、等

共同漁業は、高橋千里と高橋清一を派遣し、アナヤおよび家田とともに、農務勸業省、大蔵省、逓信省、交通土木省などへの運動を行なっていたのである⁹⁹。この契約によって共同漁業は、1935年に湊丸を派遣して試験的な漁業活動を行なうことを決定した¹⁰⁰。

堀義貴在メキシコ日本公使は、共同漁業がメキシコ沖エビ漁場を独占できるように便宜を図ろうとしていた。その理由は、林兼商店がメキシコ沖に進出するおそれがあったからである。林兼商店は、収益率の高い日本のエビ消費市場が共同漁業に独占されることを恐れ、パン・アメリカン水産会社に再び接触していた¹⁰¹。堀公使は、日本の二つの漁業会社がメキシコ近海で競争しあうことを心配し、共同漁業の現地責任者福野久松に対して、メキシコとの共同出資企業を設立してメキシコエビ漁業を独占すべきだと示唆した。このために、堀公使自身がメキシコ・日本共同エビ漁業会社設立のための草案を作成し、日本外務省も公使の私的なイニシアチブという条件でこの動きを認めた¹⁰²。

カルデナス大統領との晩餐に招かれた堀公使は、謁見の機会を利用して、共同漁業による試験操業、水産技師の派遣などを提案した。カルデナスはメキシコ・日本共同漁業会社の設立に非常な好意を示し、外務大臣（Eduardo Hay）に対して共同漁業との交渉を始めるように指示した。カルデナスの大統領が日本資本に望んでいたことは、（一）缶詰工場を設立すること、

であった（「共同漁業会社漁業権獲得二関スル件」大谷領事発広田外務大臣宛昭和10年2月4日 E/4/9/0/7-6）。

⁹⁹ 共同漁業株式会社「墨西哥及中米各国水産事業報告」有田外相発井沢代理公使、昭和11年10月24日（E/4/9/0/7-6）。

¹⁰⁰ 昭和10年2月26日共同漁業株式会社取締役社長田村啓三発堀公使宛（E/4/9/0/7-6）。1934年に建造されたディーゼル船湊丸は、664トン、90日間の連続航行が可能で、マイナス20度での日9トンの急速冷凍能力を持ち、エビで270トン、マグロで300トンの積載が可能な新鋭船であった。また、音響測深機を装備していた。ロサンゼルス・タイムズは、湊丸を中心とする共同漁業株式会社の漁船団を「遠洋漁業ために開発されたデザインを利用する上で世界のリーダー」だと論評した（Los Angeles Times, March 19, 1936）。

¹⁰¹ Yepis to secretary of state, 15 January 1936, 812.628/305.

¹⁰² 堀公使発広田外務大臣宛、昭和11年2月19日および広田外相発堀公使宛、昭和11年3月22日（E/4/9/0/7-6）。

(二) 魚肥生産のためにフィッシュ・ミール工場を設立すること¹⁰³, (三) 近代的な漁業技術をメキシコ人漁民に習得させることであった¹⁰⁴. メキシコ政府は, 同様の漁業開発援助への要請を, 1930年に米国側にも出していたが, 米国人専門家の交通費や個人的経費をメキシコ政府が負担するように要求されたため, 米国からの援助を受けることを断念していた¹⁰⁵.

共同漁業が派遣した漁船団は, 中米沖における試験漁業の後に, 1936年8月, マサトラン港に到着した. 1936年の活動は, 科学的調査に集中したものであった. 松井・山下の水産技術援助および共同漁業の水産資源調査活動が米国政府による技術援助政策を促したものであるので, やや詳しく述べたい.

四つある活動のうち最初のものは, 漁業専門家松井佳一および山下利得両名による水産技術援助であった. 1936年3月にメキシコに入国した両名は, 松井は1938年3月まで, 山下はメキシコ政府の要請を受けて滞在予定を延長して1939年までメキシコに滞在した¹⁰⁶. かれらは, メキシコで三つのプロジェクトを実行に移した. 第一に, 松井の提案を受けて, カルデナスはパスカロ湖畔に臨湖実験所と温水性養魚試験場を設立した. さらに, ニジマス養殖施設としてアルモロヤ川とミグエル・イダルゴ・イ・コスチジア国立公園に建設した. また, 計画では, クエルナバカ近くのチャプルテペック湧水

¹⁰³ カルデナス大統領は, 農業生産力を引き上げるために化学肥料の輸入にも積極的であった (Joseph Cotter, "Before the Green Revolution: Agricultural Science Policy in Mexico, 1920-1940" (Ph.D. diss., University of California, Santa Barbara, 1994), 203, 211-12, 246 n144).

¹⁰⁴ 堀公使発広田外務大臣宛, 昭和11年3月25日及び26日 (E/4/9/0/7-6). この会談に対する米国大使館側の反応は, R. Henry Norweb to Under Secretary of State Sumner Welles, 30 April 1936, 812.628/339 にみられる. カルデナス大統領は, 日本との漁業協定に反対する側近に対して, 米国の誤解を受けかねない懸念と米国との近接性もあって, 日本との正式な漁業協定を抑えたと述べた.

¹⁰⁵ Manuel C. Tellez, Mexican Ambassador to United States, to Secretary of State Henry L. Stimson, 27 December 1930, 812.628/104 and Secretary of Commerce to Secretary of State, 17 January 1931, 812.628/106).

¹⁰⁶ 松井博士は, この功績によりカルデナス大統領から直接感謝状と金時計を渡された (松井『メキシコ風土誌』口絵).

群とミチヨアカン州のクパチトジオ川にニジマス養殖場を建設することになった¹⁰⁷。

第二のプロジェクトとして、ケベドから「白紙委任」を受けて、松井はメキシコで最初の近代的な水産講習所である森林水産狩猟講習所（Instituto de Enseñanza y de Investigaciones Forestales y de Caza y Pesca）を、メキシコ市郊外のコヨカンに設立した。講師は山下が担当し、25名の学生が入学した。松井は、さらにチャプルテペック植物園の設立する際にケベドを助け、アカプルコやベラクルスに水族館を建設する計画を立てた¹⁰⁸。

カルデナスにとってより重要であったのは、1935年に完成したが使用されないままであったメキシコ市のアベラルド・ロドリゲス市場を活性化することであった。これが、第三のプロジェクトであった。このマーケットは、冷蔵庫をもつ140の水産物小売業者が入っていたが、彼らに必要な冷凍設備が備わっていなかった。カルデナスと松井は、日本の水産会社に大規模な冷凍施設を設置させると同時に、国有鉄道の安い運賃を利用し、中間業者を排除することによって、廉価な水産物をメキシコ市民に供給しようと考えたのである。しかし、1938年3月の石油国有化の結果生じた経済的困難のために、この計画は実現されないまま放置された¹⁰⁹。

¹⁰⁷ 同上書 418-22 頁。この事業に関連して、富士養鱒場型の魚止装置機（フィッシュ・ストップ・スクリーン）がメキシコに輸出された。日本製では初めての海外輸出であった（『水産界』665（1938年4月）71頁）。

¹⁰⁸ 昭和11年6月12日松井佳一発岩本千代馬（共同漁業株式会社）（E/4/9/0/7-6），松井『メキシコ風土誌』425-27頁および Pierre de L. Boal, to secretary of state, 24 May 1937, 812.628/392; Stewart to secretary of state, 27 July 1937, 894.20210/388.

¹⁰⁹ 松井『メキシコ風土誌』425-27頁。このとき、日水は漁獲物の試験販売を行っている。国司浩助が主張していた「ミッシヨナリーワーク」を実践したのであろう（桑田透一編『国司浩助氏論叢』（昭和14年）110-113頁。同時期、日本水産は日本国内でも大規模な冷凍水産物の流通経路の実現を図っていた（高宇「『水産工業』戦略の展開（中）日本食糧工業の場合」『立教経済学研究』61巻2号（2007年）151-179頁））。

二つ目の活動は、カリフォルニア湾およびタンピコ沖メキシコ湾におけるトロール漁業のデモンストレーションであった¹¹⁰。1937年、湊丸がカリフォルニア湾で漁場調査を行なう一方、タンピコ沖のメキシコ湾においては新たに就航した箕面丸を使用し、8万ドル相当の魚網を犠牲にして、タンピコ周辺海域ではトロール漁業が不可能であることを明らかにした¹¹¹。この調査で採集・冷凍した生物を用いて、共同漁業は、「英語で記述され……、メキシコでそれまで得られることのなかったメキシコの魚類情報を載せた……美しく印刷された図鑑」を出版した¹¹²。

三つ目の活動は、日本における水産業をメキシコ人に紹介することであった。水産局調査官アンヘル・ディアス・ボノラを代表とし、タンピコやクリアカン、シナロア、トルツガス湾の漁業組合代表者が、1937年7月横浜に上陸し日水代表国司浩助に面会、さらに東京水産講習所や東京帝大三崎臨海実験所を見学したほか、水産商品の保存、輸送、販売方法など見学、さらに日本魚網船具会社（現ニチモウ株式会社）、日水小田原研究所、中禅寺湖におけるニジマス養殖場ほか、造船関係では湊丸を建造した大阪鉄工所などを見学して、一ヶ月の滞日を終えて湊丸で帰国した¹¹³。加えて、日本の国際学友会（現独立行政法人日本学生支援機構）の招致学生として2名を、日本側の経費負担で養殖研究のため水産講習所に留学させた¹¹⁴。

¹¹⁰ この調査の成果は、次の報告で見ることができる。“Informe de las exploraciones de caracter científico y tecnico-comerciales, desarrolladas por los buques pesqueros japoneses Minato Maru, Minowa Maru y Sapporo Maru, en las aguas jurisdiccionales de Mexico y en las extraterritoriales frente a nuestras costas,” Boletín del Departamento Forestal y de Caza y Pesca, año 3, num 8 (Septiembre-Noviembre 1937), 153-173; Manuel G. Camiro, "Exploraciones tecnico-comerciales de pesca realizadas en 1937" ibid., año 3, num. 9 (diciembre 1937-febrero 1938), 71-85.

¹¹¹ Daniels to secretary of state, 6 March 1939 812.628/486.

¹¹² Daniels to Duggan, 14 January 1938, 812.628/422. この図鑑は、Tosio Kumada, ed. Marine fishes of the Pacific coast of Mexico (Odawara: Nissan Fisheries Institute, 1937)である。

¹¹³ A. Diaz Bonola, "Viaje de estudio de pescadores mexicanos por el Japan," Boletín del Departamento Forestal y de Caza y Pesca, año 3, num 9 (Diciembre de 1937-Febrero 1938), 107-110.

¹¹⁴ 松井『メキシコ風土誌』428頁。1939年になるとメキシコ政府側は、米国への留学を希望するようになっていたように思われる（Charles Jackson to Harold Ickes, 1 July 1939, in Ellis O. Briggs to Laurence Duggan, 1 July 1939, 812.628/530）。

最後のものが漁業活動そのものである。共同漁業は漁業活動においても積極に活動した。1936—37年の漁獲シーズンは、大型トロール漁船湊丸と箕面丸（472トン）を派遣し、37—38年には、大型トロール漁船札幌丸（400トン）、仙台丸（472トン）および湊丸と、80トンクラスの五隻のトロール漁船、そして冷凍エビの運搬船として長光丸（1,807トン）を派遣した。38—39年には、長光丸にかわって991トンの冷凍運搬船駿河丸を派遣した。日水は本社からの送金に頼らず、現地の漁獲を米国市場に送るなどして収益をあげはじめた。堀に替わる日本公使越田佐一郎が着任すると、カルデナス大統領は、墨日共同漁業会社の設立に対する賛同を繰りかえした¹¹⁵。

表3 1937年6月～1938年6月漁期の日本水産によるエビ漁獲実績

1937年6月～1938年6月漁期			1938年11月～1939年2月上旬漁期	
日本向け販売数量(トン)	1,607	73%	316	38%
米国向け販売数量(トン)	597 (incl. 172 tons of raw shrimp)	27%	512 incl. 96 tons of raw shrimp	62%

出典：「墨国太平洋岸に於ける邦人蝦漁業に関する件」越田公使発有田八郎外相宛，昭和14年3月21日（E/4/9/0/7-6）

1937年末までの米国側は、日本側の水産技術援助と漁業活動に対する対応は、民間資本のもの除いて緩慢なものだった。パン・アメリカン水産会社は、カリフォルニア湾での操業を一時的に停止せざるを得なくなった。日水の操業が、自分たちのものよりも効率的であることを、次のように認めていた。

¹¹⁵越田公使発佐藤外務大臣宛，昭和12年5月13日（E/4/9/0/7-6）および「墨国事業に関する説明書供閲の件」日本水産トロール部発外務省亜米利加局第二課長渋谷信一宛，昭和14年8月24日（E/4/9/0/7-6）。出漁漁船名および船員の名称について、松井『メキシコ風土誌』429—32頁が詳しい。

もし日本漁船が、カリフォルニア湾でエビを漁獲し冷凍して世界市場に輸出することが許可されれば、彼らが日本にエビを輸送するコストは、われわれがグアイヤマス港にエビを送るコストよりも低くなるだろう。われわれの漁獲したエビが日本市場に到達するには二ヶ月近くかかる……。日本市場にエビを送るための彼らのコストは、われわれがロサンゼルスにエビを送るコストの半分以下である。そのうえに、われわれはそれからエビを冷凍し箱詰めしなければならないのである

116

1937-38年シーズン、パン・アメリカン水産会社は、三台の船内急速冷凍設備を持つ鉄鋼トロール漁船テオドル・フォス (Theodore Foss) を導入して操業を再開し、サンペドロに冷凍能力 15 トンの冷凍設備を完成させた。しかし、フランチャイズ契約によってサザン・パシフィック鉄道を經由して漁獲物を米国市場に送り続ける必要があったため、日水のように運搬船ですべての冷凍エビを直接米国市場に送ることができなかった¹¹⁷。

米国政府も日本の漁業進出を懸念していた。1934年、米国陸軍情報部は日本の外交暗号の解読に成功し情報を国務省側に送り続け、メキシコにおける日本側の活動の流れを追っていた¹¹⁸。在メキシコ米国領事の多くは、日本資本の進出に国務省が介入すべきだと主張していた¹¹⁹。しかし、在メキシコ米国大使館は、「完璧な調査」を行なった結果、領事たちが報告する漁業活動に伴うスパイ活動や軍事活動を示す証拠は一切ないと結論を出し¹²⁰、国務省もこのような提案を却下し続けた。国務省メキシコ担当課のレポートは、日本の漁業活動について、「過去三年間の国務省の記録をレビューした結果、

¹¹⁶ Fred Lewellyn to Lawrence Berg, 16 December 1935, in Yepis to secretary of state, 23 December 1935, 812.628/295; Lewellyn to Lawrence Berg, 21 December 1935, in Yepis, to secretary of state, 31 December 1935, 812.628/299. こののちも、同社代表は、領事に日系漁業の活動を報告し続ける。例えば、Letter of Lawrence Berg to Yepis, 11 January 1938, in Yepis to secretary of state, 18 January 1938, 812.628/415.

¹¹⁷ Charles C. Gidney to secretary of state, 7 October 1937, 812.628/410; "New Marketing Arrangement Featuring Mexican Prawns," *Pacific Fisherman* 38, 1 (January 1940), 71.

¹¹⁸ Edward K. Reed, Division of Mexican Affairs, to Sumner Welles, 14 April 1936, 812.628/323 1/2. 解読された文書は、米国国立公文書館 Records of National Security Agency, Record Group 457, Historical Cryptographic Collection Box 286-516 に収められているが未見。

¹¹⁹ Guy W. Ray to secretary of state, 14 February 1935, 812.628/245; Yepis to secretary of state, 8 January 1936, 812.628/302.

¹²⁰ Daniels to secretary of state, 2 October 1934, 894.20212/359.

正当な漁業活動をのぞいてメキシコ西海岸における日本の活動の活発化を示す資料は一切ない」と結論していた¹²¹。しかし、1937 年後半以降、アジアおよびヨーロッパ大陸における国際的事件が、メキシコにおける日水等の漁業活動に大きな影響を与えることになる。

¹²¹ Hull to American Consul at Guaymas, 11 September 1934, 812.628/231; Reed, State Department, Mexican Affairs, 27 April 1936, 894.20212/381.

第四章 公法 63 の実施と日本水産資本の撤退

1930年代後半は、日本にとってもメキシコにとっても米国にとっても激動の時代となった。1936年に勃発したスペイン内戦は、共和国側を支持するにせよフランコ側を支持するにせよ、メキシコ国内政治に大きな影響を与えた。日本は、1937年7月に中国を軍事的に本格的に侵略し始め、その経済力で支えきれない規模に戦線を拡大させてゆく。1938年3月ナチス・ドイツがオーストリアを、11月にはチェコスロバキアのズデーデン地方を併合する。さらにカルデナス大統領は、1938年3月に英米石油資本を国有化した結果、対米関係を悪化させたばかりではなく、財政的に米国財務省の銀買いに依存する一方、外貨不足にともなう政治的・経済的な不安定をメキシコ国内に生み出した¹²²。これら国際的事件のうち、日本の中国侵略が、日米墨関係に大きな影を落とした。米国大統領フランクリン・D・ローズヴェルトは、「太平洋岸から攻撃する日本からメキシコを防衛するために」低カリフォルニア州を買収する考えを閣議で示した。カルデナス大統領は、日本への警戒を日記に記した¹²³。日本側は、外貨不足と後の米国による経済制裁の結果、輸出市場および原料供給地としてラテンアメリカに注目し始めた¹²⁴。メキシコ沖エビ漁業との関連では、戦時動員に伴う漁船徴用の結果、海産物価格は上昇したがメキシコへの漁船増派が困難になった。

¹²² この間の米国・メキシコ関係は、杉山茂「銀と石油—善隣外交とメキシコのカルデナス改革の後退、1934-1940年」『史林』80巻5号（1997年9月）107-138頁を参照。

¹²³ Assistant Secretary of the Treasury Wayne C. Taylor to Morgenthau, 17 August 1937, Box 282, Henry Morgenthau Papers, Franklin D. Roosevelt Library; Lázaro Cárdenas, *Obras: I-Apuntes, 1913-1940* (México, D.F.: Universidad Nacional Autónoma de México, 1972), 370。日本の中国侵略やヨーロッパにおけるファシズムの台頭の中で、ローズヴェルト、カルデナス両政権の間であって、ニュー・ディールを強く支持し、同様な目的を目指すものとしてカルデナスの改革を支持していたダニエルズ大使の存在が重要である。また、カルデナス大統領自身も自分の改革とニュー・ディールを同質のものと見ていた。Sugiyama, "Reluctant Neighbors," chap. 2。スペイン内乱が発生すると、カルデナス大統領もダニエルズ大使もスペイン共和国政府への支持を示す。また、石油国有化後の危機の中で、ローズヴェルト大統領もダニエルズ大使もカルデナス大統領も、スペイン内乱の再現を絶対に避けるという点で一致していた (Ibid., 83-93)。

¹²⁴ 企画院「帝国必要資源の海外特に南方諸地域に於ける確保方策」昭和14年10月『国家総動員(1)経済』『現代史資料(43)』(みすず書房、1970年)174-175頁。

日米メキシコ三国関係が緊張するなか、米国側は二つの視点からメキシコにおける日本の活動を注視していた。第一のグループは、軍事的脅威を捜し求めていた。領事や大使館付き武官は国務省に対して、海軍士官を乗せた機雷敷設艦や双眼鏡やカメラを所持する「人種的特徴」を持つ日本人の存在を報告し続けた¹²⁵。ある船員は、「通常の漁民よりもはるかに高い知性を持ち」フランス語が話せるために、スパイと疑われた¹²⁶。低カリフォルニア州に10万人の日本人が一挙に流入したという報告に驚いた米陸軍省にたいして、国務省は在メキシコ日系人の実数が5,314名（そのうち低カリフォルニア州在住者が1,400名であると報告した（日本公使館が米国大使館に奉公した人数は1,650名）¹²⁷。国務省および在メキシコ米国大使館が注視したのは、日本の軍事的プレゼンスよりも漁業技術援助であった。これが第二グループを構成する。

第二のグループは、日本の軍事的脅威よりも経済的脅威と技術援助の問題に真剣に対応しようとした。このグループの一人在エンセナダ米国領事ジェラルド・モクマは、軍事的脅威を強調するレポートが、「あまりにも誇張され非現実的であるために、何も知らない人々でも信用しない」と批判し、日本の軍事的脅威とは「アメリカ人が、本国で日本人が経験している計り知れない経済的圧力を理解したり日本人やその習慣を理解したりできない」ことで生まれた「幽霊」であると、同僚領事たちの報告を批判した¹²⁸。第二グループのより有力な集団は、在メキシコ米国大使館員たちであった。彼らは、

¹²⁵ Report by Dillon, Naval Attaché, 812.628/illegible number; Samle to secretary of state, 8 April 1938, 892.20210/396; Stewart to secretary of state, 27 July 1937, 894.2021/388. 最も激しい「人種的特徴」に関する議論は、Yepis to secretary of state, 12 April 1936, 812.628/334に見られる。

¹²⁶ Warren Irwin, "Report on Japanese activities along the West Coast of Mexico from Nogales, Sonora, South of Manzanillo, 12 January 1942," John Franklin Carter Papers, President's Secretary's File box 98, Franklin D. Roosevelt Papers, Franklin D. Roosevelt Papers.

¹²⁷ Stewart to secretary of state, 20 July 1937, and Sumner Welles to President Roosevelt, 17 April 1937, 894.20210/387.

¹²⁸ Mokma, Ensenada, to secretary of state, 24 January 1940, 812.628/594. この領事は、日本に3年滞在した経験を持っていた。彼によれば、日本人が双眼鏡やカメラを持つ理由は、「風景の美しさを完璧に楽しもうとする」からであり、家を建てるときに土間ではなくコンクリートを土台に敷くのは、対空機関砲を設置するためではなく日本でそうすることに人気があるからであり、理髪店主が海軍予備役である理由は日本の国民皆兵制のためであった。

とりわけ日水と日本人水産顧問がもたらす水産技術援助に強い関心を寄せていた。米国大使ジョセフス・ダニエルズは、1938年1月にメキシコ外務次官ラモン・ベテータ（Ramón Beteta）と会談をしたとき、日水小田原水産試験場が作成した図鑑を見せられ、メキシコ政府の負担にならないような形で米国政府が日本と同様な形で、米国が水産顧問を派遣できないかどうか打診を受けた。この会談でベテータは、「メキシコ政府は、水産業において日本人が実践している実用的な方法に強い関心を持っている、特に日本側はメキシコに専門家を派遣し、また別な形で漁業開発援助をしているからである」と、ダニエルズに語った。ダニエルズ大使は、水産技術援助をめぐるメキシコ政府のこうした意向を、國務省内のリベラル派ローレンス・ダガンに送り続けた¹²⁹。

米国政府は、連邦政府に勤務する水産技術者をメキシコに派遣するために、法律的な困難を克服しなければならなかった。1929年11月19日に出された大統領行政命令 5521 を用いれば、アメリカ合衆国連邦政府職員を外国政府の顧問として派遣することができることを発見した。しかし、派遣が可能であるためには、援助を与える産業が米国内の産業と競合しないことが条件となっており、エビ漁業はメキシコの経済水域のみならず公海でも行われていたので、問題が残った¹³⁰。このため、國務長官コーデル・ハル（Cordell Hull）は帰国中のダニエルズとの会談で、1938年2月11日、「外国政府の軍隊を訓練するために、連邦軍軍人が一時的に外国政府に派遣できるのと同じように、連峰政府職員が外国政府のために働くことができることを可能にする」新しい法案を國務省が作成中であると伝えた¹³¹。

¹²⁹ Daniels to Duggan, 14 January 1938, 812.628/422; Daniels to Secretary of State Hull, 4 February 1938, 812.628/425.

¹³⁰ Legal Adviser to the State Department J. R. Baker to Duggan, 1 February 1938, 812.628/424.

¹³¹ Hull to Daniels, (personal and confidential), 11 February 1938, 812.628/417A. 連邦軍兵士を外国政府に派遣することを可能するこの法律は、1920年代の米国によるニカラグア干渉のときに警察軍創設のために1926年に制定された（The Chargé d’Affaire in Nicaragua (Dana G. Munro) to secretary of state, 29 December 1927, “Agreement Between the United States and Nicaragua Establishing the ‘Guardia Nacional de Nicaragua,’ Signed 22 December 1927,” in 817.1051/191, Foreign Relations of the United States, 1927 III, 439.

この後、1938年3月におこなわれた石油国有化のために交渉は、同年12月まで頓挫してしまう。この間、石油国有化にともなう賠償問題と米国人地主の農地收容問題について米国政府と交渉を続ける中、カルデナス大統領は漁船乗組員をメキシコ人に限定する政令を発して、日本資本による漁業活動に制限を加える態度を示し始めた。しかし、1938年12月に顧問派遣に意欲を示した米国商務省漁業局の提案は、顧問の給与と旅費、生活費、魚網などの水産援助に必要な装備の経費をメキシコ政府が払うべきだとした。さらに、水路調査船の稼働経費一日当たり450ドルを、メキシコ政府が払うことを条件としてきた¹³²。

水産技術援助の経費はメキシコ政府が負うべきだとするこのようなワシントンの主張に対してダニエルズ大使は、大使館付商務官トマス・ロケット(Thomas Lockett)が行った詳細な調査報告を国務省に送った。この調査報告は、2点を主張した。まず、日本の漁業資本はタンピコ沖での高額なトロール網を犠牲にして行った試験操業のように、メキシコ政府になんらの財政的負担をかけることなく多くの専門的支援を行ったことを指摘した。この点について、ロケットの報告は次のように述べる。

メキシコ水産局に見られると報告される親日的傾向は、アメリカ漁業資本やアメリカ合衆国政府に対するなんらの悪意によるものではなく、単に、日本資本がその顧問と専門的な援助をすべて日本側の資金で行っているからである。これに対し、米国は同様な援助をまったくメキシコに与えていない¹³³。

第2点目は、水産業を学ぶために日本に留学したすべての学生の経費は、日本が負担していた点である。同様な目的で米国に留学した学生の経費は、米国ではなくメキシコ政府が負担していた点である。

¹³² Daniels to secretary of state, 14 December 1938, 812.628/459; Hull to U.S. Embassy in Mexico, 23 December 1938, 812.628/460; Anselmo Mena to Pierre de L. Boal, 29 December 1938. On the 20 September 1938 letter, in Boal to secretary of state, 30 December 1938, 812.628/462; Assistant Secretary of Commerce to secretary of state, 13 February 1939, 812.628/470.

¹³³ Daniels to secretary of state, 6 March 1939 812.628/486.

メキシコ森林狩猟水産局は、本質的に親日的であるのではなく、日本資本が有利な条件で提供する援助を利用しているのである。アメリカ漁業資本は、なんらの同様の援助の提供を行っていないし、たとえあったとしても、[メキシコ政府側にかかる]その経費は日本側によるものよりもはるかに大きい¹³⁴。

ダニエルズ大使の主張に押されて内務長官ハロルド・イッキース (Harold Ickes) は、水産局副コミッショナーのチャールズ・E・ジャクソン (Charles A. Jackson) を非公式にメキシコに派遣した。ジャクソンは、ニューオリンズの水産専門家ミルトン・リンドナー (Milton Lindner) を呼び寄せた。リンドナーの滞在費 5000 ドルを要求するイッキース内務長官に対し、國務長官ハルは、1939年に5月19日に立法化された公法 63に基づいて派遣されると説明した。そのハルも、経費の一部をメキシコ政府が負担できないかダニエルズに打診した。経費問題に対して煮え切らないハルに対してダニエルズは、「日本人水産顧問に過去支払われた給与と生活費の[総額]は、米国人の専門家に支払われる生活費にも満たないであろう。メキシコ政府が現在の条件で米国人顧問に米国の水準の生活費を支払うことなど考えられないことである……」と返答した¹³⁵。1939年10月に一時帰国したダニエルズ大使はイッキース内務長官と直接交渉したのち、ローズヴェルト大統領は公法 63に基づいて月 120 ドルを連邦政府が支出することを決定した¹³⁶。リンドナーは、1939年夏に初期調査を終えた後、1940年5月30日からメキシコに滞在することになる¹³⁷。

1937年から1938年の漁獲シーズンにおいて日本側は二つの問題に直面していた。第一、日本水産の漁業許可が、7月23日に期限切れとなったことで

¹³⁴ 同上。

¹³⁵ Hull to Daniels, 11 September 1939, 812.628/544; Daniels to secretary of state, 13 September 1939, 812.628/546.

¹³⁶ RA memo of 18 October 1939 on Ickes to secretary of state, 5 September 1939, 812.628/545; Welles to Ickes, 18 October 1939, 812.628/545. ダニエルズ大使がローズヴェルト大統領ら政権首脳と直接交渉ができた理由は、第一次世界大戦中に、ダニエルズが海軍長官、ローズヴェルトが海軍次官であった時以来の親交があった (Edmund David Cronon, *Josephus Daniels in Mexico*, Madison: University of Wisconsin Press, 1960) .

¹³⁷ リンドナーが1940年2月に提出した活動報告について、國務省は、「メキシコ市府に役立つ情報に乏しい」と批判した (Sturgeon to Bursley, 25 February 1940, 812.628/604) .

ある。さらに、林兼商店が日本外務省と海軍当局の反対を無視し、朝鮮総督府から母船一隻と六隻の漁船派遣許可を得て、突如としてカリフォルニア湾に登場したことである。越田公使を戸惑わせ、のちに海軍当局が「非紳士的」と呼んだこの出漁の背後には、家田耕一の動きがあった。理由は明確ではないが、1937年10月、家田は日本水産との関係を絶って、林兼商店の漁業活動のためにヤバロスに漁業組合を組織した¹³⁸。越田公使と日本政府は、家田と林兼商店の既成事実を受け入れざるをえなかった。というのも、林兼商店の出漁を禁止すれば、ヤバロスの漁業組合が日本水産の漁業活動を妨害する可能性が高かったからである。林兼商店は、さらに冷凍エビをメキシコ市でデモンストレーションのために販売し、日系メキシコ人犬飼徳十郎の発案を受け入れて、二世をヤバロス漁業組合に参加させて漁業技術の伝授を始めた¹³⁹。両社は、日本外務省の斡旋で漁場と米国市場における販売量とを取り決めた。

メキシコ政府側が出した第二の問題がより困難なものになった。1938年10月、農地改革に伴う米国人土地所有者の農地接收の補償金交渉に苦慮していたカルデナス大統領は、漁船乗組員をメキシコ人に限定するよう命令を出した¹⁴⁰。日本側は、漁業組合を動員して大統領に請願させ、12月末から1939年5月末日までの操業許可を獲得することができた¹⁴¹。1938-39年の漁獲シーズンが終わると、メキシコ政府は日米対立を利用して水産技術援助の獲得を試み始めた。目指していたものは、メキシコにおける近代的な水産産業をメキシコ人自身の手で行うことであった。経済大臣として漁業法を制

¹³⁸ 越田公使発有田外務大臣宛、昭和12年10月23日および林兼商店運搬船沖繩丸廻航に関する会議（海軍省軍務局第1課神中佐・柴中佐、藤田監督課長（農林省水産局）、宮木南米課長（拓務省拓務局）、渋沢課長（外務省亜米利加局）昭和14年4月12日（E/4/9/0/7-6）。

¹³⁹ 鮫島書記生によるソノラ、シナロア州における調査報告（1938年12月下旬の状況）「墨国太平洋岸に於ける邦人蝦漁業に関する件」越田公使発有田八郎外相宛、昭和14年3月21日（E/4/9/0/7-6）。

¹⁴⁰ 農地接收の補償問題とカルデナス大統領によるメキシコ人漁船乗組員乗船義務の要求とは、時期は重なるが、その関連は不明である。

¹⁴¹ 在米国メキシコ大使カスティージョ・ナヘラは、内務長官イッキースに対して、カリフォルニア湾における日本資本による漁業活動を、1940年には更新しないというカルデナス大統領の意向を語っていた（Diary of Harold Ickes, 12 February 1939, pp. 3228, Library of Congress）。

定し、第二次世界大戦中に米墨経済会議のメキシコ側代表となる在横浜メキシコ公使プリモ・ビジャ・ミシェル（Primo Villa Michel）は、日水重役桑田透一に対して、米英石油資本は石油採掘方法をメキシコ人に教授して独立した採掘を可能にすると約束したにもかかわらず、利益のみを独占して約束を果たさなかったことを批判しながら、日本資本の漁業進出についてもメキシコは同じ立場に立つと声明した¹⁴²。

1939年8月メキシコ側は、漁船20隻の購入と3つの冷凍施設建設などのために米国輸出入銀行による秘密借款を打診した。この提案を受けたリンドナーは、イッキース内務長官に対してメキシコ側の提案を拒絶するように提案した。その理由は、日本漁船団の排除に加えて、米国はメキシコ側からマグロ漁などに関する対メキシコ漁業条約でより多くを獲得できるまで待つべきだというものであった。日本漁船団の排除は、メキシコ産エビに対する関税を利用すればよいのであって、米国マグロ漁業へのさらなるコンセッションが獲得できる機会を待つべきだとした¹⁴³。さらに、メキシコ人漁民についてリンドナーは、「日本漁船団による漁業方式が実施できるメキシコ人漁民と資金とを生み出すまでに何年もかかるであろうし、古代の漁具を用いるインディアンは、もっとも近代的なトロール漁業を行うことなど一朝一夕にはできない」と評価を下していた。水産資源調査についてリンドナーは、海洋調査を実施する条件として、米国人漁民により有利な条件をメキシコ政府が提案することとし、國務省もメキシコ側の提案を「問題外」として退けた¹⁴⁴。

¹⁴² 日水重役〔桑田透一〕来訪の件、昭和14年11月15日（E/4/9/0/7-6）。この資料は名前を出していないが、「墨国の漁業法は自分が経済大臣たりしときに制定」と述べていることから、Primo Villa Michelであると推察できる。彼は、1940年のメキシコ経済使節団来日の際、日本メキシコ経済関係の深化に批判的な覚書をメキシコ外務省に送っている（Memorandum by P. Villa Michel to Eduardo Hay, Tokio, feb 10 de 1940, III-1329-3, Archivo Histórico de la Secretaría de Relaciones Exteriores）。また、第二次世界大戦中、米国・メキシコ合同経済会議のメキシコ代表として、メキシコ経済政策の上で大きな役割を果たした（Sugiyama, "Reluctant Neighbors," 258）。

¹⁴³ Lindner to Jackson, 11 August 1939, in Daniels to secretary of state, 11 August 1939, 812.628/537.

¹⁴⁴ Lindner to Jackson, 12 July 1939, in Ickes to secretary of state, 21 July 1939, 812.628/532。メキシコ漁民に対する同様のコメント（「墨国人のみでは漁船の操業は永久に出来ず又漁獲蝦の販売等営業上の方途なきを以て邦人が側で処理してやる必要があり」）を、日

メキシコ政府は、漁船の購入先を日本側に依存しなければならなくなった。しかし、日本側は日中戦争にともなう漁船徴発の結果、林兼商店が要請していた冷凍運搬船沖縄丸の増派も渋るほどであった¹⁴⁵。1939年10月に日本漁船団がメキシコに戻ると、メキシコ政府の意向を受けた漁業組合連合会は、20トンクラスの漁船10隻の購入の可能性を打診してきた。メキシコ政府もこの「売船」を条件として、操業漁船をすべてメキシコ船籍とすることを要求したため、日本水産と林兼商店は、外務省の示唆にしたがって協調してメキシコ政府と交渉した。このとき、福野と家田両名は、前大統領パスクアル・オルチス・ルビオ（Pascual Ortiz Rubio）や連邦議員ラモン・イツルベ（Ramón F. Iturbe）らに働きかけて、カルデナス大統領に操業許可を出すように働きかけるように運動した¹⁴⁶。日本政府は、外務省・農林省・海軍省・拓務省の課長級の会議をたびたび開いてこの問題を協議した結果、「売船」を4隻の80トンクラスの老朽漁船に限定したが、メキシコ側は10隻を要求し続け、漁期が始まっていた12月まで交渉がずれ込んでしまった¹⁴⁷。最終的に、イツルベ将軍がユカタン半島の視察に赴いていたカルデナス大統領への直訴によって、12月19日にやっと操業許可が出された¹⁴⁸。また家田耕三

水重役桑田透一も行っている（「墨国蝦漁業に関する関係者会議（外務省第八会議室）昭和14年11月19日，E/4/9/0/7-6）。

¹⁴⁵ 林兼商店側の冷凍運搬船増派を要求した理由は、底曳トロール漁業にともなう雑魚処分の問題があったからである。雑魚を廃棄することはメキシコ政府からも漁民からも厳しく見られており、新しい冷凍運搬船を用いて、メキシコ国内で廉価な水産物を供給することを構想していた（鮫島書記生によるソノラ、シナロア州における調査報告（1938年12月下旬の状況）「墨国太平洋岸に於ける邦人蝦漁業に関する件」越田公使発有田八郎外相宛，昭和14年3月21日（E/4/9/0/7-6））。作家ジョン・スタインベックは、雑魚廃棄の現場や実際の漁労活動を目撃していた。John Steinbeck and Edward F. Ricketts, *The Log from the Sea of Cortez*, (New York: Penguin Books, 1995), pp. 204-207, 217.

¹⁴⁶ 越田公使発有田外務大臣宛，昭和14年11月9日および27日（E/4/9/0/7-6）。

¹⁴⁷ 課長級会議のなかで、海軍軍令部第三部（情報担当）松原中佐が売船に積極的な態度に転じたのに対し、水重役の桑田透一は、現地における操業条件の悪化、売船を予想していなかったこと、そして売船が国策である場合、従わざるを得ないと述べている。海軍側が、カリフォルニア湾に日本資本が存在し続けることを望んでいたことがうかがわれる（「墨国蝦漁業に関する関係者会議」，昭和14年11月19日 E/4/9/0/7-6）。

¹⁴⁸ 家田および福野発日水および林兼商店本社，1939年12月7日および16日，18日（E/4/9/0/7-6）。

は、グアイマスの造船業者と4隻から6隻の漁船を建造する契約と行なった

149

からくも1939年冬から40年春までの操業が実現したが、1940年、日本漁船団によるメキシコ沖漁業は終わりを告げた。森林狩猟漁業局は、交通省および海軍などの業務をつかさどる海務局に移管され、松井佳一の再訪とその後任を望むなど日本の水産技術援助を信頼していたケベド長官は高齢のために引退した¹⁵⁰。5月のナチス・ドイツに対するフランスの降伏後、メキシコ・米国両政府は合同防衛協議を開催し、西半球防衛に関するハバナ会議に向けてカルデナス大統領は米国政府を支持することを決定した¹⁵¹。他方、売船問題は、新規漁船購入金の返済完了まで、漁獲されたエビすべてを日本資本が支配するという提案を、メキシコ政府は拒否した¹⁵²。8月、カルデナス大統領はオルチス・ルビオ前大統領に対して、一年間の操業許可の方針を伝えていたが、9月メキシコの労働組合メキシコ労働総同盟の要求に沿って、操業漁船すべてにメキシコ国旗を掲げることを要求してきたため、日本水産資本は漁船団の派遣を断念せざるを得なくなり、12月にはすべてのスタッフがメキシコから撤収した¹⁵³。

日本水産資本がメキシコから撤退した結果、2つのグループが取り残された。まず、カリフォルニア湾沿岸のメキシコ人漁民は、漁船も装備も収入も

¹⁴⁹ Harry K. Pangburn, American Vice Consul, 28 March 1940, 812.628/618.

¹⁵⁰ 松井『メキシコ風土誌』423-24頁。

¹⁵¹ Memorandum of conversation between Mexican Ambassador Castillo Nájera and Undersecretary of State Sumner Welles, 11 June 1940, 812.20/222-1/2; Minutes of a cabinet meeting held at the National Palace on 19 and 21 June 1940, 550/46 8, Ramo Presidente, Lázaro Cárdenas, Archivo General de la Nación, Mexico City; Elena Vázquez Gómez to Lázaro Cárdenas, 10 June 1940, and Lázaro Cárdenas to Elena Vázquez Gómez, 21 June 1940, 39-10-5, Archivo Histórico de la Secretaría de Relaciones Exteriores, Mexico City, in Sugiyama, "Reluctant Neighbors," 133-134.

¹⁵² Powell to secretary of state, 7 June 1940, 812.628/628.

¹⁵³ 越田公使発松岡外務大臣宛, 1940年8月7日および9月6日, Daniels to secretary of state, 10 October 1940, 812.628/649, 三浦義秋公使発松岡外務大臣宛, 昭和15年12月5日。撤退のイニシアチブは、日本水産および林業商店であると思われる。外務省側は、両社の撤退の理由を理解したと述べた上で、家田とアナヤを現地代表とし愛国的義務として事業を継続することに両者が同意したとされる (From Tokyo to Mexico City, 8 January 1941, SRDJ #009301, Records of the National Security Agency, Intercepted Messages Between Japan and Its Diplomatic Agents, Record Group 457, National Archives, Washington, D.C.)

失った。メキシコ政府は漁業組合法を改定して、漁業組合結成許可を沿岸漁民だけではなく、すべてのメキシコ人に解禁した。これを利用して前大統領アベラルド・ロドリゲスが漁業組合を組織してエビ漁業を支配した¹⁵⁴。戦後において、カリフォルニア湾のエビ漁業はメキシコ系大資本に支配され続け、カルデナスが夢見たメキシコ人漁民の生活水準を向上されることは実現されなかった¹⁵⁵。もうひとつのグループは、在メキシコ日系人であった。とりわけコミュニティで指導的であった人物と日本水産資本の事業に参加した移民は、アメリカ合衆国の厳しい監視下にあった。1941年12月、ローズヴェルト大統領の私的なスパイであったウォーレン・アーウィンは、このような移民たちを日本のスパイ組織の「キー・マン」として列挙し、その中には家田耕三、犬飼徳十郎も含まれていた。アーウィンは、ローズヴェルト大統領に対し、「メキシコ市民であるか否かを問わず、枢軸国国民に対するより厳しい監視」を行なうよう、メキシコ政府に圧力をかけるべきだとした¹⁵⁶

現地時間の1941年12月7日、日本海軍がアメリカ海軍の軍港真珠湾を奇襲した。サンペドロ近郊のターミナル・アイランドを根拠地に漁業に従事していた日系移民とその家族約3,500名は、軍港ロングビーチに近接していたこともあって、多くの一世代が奇襲直後にFBIによって連行された。さらに、1942年2月19日に落ちローズヴェルト大統領が行政命令9066を発すると、2月25日には48時間のみ猶予で強制移住させられた。さらに1942年3月2日には、ワシントン州、オレゴン州、カリフォルニア州の西半分およびアリゾナ州の一部からの立ち退き命令が出され、ここに、日系漁民の活動は終わった。

¹⁵⁴ Daniels to secretary of state, 7 September 1940, 812.628/642; Mokma to secretary of state, 22 November 1940, 812.628/659 and 10 December 1940, 812.628/663.

¹⁵⁵ James R. McGoodwin, "Mexico's Marginal Inshore Pacific Fishing Cooperatives," *Anthropological Quarterly* 53, 1 (1980) 39-47 および Thomas R. McGuire, "The Political Economy of Shrimping in the Gulf of California," *Human Organization* 42, 2 (1983) 132-145. 松井も「漁業組合の発展のためにも組合を基礎として、沿岸一定地区の地先漁業権を付与する必要がある」と指摘していた（『メキシコ風土誌』436頁）。

¹⁵⁶ Irwin, "Report on Japanese activities along the West Coast of Mexico." マサトラン市で写真店を営む佐伯勝について、彼の民主主義への信奉は、フィルム供給元がコダック社しかないためだとして、アーウィンは佐伯を「キー・マン」の一人として名指した。

メキシコ国内にいた日系移民も、財産を没収されたうえ、強制的にメキシコ市やグアダハラ市に集住させられた。元大統領カルデナスが、1941年12月11日に太平洋沿岸総司令官に任命されたとき、米国は、かねてよりスパイと睨んでいた日系メキシコ人9名を逮捕して米国内に連行するつもりであった¹⁵⁷。カルデナスは、米軍兵士のメキシコ国内への立ち入りを拒絶し、24時間以内に9名をメキシコ市に送致する代わりに、低カリフォルニア州在住の日系人を一週間以内に立ち退かせるという条件をのんだということである¹⁵⁸。この結果、1942年1月2日、低カリフォルニア州在住の日本人、ドイツ人、イタリア人が、一週間以内にグアダハラ市に移動するよう命令が出された。メキシコ政府は、缶詰工場の操業継続のために一定の日系漁民を残すことにしていた。しかし、すべての日本人の強制退去が決まり、代替として漁船を米国海軍に徴用されたアメリカ人漁民をサンディエゴかサンペドロから雇用することになった¹⁵⁹。ここに、第二次世界大戦前に日系移民が築いてきたメキシコにおける日系人水産業が終わる。

¹⁵⁷ これら9名が、アーウィンの報告の中で挙げられている人物と重なるかどうかは、さらなる調査が必要である。

¹⁵⁸ 日本人メキシコ移住編纂委員会『日本人メキシコ移住史』287-88, 345頁。

¹⁵⁹ Gerald A. Mokma, American Consul at Tijuana, 31 January 1942, 812.00 Lower California/339.

結論

本論は、水産業に関与した日系移民が、日本、米国、メキシコの3つの国民国家の間の関係に規定されつつ、出身国日本の漁業技術や資本、ロサンゼルスや冷凍運搬船を通じた日本の都市消費市場へのアクセスによって、水産業においては移民先の社会で比較的優位な立場にいたことを明らかにしてきた。1930年代のカリフォルニア湾で技術面でも資本面でも最優位に立っていたのは、日本水産や林兼商店という日本水産資本であった。指導的なメキシコの日系移民であった家田耕三や犬飼徳十郎は、優位に立つ日本水産資本と結びつくことによって、メキシコ現地漁民はもとより、メキシコ水産資本、さらには米国水産資本に対して優越した立場にあった。そして、日本資本と米国資本の競合関係においては、メキシコ政府やメキシコ現地漁民への働きかけや連絡役という役割を通じて、日本水産資本のメキシコ沖進出にとって不可欠な働きを果たした。これら日本側の活動は、松井ら水産顧問の受け入れや留学生派遣などに示されるように、生活水準の向上と漁業近代化を志向するメキシコ政府に好意的に受け入れられた。このような条件が、日系移民が漁業活動に参加する活動の空間を広げていたといえよう。

これら在メキシコ日系移民は、自らあるいはコミュニティの利益を追求する主体的な活動も行なっていた。協力先を日本水産から林兼商会へ移した家田耕三の動きや、二世の漁業技術習得をめざした犬飼徳十郎の動きは、これを示唆するものであった。また、後者の犬飼の働きかけは、現地メキシコにおける漁船建造を目指した家田の活動とともに、日系移民による漁業活動の現地化の兆しを示したものといえるだろう。同時に、家田や福野らは、日本帝国政府の政策に主体的に協力していたうえ、日本水産資本と密接に結びついていた彼らの活動は、メキシコ政府にたいしてもメキシコ人漁民にたいしても、日本水産資本の代表者としてたち現れていたといえよう。

南カリフォルニアで活動する日系漁民のうち、サンペドロでは日本の漁業資本との直接的なつながりは見受けられず、遠洋漁業船の建造ではアメリカ

資本の支配下にあったものの、漁業技術の面で当時世界水準にあった日本の技術をほぼ同時に導入しつつ技術的な優位を獲得していった。また、農業者や失業者もローカルな消費市場向けの漁業に参加していた。それに対してサンディエゴでは、マグロ遠洋漁業の基礎を築いた近藤政治は、大阪の財閥系資本を導入して高度な水産技術と熟練した漁業者を導入して優位な立場に立った。しかし、1931年の撤退後は、日系漁民が現地資本を調達して操業を再開し、米国缶詰資本に支配下に入っていた。

これら漁業移民は、資本主義的な漁業活動に従事し、指導者は、本国の水産技術とときには資本を支えに、「海洋民族」として米国「白人」漁業者と互角に競争し、メキシコ人に対しては指導する立場の人間として、太平洋戦争勃発以前はカリフォルニア湾を含む米国・メキシコ国境海域に確かな地歩を築いていたといえよう。

本論は、日系移民との関連の深い日本の水産資本の漁業活動を明らかにすることによって、「善隣外交」と呼ばれる米国の1930年代対ラテンアメリカ外交の性格やカルデナス政権の主体性を再検討することも課題であった。まず、メキシコのカルデナス政権は、メキシコ国民の生活水準の向上のために近代的生産技術の導入に積極的であり、水産業の場合、大統領自身が日本の水産技術導入に積極的であった。また、水産技術や漁船の獲得をめぐる、カルデナス政権が、日米間の競争を利用しようとした。近代的な水産技術を獲得しようとするカルデナス政権の主体的な動きを合致した日本の水産援助こそが、国際関係が緊張しつつあった1930年代後半、日本の影響力の拡大として認識され、ダニエルズ大使をはじめとするニュー・ディールに共感する米国大使館スタッフとローレンス・ダガンやサムナー・ウェルズ国務次官のような国務省中枢スタッフが、公法68を立法化と実施のために動いたのであった。そして日本の技術援助を重視する彼らが、国務長官ハルや内務長官イッキース、そして大統領ローズヴェルトを動かして、公法63を実施させたのである。第二次世界大戦直前期の水産業をめぐる日・米・メキシコの三国関係史は、いわゆる善隣外交の技術援助の側面を生み出す上で大きな位置を占めていた。

このような技術援助をめぐる問題こそが、カルデナス政権の関心事であり、スパイ問題よりも重要なものとしてローズヴェルト政権の対メキシコ水産援助政策の動機となっていった。日本側史料が明らかにするのも、軍事的側面ではない。1940年秋の撤退直前になると海軍および外務省は日本水産および林兼商店の操業継続を求めるような動きを見せるが、撤退の決定は両社の側にあったといえよう。つまりメキシコ政府の要求では採算が取れないということである。操業最盛期でも、前面に出てくるのは日本水産と林兼商店の競争であって、とりわけ林兼商店が本国政府を出し抜いて出漁するなど、外務省および海軍側は両社の競争の調停に苦慮している。

しかし、1937年の日中戦争を境に、米国ローズヴェルト政権にとってメキシコの軍事的重要性が増すとともに、水産技術援助に本腰を入れ始める。1938年の石油国有化以降、対米関係を悪化させたカルデナス政権にとって、自国内に存在する日本の水産資本は、技術援助の供給者としてよりも対米関係に悪影響をもたらす可能性をもつものになってくる。日本側は、日中戦争の泥沼化にともなう漁船徴発などで、メキシコ側の技術支援の要求に十分応えられなくなる。日本の水産資本は、メキシコ側からみて水産技術援助者足りえなくなっていたこと、そして最終的に1940年5月のフランス降伏ののちに急速に構築された米州共同防衛体制に対応するカルデナス政権の圧力によって、採算の取れる漁業活動ができなくなったと判断して撤退していった。

この日本の水産資本のメキシコ進出に大きな役割を果たし、水産業の現地化の動きを見せていたメキシコ在住の日系移民は、このような米・メキシコ・日本の三国関係の中で活動の余地が狭められていった。さらに、1910年代から潜在的に存在していた「日本人＝スパイ」というステレオタイプが、この国際関係の緊張の中で再び大きくなり始めて、彼らの日本水産資本への協力を重なっていた。それがローズヴェルト大統領によるとおもわれるメキシコ国内の日系移民の動向調査・監視に連なっていたといえよう。最終的に、競争者としてであれ植民地主義的な立場であれ、社会的基盤を築いていた日系漁民にとって寝耳に水の日米開戦が、真っ先に、他のどの日系移民よりも早く彼らの現地における社会的関係を一気に破壊したのであった。

参考文献

一次史料

日本外交資料館

「本邦漁業関係雑件中南米沿岸漁業関係」 E/4/9/0/7-6

「本邦移民関係雑件 墨国の部」 (J/1/2/0/J2-8)

Archivo General de la Nación, Mexico City

Ramo Presidente, Lázaro Cárdenas.

Archivo Histórico de la Secretaría de Relaciones Exteriores, Mexico City

Franklin D. Roosevelt Library

Morgenthau, Henry, Jr. Papers.

John Franklin Carter Papers, President's Secretary's File box 98, Franklin D. Roosevelt Papers, Franklin D. Roosevelt Papers.

Library of Congress Manuscript Division

Daniels, Josephus. Papers.

Ickes, Harold. Papers.

Ickes, Harold. Diaries.

National Archives, Washington, D.C.

Record Group 22 Records of the Office of International Relations, Technical Assistance Files, 1911-1962, US Fish and Wild Service

Record Group 84 Foreign Service Post Files.

Record Group 151 Records of the Bureau of Foreign and Domestic Commerce.

Record Group 457 Records of the National Security Agency, Intercepted Messages between Japan and Its Diplomatic Agents.

Charles E. Young Research Library, University of California

Japanese American Research Project Collection of material about Japanese in the United States, 1893-1977.

Hirasaki National Resource Center, Japanese American National Museum, Los Angeles

公刊政府文書

United States. Department of States. Foreign Relations of the United States, 1933-1948. Washington, D.C.: GPO, 1950-1972.

———. Records of the Department of State Relating to Internal Affairs of Mexico, 1930-1939. Washington, D.C.: The National Archives, National Archives and Record Administration, 1985. Microfilm.

———. Confidential U.S. State Department Central Files. Mexico: Internal Affairs, 1941-1944. Wilmington, Del.: Scholarly Resources, 1987. Microfilm.

———. Confidential U.S. State Department Central Files. Mexico: Internal Affairs, 1945–1949. Wilmington, Del.: Scholarly Resources, 1987. Microfilm.

———. Records of the U. S. Department of State relating to the internal affairs of Japan, 1930-1939. Wilmington, Del.: Scholarly Resources, 1984. Microfilm.

外務省亞米利加局『「メキシコ」國「ソノラ」, 「シナロア」兩州視察報告書』外務省亞米利加局, 1934年

———『外務省執務報告第一卷昭和11年』(クレス出版, 1994年)

『現代史資料』第43卷『国家総動員』みすず書房, 1970年

聞き取り

2003年1月ターミナル・アイランド元島民 Kenji Yamamoto, Tsue Murakami, Yukio Tatsumi, Joe Wada, Shigeru Shinfuku

二次資料

英語・スペイン語論文

Bailey, Thomas A. “The Lodge Corollary to the Monroe Doctrine.” Political Science Quarterly 48 (1933): 220-39

Bonola, A. Diaz. “Viaje de estudio de pescadores mexicanos por el Japan.” Boletín del Departamento Forestal y de Caza y Pesca, año 3, num. 9 (diciembre 1937-febrero 1938): 107-110.

Camiro, Manuel G. “Exploraciones tecnico-comerciales de pesca realizadas en 1937.” Boletín del Departamento Forestal y de Caza y Pesca, año 3, num. 9 (diciembre 1937-febrero 1938): 71-85.

Chamberlin, Eugene Keith. “The Japanese Scare at Magdalena Bay.” Pacific Historical Review 24 (November 1955.): 345-59.

Cotter, David. “The Origins of the Green Revolution in Mexico: Continuity or Change?” In Latin America in the 1940s: War and Postwar Transitions. David Rock, ed. 224-41. Berkeley: University of California Press, 1994.

Dwyer, John J. “The End of U.S. Intervention in Mexico: Franklin Roosevelt and the Expropriation of American-owned Agricultural Property.” Presidential Studies Quarterly 28, 3 (Summer 1998): 495-509.

Estes, Donald. “Silver Petals Falling: Japanese Pioneers in San Diego's Fishery.” Mains'l Haul: A Journal of Maritime History 35, 2, 28-46.

———. “Before the War: The Japanese in San Diego.” The Journal of San Diego History 24, 4 (Fall 1978): 425-56.

———. “Kondo Masaharu and the Best of All Fishermen.” The Journal of San Diego History 23, 3 (Summer 1977): 1-19.

Felando, August. “California's Tuna Clipper Fleet: 1918-1963.” Mains'l Haul: A Journal of Maritime History 32, 4 (Fall 1996) 6-17; 33, 1 (Winter 1997) 16-27; 33, 3 (Summer 1997) 28-39.

Friedman, Max Paul. “Retiring the Puppets, Bringing Latin America Back In: Recent Scholarship on United States-Latin American Relations.” Diplomatic History 27, 5 (November 2003): 621-36.

- Knight, Alan. "Cardenismo: Juggernaut of Jalopy?" Journal of Latin American Studies 26 (1994): 73-107.
- , ———. "The Politics of the Expropriation." In The Mexican Petroleum Industry in the Twentieth Century. Jonathan Brown and Alan Knight, ed. 90-128. Austin: University of Texas Press, 1992.
- Koppes, Clayton R. "The Good Neighbor Policy and the Nationalization of Mexican Oil: A Reinterpretation." American Historical Review 69 (1982): 62-81
- Lee, Murray. "The Chinese Fishing Industry of San Diego." Mains'l Haul: A Journal of Maritime History 35, 2 and 3 (Summer 1999): 6-13.
- Lowenthal, Abraham F. "United States Policy toward Latin America: 'Liberal,' 'Radical,' and Bureaucratic Perspectives." Latin American Research Review 8, 3 (1973): 3-25.
- Matsuda, Matt K. "AHR Forum: The Pacific." The American Historical Review 111, 3 (June 2003): 758-80.
- Matsui, Yoshiichi. "Viaje de exploracion a la costa occidental de la Baja California." Boletín del Departamento Forestal y de Caza y Pesca, año 3, num. 9 (diciembre 1937-febrero 1938): 86-100.
- , ———. "La pesca del atun en la Baja California." Boletín del Departamento Forestal y de Caza y Pesca, año 3, num. 9 (diciembre 1937-febrero 1938): 101-106.
- McGoodwin, James R. "Mexico's Marginal Inshore Pacific Fishing Cooperatives." Anthropological Quarterly 53, 1 (1980): 39-47.
- McGuire, Thomas R. "The Political Economy of Shrimping in the Gulf of California." Human Organization 42, 2 (1983): 132-145.
- Niblo, Stephen. "Allied Policy Toward Axis Interests in Mexico During World War II." Mexican Studies/Estudios Mexicanos 17, 2 (Summer 2001): 351-373.
- Nishikawa Aceves, Antonieta Kiyoko. "La inmigración japonesa a Ensenada durante la primera mitad del siglo XX" Journal of the Instituto de Investigaciones Históricas of the Univesidad Autónoma de Baja California and edited by Calafia 1, 1-8 (2004): 24-34.
- Sauer, Carl Ortwin. "Portrait of Mexico." In Land and Life: A Selection from the Writings of Carl Ortwin Sauer. John Leighly ed. Berkeley: University of California Press, 1963.
- 日本語論文
- 麻島昭一「戦前期財閥系損保の財閥内取引—三井・三菱・住友の場合」『専修大学社会科学年報』第38巻(2004年)90-134頁。
- 岩本純明・暉峻衆三「農地改革—地主制の終焉と自作農体制」袖井林二郎・竹前栄治編『戦後日本の原点—占領史の現在下』(悠思社, 1992年)61-126頁。
- 河原典史「第二次世界大戦以前のカナダ西岸における日系造船業の展開—和歌山県出身の船大工のライフヒストリーからによる報告」『立命館言語文化研究』17, 1(2005年)59-74頁。
- 高宇「『水産工業』戦略の展開(中)日本食糧工業の場合」『立教経済学研究』61巻2号(2007年)151-179頁。
- 佐伯勝「『五重塔』五十基の模型完成を目指して—メキシコ在住六十七年の九十翁の回想」『めいしん』オフセット版メキシコ市, 1996年。
- 坂口満宏「新しい移民史研究にむけて」米山裕・河原典史編『日系人の経験と国際移動』(人文書院, 2007年)239-261頁。
- 桜井勝徳「漁人」桜田勝徳著作集第二巻漁民の生活と社会』(名著出版, 昭和55年), 3-196頁。

- 桜井勝徳「出漁と漁業移民」柳田國男編『海村の研究』（国書刊行会，昭和24年）104-113頁。
- 酒向昇「日本のエビ漁業の沿革史」東京水産大学第9回公開講座編集委員会『日本のエビ・世界のエビ』（成山堂書店，1984年）236-257頁。
- 杉山茂「銀と石油—善隣外交とメキシコのカルデナス改革の後退，1934-1940年」『史林』80巻5号（1997年9月）107-138頁。
- 田中政吉「驚嘆すべき墨国低加州の優良な大漁場」『水産』15，4（昭和2年）17-19頁。
- ハヤシ，ブライアン・マサル「レンズの視野を拡大する—日系アメリカ人の強制収容に対する理解を国際化するために」『立命館言語文化研究』17，1（2005年）7-28頁。
- 広瀬玲子「国粋主義者の移民論・植民論覚え書き」『歴史評論特集近代日本の「移民」を問いなおす』513（1993年1月）32-41頁。
- 松井佳一「メキシコ国の水産事情」『水産界』671（1938年10月）19-24頁。
- 三島康雄「水産会社と総合商社の協調と反発—カリフォルニア湾のエビ資源をめぐる」『経営史学』第38巻2号（2003年）1-26頁。
- 淀川正樹「メキシコ海岸の漁場」『殖民』6，6（昭和2年）。
- 米山裕「20世紀初期ロサンゼルス日本人社会とアメリカ西部経済」*New Wave: Studies on Japanese Americans in the 21st Century*, ed. Brian Masaru Hayashi and Yasuko Takezawa. (Kyoto: Institute for Research in Humanities, Kyoto University, 2004) 67—77頁。

学位論文

- Cotter, Joseph. "Before the Green Revolution: Agricultural Science Policy in Mexico, 1920-1940." Ph.D. diss., University of California, Santa Barbara, 1994.
- Kunitomo, Iyo. "Japan and Mexico, 1888-1917." Ph.D. diss., University of Texas, Austin, 1975.
- Leddy, George Stuar. "Catches, Commerce and Crisis: Fisheries, Government and Trade in the Mexican port of Guaymas, Sonora." Ph.D. diss., University of California, Berkeley, 1995.
- Sugiyama, Shigeru. "Reluctant Neighbors: U.S.-Mexican Relations and the Failure of Cardenista Reforms, 1934-1948." Ph.D. diss., University of California, Santa Barbara, 1996.

英語・スペイン語著作

- Benítez, Fernando. *Entrevistas con un solo tema: Lázaro Cárdenas*. México, D.F.: UNAM, 1979.
- Bureau of Marine Fisheries. "The Commercial Fish Catch of California for the Year 1947 With an Historical Review 1916-1947." *Fish Bulletin* no. 74. State of California, Department of Natural Resources, Division of Fish and Game Bureau of Marine Fisheries, 1949.
- Cárdenas, Lázaro. *Obras: I-Apuntes, 1913-1940*. México, D.F.: Universidad Nacional Autónoma de México, 1972.
- Chairez A., José Adan. *Historia de la pesca del atún en México*. Ensenada, B.C., México: Editorial Chairez, 1996.
- Crocker, Richard S. "The California Mackerel Fishery." *Fish Bulletin* no. 40. State of California, Department of Natural Resources, Division of Fish and Game of California Bureau of Commercial Fisheries, 1931.
- Cronon, Edmund David. *Josephus Daniels in Mexico*. Madison: University of Wisconsin Press, 1960.

- Duggan, Laurence. The Americas: The Search for Hemisphere Security. New York: Henry Holt, 1949.
- Emilia Paz, María. Strategy, Security, and Spies: Mexico and the United States as Allies in World War II. Philadelphia: Pennsylvania State University Press, 1997.
- Gardner, Lloyd C. Economic Aspects of New Deal Diplomacy. Madison: University of Wisconsin Press, 1964.
- Gellman, Irwin F. Good Neighbor Diplomacy: United States Policies in Latin America, 1933–1945. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1979.
- Gilly, Adolfo. El cardenismo, una utopía mexicana. México, D.F.: Cal y Arena, 1994.
- Godsil, H. C. "The High Seas Tuna Fishery of California." Fish Bulletin no. 51. State of California, Department of Natural Resources, Division of Fish and Game of California Bureau of Marine Fisheries, 1938.
- Green, David. The Containment of Latin America: A History of the Myths and Realities of the Good Neighbor Policy. Chicago: Quadrangle Books, 1971.
- Hernández Fujigaki, Gloria. La Pesca a través de los informes presidenciales, 1825-1986. México, D.F. : Secretaría de Pesca, 1987.
- Katz, Friedrich. The Secret War in Mexico: Europe, the United States, and the Mexican Revolution. Chicago: University of Chicago Press, 1981.
- Kraljic, Frances. Croatian Migration to and from the United States, 1900-1914. Palo Alto: Raguan Press, 1978.
- Kumada, Tosio. Ed. Marine fishes of the Pacific coast of Mexico. Odawara: Nissan Fisheries Institute, 1937.
- McEvoy, Arthur F. The Fisherman's Problem: Ecology and Law in the California Fisheries, 1850-1980. New York: Cambridge University Press, 1990.
- Medina, Luis. Del cardenismo al avilacamachismo. México, D.F.: Colegio de México, 1978.
- Meyer, Lorenzo. Mexico and the United States in the Oil Controversy, 1917–1942, trans. Muriel Vasconcellos. Austin: University of Texas Press, 1972.
- Niblo, Stephen. War, Diplomacy, and Development: the United States and Mexico, 1938-1954. Wilmington, Del.: Scholarly Resources, 1995.
- Ota Mishima, María Elena. Siete migraciones japonesas en México, 1890-1978. México, D.F.: El Colegio de México, 1982.
- Philip, George. Oil and Politics in Latin America: Nationalist Movements and State Companies. Cambridge: Cambridge University Press, 1982.
- Schuler, Friedrich E. Mexico Between Hitler and Roosevelt: Mexican Foreign Relations in the Age of Lázaro Cárdenas, 1934-1940. Albuquerque, University of New Mexico Press, 1998.
- Steinbeck, John and Edward F. Ricketts. The Log from the Sea of Cortez. New York: Penguin Books, 1995.
- Wionczek, Miguel. El nacionalismo mexicano y la inversión extranjera. México, D.F.: Siglo Veintiuno, 1967.
- Wood, Bryce. The Making of the Good Neighbor Policy. New York: Columbia University Press, 1961.
- 日本語著作
- 網野善彦『海民と日本社会』新人物往来社, 1998年.
- 網野善彦『「日本」とは何か』講談社, 2000年.

- 井沢実『ラテンアメリカの日本人』国際問題研究所, 1972年.
- 石田雄『メヒコと日本人』東京大学出版会, 1973年.
- 伊藤敬一編『墨国を語る』非売品, 昭和31年.
- 移民研究会編『日本の移民研究—動向と文献目録Ⅰ明治初期 - 1992年9月』明石書店, 2008年.
- 移民研究会編『日本の移民研究—動向と文献目録Ⅱ1992年10月 - 2005年9月』明石書店, 2008年.
- 海野実『墨西哥・中米大観』メキシコ時報社, 1941年.
- 大島幸吉『欧米水産概観と我国水産業の発展策』厚生閣, 昭和8年.
- 岡本信夫『近代漁業発達史』水産社, 1965年.
- 岡本信夫『日本漁業通史』水産社, 昭和59年.
- 小川徹太郎『越境と抵抗—海のフィールドワーク再考』新評論, 2006年.
- 小沼勇『漁業政策百年—その経済史的考察』農産漁村文化協会, 昭和63年.
- 加藤平治『メキシカン・ラブソディー: 中南米貿易に賭けた男の炎熱人生』総合労働研究所, 1984年.
- 桑田透一編『国司浩助氏論叢』日本水産, 昭和14年.
- 小林茂夫『「海のバタ屋」の記録—自分史からの下関根拠・以西手繰船の戦後歴史の一断面』自由工房, 1994年.
- 駒込武『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店, 1996年.
- 酒向昇『日本のエビ漁業の沿革史』東京水産大学第9回公開講座編集委員会『日本のエビ・世界のエビ』成山堂書店, 1984年.
- 酒向昇『海老』ものと人間の文化史法政大学出版社, 1985年.
- 下啓助『明治大正水産回顧録』東京水産新聞社, 昭和7年.
- 白水智『知られざる日本—山村の語る歴史世界』NHKブックス, 2005年.
- 新保満『石をもて追われるごとく』御茶の水書房, 1973年.
- 新保満カナダ移民排斥史』未来社, 1996年.
- 鈴木玉之助『メキシコに於ける海陸共存の殖民』日墨兄弟社, 1931年.
- 大洋漁業八〇年史編纂委員会『大洋漁業八〇年史』大洋漁業, 1960年.
- 滝込太郎『親日の新興国メキシコの国情大観—植民七十年史』メキシコ新報社, 1968年.
- 滝口佐左エ門『太陽の国漁業使節紀行』焼津漁業協同組合, 昭和52年.
- 津田初二・中谷三男『船尾トロール入門』新生社, 昭和56年.
- 角山幸洋『榎本武揚とメキシコ殖民移住』同文館出版, 1986年.
- 富山一郎『暴力の予感—伊波普猷における危機の問題』岩波書店, 2002年.
- 南洋水産協会, 海洋漁業振興協会, 水政會[編]『海外漁業事情』南洋水産協会, 1937年.
- 日米新聞社編『在米日本人人名辞典』日米新聞社, 大正11年(復刻版『日系移民人名辞典<北米編>第一巻』日本図書センター, 1993年).
- 日墨協会日墨交流史編集委員会編『日墨交流史』PMC, 1990年.
- 日本人メキシコ移住史編纂委員会『日本人メキシコ移住史』1971年.
- 日本水産『日本水産50年史』日本水産, 1961年.

日本貿易振興協會編『メキシコの貿易』日本貿易振興協會, 1943

松井佳一『メキシコ風土誌』育生社, 昭和40年.

松本三四郎『メヒコで百年』1977年.

三島康雄・小野征一郎『水産業界』教育社新書, 1976年.

村井吉敬『エビと日本人』岩波新書, 1988年.

村川庸子『アメリカの風が吹いた村—打瀬船物語』1987年.

吉永武市『以西底曳漁業経営史論』九州大学出版会, 1980年.

吉山基徳『我等の発展地メキシコ』日本植民通信社, 昭和5年.

テレビ番組

NHK 衛星第一放送『ウィークエンドスペシャル「トロはこうしてつくられる～南オーストラリア・マグロ戦略～」』2002年7月7日放映

「台所から地球が見える(2)消えたマイワシの謎」『素敵な宇宙船地球号』第358回
(テレビ朝日2004年11月14日放映)

NHK 衛星第二放送「地球に好奇心 海の闘牛—マツタンツァ ～シチリア・マグロ漁師の誇り～」(2003年7月26日放映)

定期刊行物

Pacific Fisherman

『水産界』

Web Pages

The Journal of San Diego History <http://www.sandiegohistory.org/journal/journal.htm>

Aveces Nishikawa 論文 <http://www.uabc.mx/historicas/Revista/Vol-I/Numero%201-8/index-numero1-8.htm>

八幡浜市打瀬船

http://www.city.yawatahama.ehime.jp/02shoukai/06_paionia/02_dasebune/dasebune.htm

麻島論文 <http://www.senshu-u.ac.jp/~off1009/PDF/asajima.pdf>

サウザル市缶詰労働者住宅 <http://www.mapasmexico.net/googlemaps-puerto-el-sauzal.html>

Dalmatian-American Club of San Pedro <http://dalmatianamerican.com/history.html>

Terminal Island Life History Project

<http://content.cdlib.org/xtf/view?docId=kt367n993t&query=0&brand=calisphere>

APPENDIX

Japanese Fishing Boats and Fishermen: October 1940 – October 1941	Object Name: Records; ID Number: 94.141.1; Location: 22.C.1 Box 8, Japanese American National Museum
The following survey of the fishing boats operated out of Los Angeles Fish Harbor by the Alien Japanese and American Japanese is based on the record of the Southern California Japanese Fishermen's Association for the fishing season of October, 1940 – October, 1941.	

BOATS			
Size (Tonnage)	Type	Number Of Boats	Total Tonnage
21 – 69	Purse-seiner	36	1448
6 – 13	Hook & Line	10	77
1/2 – 4 1/2	Jig Boats	40	63
Total		86	1588

Notes: Of 36 Purse-seiners, 9 were chartered by the American-Japanese from Caucasian owners in the state of Washington for Sardine season only, and they did not participate in mackerel nor tuna fishing.

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Cape Flattery	241 146	69	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Jangard, Sverre	3426 W. 57 Seattle, Washington	U.S.A	
Master	Hestad, Anders	2246 W. 62 Seattle, Washington	U.S.A	
Net Owner	Shiono, Ryuko	779 Tuna St.	Japanese	
Fish Boss	"	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Hestad, Andrer	x	
	2	Fossum, Oscar Raymond	x	
	3	Ogawa, Yukio	x	
	4	Shimon, Ryuko		x
	5	Endo, Seisaku		x
	6	Komiya, Sani		x
	7	Sakurada, Akira		x
	8	Okuno, Daikichi		x
	9	Kawaguchi, Asakichi		x
	10	Inouye, Kyuji		x
	11	Suzuki, Kakutaro		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Port Hueneme	210,970	64	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Oxnard Harbor District	Port Hueneme		
Master	Sakoda, Carl Masazo	176-C Terminal Way	U.S.A.	
Net Owner	Miyagishima, Torasaku	323-C Cannery St.	Japanese	
Fish Boss	"	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Sakoda, Carl Mazaso	x	
	2	Miyagishima, Torasaku		x
	3	Miyagishima, Genkichi		x
	4	Miyagishima, Inokichi		x
	5	Sakai, Masayoshi	x	
	6	Sato, Frank	x	
	7	Saika, Yoshio	x	
	8	Higashi, Tsutomu	x	
	9	Tanaka, Sadakichi		x
	10	Morioka, Yoshimatsu		x
	11	Kageyama, Yonetaro		x
	12	Mio, Masujiro		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Clipper	227,235	59	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Smeland, John	Tacoma, Washington	U.S.A.	
Master	Nakagawa, Kiyoshi	113-D Cannery St.	"	
Net Owner	"	"	"	
Fish Boss	Nakagawa, Jinmatsu	Box 184 Terminal Is.	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Nakagawa, Kiyoshi	x	
	2	Shishido, Stanley	x	
	3	Nakashima, Moritaka	x	
	4	Kishishita, Tadashi	x	
	5	Nakagawa, Jinmatsu		x
	6	Tsuno, Toshhitsura		x

	7	Matsutsuyu, Ichitaro		x
	8	Muramoto, Shigeichi		x
	9	Endow, Sigejiro		x
	10	Sakai, Yasuhei		x
	11	Kodani, Tsutomu	x	

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Nancy Hanks	234,822	53	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Nancy Hanks Fishing Co., N.J. Kuglis, President.	820 Way St., T.I.		
Master	Shimizu, Seichi	161-C Cannery St.	U.S.A.	
Net Owner	Suzuki, Yohei; Suzuki, Masazo; Tsuchiyama, Hyoshikazu	225-C Cannery St.	Japanese	
Fish Boss	Suzuki, Yohei	225-C Cannery St.	Japanese	
Crew Members	1	Shimizu, Seiichi	x	
	2	Shintani, Takao	x	
	3	Suzuki, Yohei		x
	4	Suzuki, Masazo		x
	5	Shibata, Koichiro		x
	6	Shiba, Shokichi		x
	7	Fujitani, Keisaburo		x
	8	Miyagishima, Kitaro		x
	9	Miyagishima, Eimatsu		x
	10	Miyagishima, Kinsaku		x
	11	Endo, Chosaku		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	City of Avalon	236,762	50	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Kawashiri, Yoshito	112-B Terminal Way	U.S.A.	
Master	Hara, Toshio	622 Seaside Avenue	"	
Net Owner	Kawashiri, Yoshito	112-B Terminal Way	"	
Fish Boss	"	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Kawashiri, Yoshito	x	

	2	Hara, Toshio	x	
	3	Endo, Eimatsu		x
	4	Morishita, Magozaemo		x
	5	Itoya, Shokichi		x
	6	Sugimoto, Ted	x	
	7	Kondo, Richard	x	
	8	Nakano, June	x	
	9	Nishida, Tom T.	x	
	10	Asari, Sakuo	x	
	11	Nozaki, Yoshikazu	x	

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	St. Joseph	230,052	49	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Sea Pride Packing Corp. Ltd.	Terminal Island, CA		
Master	George Yamasaki	208-B Terminal Way Terminal Isl, CA	U.S.A.	
Net Owner	Kanejiro Kawashima	210-B Terminal Way	Japanese	
Fish Boss	Kanejiro Kawashima	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Kawashima, Kanejiro		x
	2	Yamasaki, George	x	
	3	Kawashima, Tokichi		x
	4	Shiba, Zensuke		x
	5	Kawaguchi, Hikotaro		x
	6	Ogura, Toshiya	x	
	7	Kenmotsu, Yasuo		x
	8	Fukuhara, Shoji	x	
	9	Hara, Takuzo		x
	10	Sakaniwa, Tomiwo	x	
	11	Furugori, Kutaro		x
	12	Nakata, Yasujiro		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Old Timer	228 070	49	
	Name	Address	Citizenship	

Boat Owner	Sea Pride Packing Corp.	241 Fish Harbor, Terminal Island, CA		
Master	Kaino, Kiyoshi	184-B Terminal Way	U.S.A.	
Net Owner	Hori, Isaburo	175-D Cannery St.	Japanese	
Fish Boss	"	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Kaino, Kiyoshi	x	
	2	Takido, Kanekichi		x
	3	Kishiyama, Jusaku		x
	4	Yoshioka, Asagoro		x
	5	Shibata, Minejiro		x
	6	Hamasaki, Uzuhiiko	x	
	7	Matsubara, Tadayoshi		x
	8	Kubota, Saichiro		x
	9	Oishi, Sakae		x
	10	Asahi, Kotaro		x
	11	Hori, Isaburo		x
	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Britannia			
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Britannia Fishing Corp.	Fish Harbor, Terminal		
Master	Kobata, Masanobu	139-E Cannery St.	U.S.A.	
Net Owner	Britannia Fishing Corp.			
Fish Boss	Ryono Michihiko	701 Tuna St.	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Kobata, Masnobu	x	
	2	Ryono, Michihiko		x
	3	Higashi, Toshiji	x	
	4	Yutani, Eizo	x	
	5	Ryono, Yukizo		x
	6	Nishi, Kikuo		x
	7	Suzuki, Toyojiro		x
	8	Tada, Hiehiro		x
	9	Wada, Yukichi		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Ubuyu Maru II		47	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Hashimoto, Tatsuichi	107-D Terminal St.	U.S.A.	
Master	"	"	"	
Net Owner	Hashimoto, Ryokichi	"	Japanese	
Fish Boss	Hashimoto, Tatsuichi	"	U.S.A.	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Hashimoto, Tatsuichi	x	
	2	Hashimoto, Yoshio	x	
	3	Terada, Ryoichi	x	
	4	Inouye, Tomoichi	x	
	5	Okuno, Kazuo	x	
	6	Hashimoto, Ryokichi		x
	7	Endo, Isaku		x
	8	Miyagishima, Shosaku		x
	9	Wada, Y.		x
	10	Okumura, Esuo		x
	11	Takeuchi, Chosuke		x
	7	Suzuki, Toyojiro		x
	8	Tada, Hiehiro		x
	9	Wada, Yukichi		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Ubuyu Maru II		47	
	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Ubuyu Maru II		47	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Hashimoto, Tatsuichi	x	
	2	Hashimoto, Yoshio	x	
	3	Terada, Ryoichi	x	
	4	Inouye, Tomoichi	x	
	5	Okuno, Kazuo	x	
	6	Hashimoto, Ryokichi		x
	7	Endo, Isaku		x

	8	Miyagishima, Shosaku		x
	9	Wada, Y.		x
	10	Okumura, Esuo		x
	11	Takeuchi, Chosuke		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Johnny Boy	230 278	47	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Sea Pride Packing Corp.			
Master	Takata, Ken	240-A Terminal Way	U.S.A.	
Net Owner	Inaba, Meisaku	"	Japanese	
Fish Boss	"	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Takata, Ken	x	
	2	Inaba, Heisaku		x
	3	Kuwahara, Keiji		x
	4	Takayama, Kichitaro		x
	5	Murakami, Seihhichi		x
	6	Kubota, Takejiro		x
	7	Hayashi, Jusuke		x
	8	Mukai, Yoshio		x
	9	Nagano, Masaji		x
	10	Kubota, Waichi		x
	11	Tokuno, Nobutsugu	x	

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Excellent	927 683	45	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Rako, Louis	3118 N. 32nd St., Tacoma, WA	U.S.A.	
Master	"	"	"	
Net Owner	Kato, Nobuichi	251-B Albicore St.	Japanese	
Fish Boss	"	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Rako, Louis	x	
	2	Kato, Nobuichi		x
	3	Yoshida, Seiji		x

	4	Nakaji, Nehei		x
	5	Higashi, George	x	
	6	Yoshimoto, Yutaka,	x	
	7	Oura, Matsuichiro		x
	8	Tanikawa, Tokichi		x
	9	Iwasaki, Kiyoshi		x
	10	Nagakura, Denkichi		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Marie	229 418	45	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Marie Fishing Corp.	117-A Cannery St.		
Master	Kadonaga, Kiyoshi	188 Albicore St.	U.S.A.	
Net Owner	Kadonaga, Hiroichi	117-A Cannery St.	Japanese	
Fish Boss	"	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Kadonaga, Kiyoshi	x	
	2	Kadonaga, Hikoichi		x
	3	Takeuchi, Tomekichi		x
	4	Yabumoto, Sazahiko		x
	5	Hamasaki, Oihe Charles		x
	6	Fujimi, Suteshiro		x
	7	Hotta, Masujiro		x
	8	Naito, Kiyooki	x	
	9	Naito, Masao	x	
	10	Mui, Frank	x	

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Jimmy Boy	240 699	45	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	De Polo, James; Ursich, Joseph	2801 M. Starr Street, Tacoma, WA	U.S.A.	
Master	Mirosevich, John	2302 Norton Avenue, Everett, WA	"	
Net Owner	Tani, Nobuichi	250 1/2 Terminal Way	Japanese	
Fish Boss	"	"	"	

		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Mirosevich, John	x	
	2	Tani, Nobuichi		x
	3	Yabumoto, Seizo		x
	4	Matsunami, Tomoji		x
	5	Hatashita, Toshiomi	x	
	6	Tani, W. Yoshiji		x
	7	Okumura, Toshibumi	x	
	8	Shibata, Kosaburo		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	St. Anthony	229 566	43	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Rabich, Anton	Box 15, Gig Harbor, WA	U.S.A.	
Master	Dukich, Mickey	Tacoma, WA	"	
Net Owner	Nakagawa, Kiyoshi	113-D Cannery St.	"	
Fish Boss	Nakasuji, Seichi	307-Bcannery St.	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Dukich, Mickey	x	
	2	Nakamura, Meiji		x
	3	Suzuki, Matsunosuke		x
	4	Suzuki, Kamejiro		x
	5	Iwasaki, Denjiro		x
	6	Hagiwara, Haarukichi		x
	7	Taniguchi, Ichisuke		x
	8	Tani, Dentaro		x
	9	Shono, Shigejiro		x
	10	Yamashita, Sansuke		x
	11	Nakasuji, Seichi		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Limited	228 629	39	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	French Sardine Co.	Terminal Island, CA		
Master	Oka, Sadao	333-C Cannery St.	U.S.A.	
Net Owner	Oka, Sadao	"	"	

Fish Boss	Oka, Juro	"	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Oka, Sadao	x	
	2	Oka, Juro		x
	3	OKa, Tomegoro		x
	4	Oka, Mitsushige	x	
	5	Ogura, Fujimatsu		x
	6	Ishikawa, Hanzaburo		x
	7	Ishikawa, Kichichu		x
	8	Horita, Daiyi		x
	9	Ito, Kumao		x
	10	Minami, Jitsuchi		x
	11	Murata, Teizo		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	"New World"		38	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Van Camp Sea Food Co.	Terminal Isl., CA		
Master	Verney, Paul	c/o Van Camp Sea Food Terminal Isl., CA	U.S.A.	
Net Owner	Nurakami, H.T.	151-B Cannery St.	Japanese	
Fish Boss	"	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Verney, Paul	x	
	2	Murakami, H.T.		x
	3	Ike, Kazuo	x	
	4	Sakaue, John Masaharu	x	
	5	Okuno, Katsumi	x	
	6	Yota, Isao	x	
	7	Fujii, Fusakazu	x	
	8	Murakami, Katsutoshi		x
	9	Morii, Kazutaro		x
	10	Miyagishima, Katsuzo		x
	11	Higashi, Hikoza		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
--	------	--------------	-------------	--

Boat	Helen L	228 479	38	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Lisicich, Peter	2812 N. 28th St.Tacoma, WA	U.S.A.	
Master	"	"	"	
Net Owner	Hamano, George	143-D Cannery St.	"	
Fish Boss	"	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Lisicich, Peter	x	
	2	Hamano, George	x	
	3	Hamano, Garrett	x	
	4	Hamano, Shogo	x	
	5	Nakamura, Shigeru	x	
	6	Namiki, Isao	x	
	7	Shigekawa, Hideo	x	
	8	Naito, Kisaku		x
	9	Yokobata, Eijiro		x
	10	Kurata, Itsuo		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Frances	228 793	38	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Ivanovich, Mato	P.O. Box 8 Gig Harbor, WA	U.S.A.	
Master	Tonai, Gunji	133 1/2E Cannery St.	"	
Net Owner	Nurata, Kinzo	255-A Cannery St.	Japanese	
Fish Boss	"	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Tonai, Gunji	x	
	2	Murata, Kinzo		x
	3	Murakami, Isami	x	
	4	Honsho, Jirokichi		x
	5	Nishi, Saiji		x
	6	Kuribayashi, Hitoshi		x
	7	Kon, Riyokichi		x
	8	Asano, Ukichi		x
	9	Watanabe, Gengoro		x

	10	Shimizu, Kiyoshide		x
	11	Honda, Takezo		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Siella	228 092	37	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Fukuzaki, George	173-A Cannery St.	U.S.A.	
Master	"	"	"	
Net Owner	Fukuzaki, Ben	"	"	
Fish Boss	Fukuzaki, George	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Fukuzaki, George	x	
	2	Fukuzaki, Ben	x	
	3	Okita, Katsuo	x	
	4	Chikami, Minoru	x	
	5	Shitara, Chiko	x	
	6	Yoshino, Gonkichi		x
	7	Yasuda, Yoshihiko		x
	8	Kishiyama, Chiyomatsu		x
	9	Tsubokura, Toshio Paul		x
	10	Namiyoshi, Teizo		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Milwaukee		37	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Van Camp Sea Food Co.	Terminal Isl., CA		
Master	Napier, W.	609 N. Seaside Avenue Terminal Island, CA	U.S.A.	
Net Owner	Endo, Noboru	143-C Cannery St., Terminal Island, CA	U.S.A.	
Fish Boss	Kawaguchi, E.	"	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Napier, Wm.	x	
	2	Kawaguchi, Eisaku		x
	3	Kawaguchi, Tadao	x	
	4	Tanimoto, Muneyasu		x

	5	Endo, Bungi		x
	6	Endo, Otohechi		x
	7	Endo, Koichi	x	
	8	Endo, Kintaro		x
	9	Endo, Yoshio		x
	10	Kubota, Tokutaro		x
	11	Yuhashi, James T.	x	
	12	Hama, Shinazo		x
	13	(?? Sheet cut off here)		

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Star	220 384	37	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	American Fishing Vessel Star Inc.	241 Fish Harbor Wharf Terminal Island, CA		
Master	Matsushita, Shiro	218-B Terminal Bay	U.S.A.	
Net Owner	hamaguchi, Fukujiro	262 Cannery St.	Japanese	
Fish Boss	"	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Matsushita, Shiro	x	
	2	Hamaguchi, Fukujiro		x
	3	Tsuji, Tsuneemon		x
	4	Uyeda, Mototaro		x
	5	Segimoto, Katsutaro		x
	6	Ozaki, Hachiro		x
	7	Hayashi, Akisuke		x
	8	Kawauchi, Kojiro		x
	9	Uyeda, Takeshi	x	
	10	Oshima, Kazuji	x	
	11	Abe Yoshio	x	

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Linde	237 438	37	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Abe Shoichi	121-E Cannery St.	U.S.A.	
Master	"	"	"	

Net Owner	"	"	"	
Fish Boss	"	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Abe, Shoichi	x	
	2	Sato, Kikujiro		x
	3	Kariya, Hajime	x	
	4	Tagawa, Yoshito	x	
	5	Iwamae, Yoshio	x	
	6	Irizawa, Tokjiro		x
	7	Ogawa, Gentaro		x
	8	Shiozaki, Kiyoshi	x	
	9	Matsutani, Heiji	x	
	10	Ichikawa, Tazo		x
	11	Aoyagi, Eijo		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Concord	225 590	37	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	South Coast Fisheries	820 Way St.		
Master	Morita, Shigeo	633 Tuna St.	U.S.A.	
Net Owner	Matsuno, Gisaburo	"	Japanese	
Fish Boss	"	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Norita, Shigeo	x	
	2	Masuno, Gisaburo		x
	3	Tanaka, Mitsusaburo		x
	4	Kageyama, Hirao	x	
	5	Kunisho, Noichi		x
	6	Naito, T.		x
	7	Katsumatga, Chojuro		x
	8	Fujii, Minoru		x
	9	Yamashina, Ryozo		x
	10	Hamaguchi, Seikichi		x
	11	Takeoka, Takeshi		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
--	------	--------------	-------------	--

Boat	Progress	226 376	36	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Sea Pride Packing			
Master	Higashi, Michio	237 Pilchard St.	U.S.A.	
Net Owner	Shono, Tomohei	307-C Cannery St.	Japanese	
Fish Boss	"	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Higashi, Michio	x	
	2	Shono, Tomohei		x
	3	Miyama, Akira		x
	4	Kayohara, Magosuke		x
	5	Maeda, Naoichi		x
	6	Nishizawa, Hidesato	x	
	7	Ido, Yoshihei		x
	8	Masuda, Yoshimatsu		x
	9	Yutani, Sakuzo		x
	10	Monzen, Chiosaku		x
	11	Ige, Kamaroku		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Genevieve H	228 355	35	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	French-Sardine	Terminal Island, CA		
Master	Hiraga, Minoru	160-A Terminal Way	U.S.A.	
Net Owner	Hiraga, Sokichi	"	Japanese	
Fish Boss	Hiraga, Sokichi	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Hiraga, Sokichi		x
	2	Hiraga, Minoru	x	
	3	Hiraga, Shizuo	x	
	4	Maeda, Otojiro		x
	5	Hamaguchi, Tetsuo		x
	6	Sakashita, Roikitaro		x
	7	Tanino, Kumakichi		x

	8	Takade, Kazuo	x	
	9	Hayashi, Edward	x	
	10	Maetani, Yoichi		x
	11	Ogawa Enroku		x
	12	(Unknown, sheet cut off here)	x	

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	George A	226 361	35	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Sea Pride Packing Corp.	Terminal Island, CA		
Master	Marumoto, Hitoshi	139-A Cannery St.	U.S.A.	
Net Owner	Sumi, Risaburo	161-B Cannery St.	Japanese	
Fish Boss	"	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Marumoto, Hitoshi	x	
	2	Sumi, Risaburo		x
	3	Murata, Takekuma		x
	4	Kondo, Shiro		x
	5	Nakane, Buntaro		x
	6	Koyama, Sankichi		x
	7	Sarae, Tokutaro		x
	8	Obata, Keiji		x
	9	Tashima, Tokujiro		x
	10	Hinoki, Minoru	x	
	11	Kitagawa, Kejiro		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	San Joaquin	224 967	35	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Van Camp Sea Food Co.	Terminal Island, CA		
Master	Brooks, Orin	920 S. Central San Pedro, CA	U.S.A.	
Net Owner	Seko, H.K.	165-A Cannery St.	Japanese	
Fish Boss	"	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Brooks, Orin	x	
	2	Seko, H.K.		x

	3	Tayama, Jimmie	x	
	4	Hamaguchi, Masakazu	x	
	5	Tanaka, Kenneth	x	
	6	Shigekawa, Kiyoshi	x	
	7	Shigei, Kiyoshi	x	
	8	Ito, Tadashi		x
	9	Matsutaka, Kikimatsu		x
	10	Higashi, Hyoshiemon		x
	11	Kamemoto, Sutenosuke		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Richness II	236 662	34	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Richness Fishing Corp.	Coast Fishing Co., Wilmington, CA		
Master	Msai, Harry	219-A Albicore St., T.I.	U.S.A.	
Net Owner	"	"	"	
Fish Boss	"	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1			
	2			
	3			
	4			
	5			
	6			
	7			
	8			
	9			
	10			
	11			

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Richard II	236 662	34	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Richness Fishing Corp.	Coast Fishing Co. Wilmington, CA		

Master	Masai, Harry	219-A Albicore St., T.I.	U.S.A.	
Net Owner	"	"	"	
Fish Boss	"	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Masai, Harry	x	
	2	Arihara, Zenichiro		x
	3	Fujinami, Kaoru		x
	4	Kawaguchi, Chuichiro		x
	5	Miyamoto, Einosuke		x
	6	Miyyagishima, Chosaku		x
	7	Nakaiye, Shoichi		x
	8	Shimono, Sadayoshi		x
	9	Yamasaki, Goro		x
	10	Yamasaki, Zenichi		x
	11	Uyeda, Yoshikazu	x	

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Dorothy Joan	226 628	34	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Madesich, John A.	2101 Grand Ave., Everett, WA	U.S.A.	
Master	Fujii, Yoshikazu	113-A Cannery St.	"	
Net Owner	Fujii, Frank F.	113-A Cannery St.	"	
Fish Boss	Masushita, Shichigoro	139-C Cannery St.	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Fujii, Yoshikazu	x	
	2	Matsushita, Shichigoro		x
	3	Ryono, Masukichi		x
	4	Hatanaka, Takeyuki		x
	5	Minamigi, Tomekichi		x
	6	Kinami, Shikaji		x
	7	Higashi, Jinnosuke		x
	8	Sears, James Ira	x	
	9	Honda, Asajiro		x
	10	Watanabe, Yoshio		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
--	------	--------------	-------------	--

Boat	Orion	225 760	33	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Orion Corporation	Sea Pride Pack. Co. Terminal Island, CA		
Master	Okamoto, Mitsuo	147 N. Seaside Ave.	U.S.A.	
Net Owner	Yoshida, Kiichi; Nakata, Shikanosuke	334 No. Ocean Ave.	Japanese	
Fish Boss	Nakata, Shikanosuke	236-A Cannery St.	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Okamoto, Mitsuo	x	
	2	Yoshida, Kiichi		x
	3	Nakata, Shikanosuke		x
	4	Shintani, Shigeo	x	
	5	Miura, Akitsura	x	
	6	Yoshida, Riichi	x	
	7	Seko, Isturo	x	
	8	Liest, Roster	x	
	9	Nakamura, Minosuke		x
	10	Iwata, Saikichi		x
	11	Okimoto, Fujisaburo		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Two Brothers	225 639	30	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Vitalich, Jack & Luka	4007 16 Avenue Seattle, CA	U.S.A.	
Master	Vitalich, Jack	"	"	
Net Owner	Kuramoto, Sadataro	165-C Cannery St.	Japanese	
Fish Boss	"	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Vitalich, Jack	x	
	2	Kuramoto, Sadataro		x
	3	Kuramoto, Saburo	x	
	4	Sakamot, Torao	x	
	5	Shimizu, Toraichi		x
	6	Kawato, Kumezo		x
	7	Misaka, Minoru		x

	8	Minami, Masajiro		x
	9	Takehara, Yoshitaro		x
	10	Kawano, Ejiro		x
	11	Fujita, Rokumatsu		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Golden Gate	218 131	28	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Fujii, Frank F.	113-A Cannery St.	U.S.A.	
Master	Fuji, Tsutomu	"		
Net Owner	Fujii, Frank F.	"	"	
Fish Boss	Fujii, Fusakichi	"	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Fujii, Tsutomu	x	
	2	Fujii, Fusakichi		x
	3			
	4			
	5			
	6			
	7			
	8			
	9			
	10			
	11			

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Standard II	23956	28	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Tani, George	118-B Terminal Way	U.S.A.	
Master	"	"	U.S.A.	
Net Owner	"	"		
Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Tani, George	x	
	2	Hatashita, Toichi		x
	3	Hatashita, Yutaka	x	

	4	Tani, Junji		x
	5	Morihara, Yoshihito	x	
	6	Tatsumi, Yukio	x	
	7	Takehara, Torataro		x
	8	Sakai, Hirosuke		x
	9	Tonai, Kambei		x
	10	Shioji Otoichi		x
	11	Okamoto, Sonosuke		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Bal	219 810	27	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	CoastFishing Co.	Wilmington, CA		
Master	Kai, Takumi	233-B Albicore St.	U.S.A.	
Net Owner	Kinoshita, Matsuzo	229-9 Albicore St.	Japanese	
Fish Boss	Ohi, Hisao	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Kai, Takumi	x	
	2	Kinoshita, Matsuzo		x
	3	Ohi, Hisao		x
	4	Sakahara, Kenji	x	
	5	Takaki, Minoru	x	
	6	Kinoshita, Takegi		x
	7	Miyasaka, Ginshiro		x
	8	Kusumoto, Shoichi		x
	9	Shimazu, Ichijiro		x
	10	Kawasaki, Jusuke		x
	11	Shiroyama, Kansaku		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Ohio III	230 164	22	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Van Camp Sea Food Co.	Termial Island, CA		
Master	Truman, W.C.	1219 S. Palos Verdes St., San Pedro, CA	U.S.A.	
Net Owner	Uyematsu, Tomiji	188 Albicore St.	"	

Fish Boss	Marumoto, Tomitaro	128-A Terminal Way	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Truman, W.C.	x	
	2	Uyematsu, Tomiji	x	
	3	Marumoto, Tomitaro		x
	4	Yabe, Seiji	x	
	5	Nakane, Kyoji		x
	6	Yoshioka, Rikimatsu		x
	7	Shimizu, Utsuke		x
	8	Kishisita, Yozo		x
	9	Hamada, Shigeichi		x
	10	Kubota, Fukujiro		x
	11	Shono, Gentaro		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Silver Gate		21	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Silver Gate Fishing Co.	c/o Coast Fishing Co., Wilmington, CA		
Master	Kobata, Yurao	136-Terminal Way, Terminal Isl., CA	U.S.A.	
Net Owner	Ryono, Asaichi	"	Japanese	
Fish Boss	Kobata, Yurao	"	U.S.A.	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Kotaba, Yurao	x	
	2	Ryono, Asaichi		x
	3	Seko, Haruo	x	
	4	Shirozono, Sunao	x	
	5	Kuramoto, Tsuneo		x
	6	Kobta, Murao		x
	7	Sujishi, Yasuke		x
	8	Ikebuchi, Yoshiwaka		x
	9	Saika, Jenpe		x
	10	Ryono, Densuke		x
	11	Moriyama Sakujiro		x

Name	Official No.	Net Tonnage		
Seaco II	240 962	13		
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Ida, Kikuzi	707 Tuna St.	U.S.A.	
Master	Okamoto, Hiroshi	158 Terminal Way	"	
Net Owner	Hamaguchi, Heizaburo	158 Terminal Way	Japanese	
Fish Boss	"	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Okamoto, Hiroshi	x	
	2	Mayetani, Yoichi		x
	3	Izumi, Kuichi		x
	4	Morisumi, Wjiro		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Uranus	240 683	9	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Maeda, kenichi	630 S. Seaside Ave.	U.S.A.	
Master	"	"	"	
Net Owner	"	"	"	
Fish Boss	Maeda, Yakichi		Japanese	Japanese
		Name in full	American	
Crew Members	1	Maeda, Kenichi	x	x
	2	Maeda, Yakichi		x
	3	Marumoto, Nubusaburo		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Sun Beam II	240 722	9	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Hatashita, Kimio	154-A Terminal Way	U.S.A.	
Master	Hatashita, Kazuya	"	"	
Net Owner	Hatashita, Kimio	"	"	
Fish Boss	Hatashita, Isohei	"	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Hatashita, Kazuya	x	
	2	Hatashita, Isohei		x
	3	Nitta, Fusajiro		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Naruto II	240 721	8	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Seko, Shimeko	150-A Cannery St.	U.S.A.	
Master	Seko, Tadao	243-E Cannery St.	U.S.A.	
Net Owner				
Fish Boss	Saka, Tomezo	218-A Cannery St.	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Seko, Tadao	x	
	2	Saka, Tamezo		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	K.S.Y.	240 824	8	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Kaino, Kioshi	184-B Terminal Way	U.S.A.	
Master	Moriyama, Miki	317-E Cannery St.	"	
Net Owner	Kaino, Kiyoshi	184-B Terminal Way	"	
Fish Boss	Asanuma, Yonejiro	317-E Cannery St.	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Moriyama, Miki	x	
	2	Asanuma, Yonejiro		x
	3	Asanuma, Tonasaburo		x
	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Aloha	216 423	6	

I saw his son at New Year Party

	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Okuno, Chiyeko	156-B Terminal Island Way	U.S.A.	
Master	Hayashi, Edward(I saw his son at New Year Party)	"	"	
Net Owner	Okuno, Chiyeko	"	"	
Fish Boss	Okuno, Daikichi	"	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Hayashi, Edward	x	
	2	Okuno, Daikichi		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Diana	240 300	6	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Hase, Kiyoshi	255-H Cannery St.	U.S.A.	
Master	"	"	"	
Net Owner				
Fish Boss	Hase, Kiyoshi	255-H Cannery St.	U.S.A.	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Hase, Kiyoshi	x	
	2	Hase, Yoshimatsu		x
	3	Tabata, Chushiro		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Sport Fisher I	27 B 234	6	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Cal. Marine Curing Co.	Terminal Island		
Master	Okimoto, Thomas	747 N. Seaside Ave.	U.S.A.	
Net Owner	"	"	"	
Fish Boss	"	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Okimoto, Thomas	x	
	2	Miyoshi, Sajiro		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Nereid			
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Wakatsuki, Woodrow	611 Barracuda St., Terminal Island	U.S.A.	
Master		Not listed		
Net Owner				
Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Not listed		
	2			
	3			

	4			
--	---	--	--	--

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Miyako	240 931	6	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Miyaki, Kazue (Minor) Marumoto, Yoshio	117-B Cannery St.; 592 W. 16th St. S.P.	U.S.A.; U.S.A.	
Master	Ochi, Akiji	165-D Cannery St.	U.S.A.	
Net Owner				
Fish Boss	Miyaki, Riyohei	117-B Cannery St.	Japanes	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Ochi, Akiji	x	
	2	Hama, Tokimatsu		x
	3	Miyaki, Riyohei		x
	4	Yoshimoto, Toyojiro		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Hoover	27 A 28	4.5	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Kinoshita, Otomatsu	133-B Cannery St.	Japanese	
Master	"	"	"	
Net Owner				
Fish Boss	Kinoshita, Otomatsu	133-B Cannery St.	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Kinoshita, Otomatsu		x
	2	Koji, Kamegoro		x
	3	Hiyane, Riyoyo	x	

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	T.Y.	27 C 85	4	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Yamamoto, Tomizo	254 Terminal Way	Japanese	
Master				
Net Owner	Yamamoto, Tomizo	254 Terminal Way	Japanese	
Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese

Crew Members	1	Yamamoto, Tomizo		x
--------------	---	------------------	--	---

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Pisa	27 A 951	4	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Okusu, Kunio; Sato, J.G.	102 Genoa, Terminal Is.	U.S.A.; Japanese	
Master	Yoshida, Frank Ka	"	Japanese	
Net Owner				
Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Yoshida, Frank Ka		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	"Nolia"	27 A 879	3	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Kishishita, Tadashi	161-D Cannery St., T.I.	U.S.A.	
Master				
Net Owner				
Fish Boss	Norizawa, Ichitaro	133 1/2-Cannery St.	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Morizawa, Ichitaro		x
	2	Okawauchi, Tojiro		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Takachiho	27 B 111	2.5	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Yamasaki, Yuji	176-C Terminal Way	Japanese	
Master				
Net Owner				
Fish Boss	Yamasaki, Yuji	176-C Terminal Way	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Yamashita, Yuji		x
	2	Kawagishi, Toshisuke		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
--	------	--------------	-------------	--

Boat	Smile	27 A 96	2.5	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Riujin M.	111-D Cannery St.	U.S.A.	
Master	"	"	"	
Net Owner	"	"	"	
Fish Boss	"	"	"	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Riujin, M.	x	
	2	Wakamura, Akio	x	

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	America	27 A 726	2.5	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Araki, Wai	251-A Cannery St.	Japanese	
Master	Araki, Minezo	"	"	
Net Owner				
Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Damaso	Philippino	

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	F. M.		2	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Mui, Frank	247 Cannery St.	U.S.A.	
Master				
Net Owner				
Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Mui, Frank	x	

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Tori Maru III	27 C 438	2	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Uyeda, Tatsumi	225-A Cannery St.	Japanese	
Master				
Net Owner				

Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Uyeda, Tatsumi		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	U. P.	27 A 539	2	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Honda, Takedo	125-A Cannery St.	Japanese	
Master				
Net Owner				
Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Honda, Takedo		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Isuzu	27 A 84	2	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Suzuki, Yataro	171 Ontario Walk	Japanese	
Master	Suzuki, Yataro	"	"	
Net Owner				
Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Suzuki, Yataro		x
	2	Uyeda, Tatsumi		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Maiden No. II	27 A 119	2	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Kimura, Otomatsu	250 C-3 Albicore St.	Japanese	
Master				
Net Owner				
Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Kimura, Otomatsu		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
--	------	--------------	-------------	--

Boat	H. O.	27 A 197	1.5	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Okumura, Hiroji	243 Cannery St.	Japanese	
Master				
Net Owner				
Fish Boss	Okumura, Hiroji	243 Cannery St.	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Okumura, Hiroji		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	"Sunflower"	27 A 468	1.5	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Nakachi, Shirozaku	175-B Cannery St.	Japanese	
Master				
Net Owner				
Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Nakachi, Shirozaku		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	"K. N."	27 A 69	1.5	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Nakaji, Kashichi	625 Tuna St., T.I.	Japanese	
Master				
Net Owner				
Fish Boss	Nakaji, Kashichi	625 Tuna St., T.I.	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Nakaji, Kashichi		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	M. K.	27 A 213	1.5	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Kaino, Masataka	121-C Cannery St.	U.S.A.	
Master				
Net Owner				
Fish Boss	Tsutsumi, Saburo	121-C Cannery St.	Japanese	

		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Tsutsumi, Saburo		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	P. H. I.	27 A 189	1.5	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Naito, Yasutaro	250-A-1 Albicore St.	Japanese	
Master				
Net Owner				
Fish Boss	Naito, Yasutaro	250-A-1 Albicore St.	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Naito, Yasutaro		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Hero	27 E 397	1.5	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Shioji, Hiroshi	150-B Terminal Way	U.S.A.	
Master				
Net Owner				
Fish Boss	Shioji, Utaro	150-B Terminal Way	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Shioji, Utaro		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	"Harriett"	27 G 288	1	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Akagi, Hiroshi	228-C Cannery St.	U.S.A.	
Master				
Net Owner				
Fish Boss	Ryono, Kandayu		Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Ryono, Kandayu		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Queen	27 A 24	1	
	Name	Address	Citizenship	

Boat Owner	Tanishita, Geo. H.O.	244-B Pilchard St.	Japanese	
Master				
Net Owner				
Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Tanishita, Geo. H.O.		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	M. O.	27 A 67	1	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Okayama, Matajiro	250 C-8 Albicore St.	Japanese	
Master				
Net Owner				
Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Okayama, Matajiro		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Vim	27 A 204	1	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Kaino, Namishiro	240-A Pilchard St.	Japanese	
Master				
Net Owner				
Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Kaino, Namishiro		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Asahi		1	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Shindo, Tomosato	124-B Terminal Way	Japanese	
Master				
Net Owner				
Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Shindo, Tomosato		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	T. J.	27 A 66	1	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Jow, Tado	250 C-5 Albicore St.	Japanese	
Master				
Net Owner				
Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Jow, Tado		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	N. S.	27 A 73	1	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Shintani, Nakayemon	223-B Albicore St.	Japanese	
Master				
Net Owner				
Fish Boss	Shintani, Nakayemon	223-B Albicore St.	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Shintani, Nakayemon		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	City of S.	27 A 107	1	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Terada, Deoichi	117-D Cannery St., T.I.	U.S.A.	
Master				
Net Owner				
Fish Boss	Terada, Ryotaro	117-D Cannery St., T.I.	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Terada, Ryotaro		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Jonnie Boy	27 C 561	1	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Ohara, Jirozo	161-E Cannery St.	Japanese	
Master				

Net Owner				
Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Ohara, Jirozo		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	E. M. Y.		1	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Nagashima, Chotaro	430 So. Mesa St., S.P.	Japanese	
Master				
Net Owner				
Fish Boss	Nagashima, Chotaro	430 So. Mesa St., S.P.	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Nagashima, Chotaro		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Angel	27 A 227	1	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Yamamoto, Yuwamatsu	110 Terminal Way	Japanese	
Master				
Net Owner				
Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Yamamoto, Yuwamatsu		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	K.S. T.	27 F 811	1	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Shibata, Keizo	121-A Cannery St.	Japanese	
Master				
Net Owner				
Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Shibata, Keizo		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
--	------	--------------	-------------	--

Boat	"T. I."	27 A 78	1	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Inouye, Tomoichi	121-B Cannery St.	U.S.A.	
Master				
Net Owner				
Fish Boss	Inouye, Tomojiro	121-B Cannery St.	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Inouye, Tomojiro		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Tsubaki	27 A 54	1	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Hashimoto, Kazuichi	757 Tuna St.	Japanese	
Master	Isomura, Hirota	243 Cannery St.	"	
Net Owner				
Fish Boss	Isomura, Hirota	243 Cannery St.	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Isomura, Hirota		x
	2	Hoshiya, Fred		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Skipper	27 C 457	1	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Yamamoto, Takichi Yoshiaki	317-B Cannery St.	Japanese	
Master				
Net Owner				
Fish Boss	Yamamoto, Takichi Yoshiaki	317-B Cannery St.	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Yamamoto, Takichi Yoshiaki		x
	2	Otsuka, Nakakichi		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Virginia		1	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Zennosuke Iwamae	120 Scranton Walk	Japanese	
Master				

Net Owner				
Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Zennosuke Iwamae		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Mio		1	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Harada, M.	115 1/2 Scranton Wlk	Japanese	
Master				
Net Owner				
Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Harada, M.		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Dixie		1	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Nishino, Jack	120-B Terminal Way	U.S.A.	
Master				
Net Owner				
Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Nishino, Jack	x	

	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Delmonte		1	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Nishino, Ichimatsu	356 Terminal Way	Japanese	
Master				
Net Owner				
Fish Boss				
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Nishino, Ichimatsu		x

	Name	Official No.	Net Tonnage	
--	------	--------------	-------------	--

Boat	S. M. K.	27 A 72	1/2	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Miki, Sangoro	165-D Cannery St.	Japanese	
Master				
Net Owner				
Fish Boss	Miki, Sangoro	165-D Cannery St.	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Miki, Sangoro		x
	Name	Official No.	Net Tonnage	
Boat	Pelican	27 A 19	1/2	
	Name	Address	Citizenship	
Boat Owner	Honsho, Jirokichi	317-D Cannery St., T.I.	Japanese	
Master				
Net Owner				
Fish Boss	Takamori, Masaji	173-D Cannery St., T.I.	Japanese	
		Name in full	American	Japanese
Crew Members	1	Takamori, Masaji		x
	2	Takahashi, Hideo		x

Tuna Clippers

	Name	Net Tonnage	no. of crews	Nisei
Boat	Marico	107		2
Boat Owner	Van Camp Sea Food			
Master	Caucasian			
Net Owner				
Fish Boss	Torao Takahashi			
	Santa Margarita	107		3
Boat Owner	Franco Italian Packing Co.			
Master	Caucasian			
Net Owner				
Fish Boss	M. Iwasaki			
	Sea Boy	107		none
Boat Owner	Franco Italian Packing Co.			
Master	Caucasian			
Net Owner				

Fish Boss	Kiyoo Yamashita			
	Cipango	95		4
Boat Owner	Cipango Co.			
Master	Benji Hara			
Net Owner				
Fish Boss	Iichiro Ono			